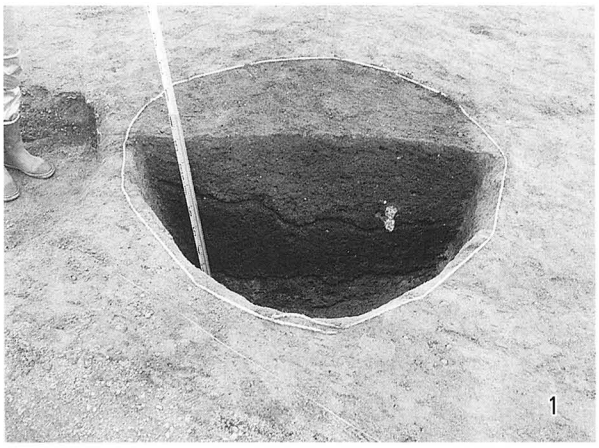
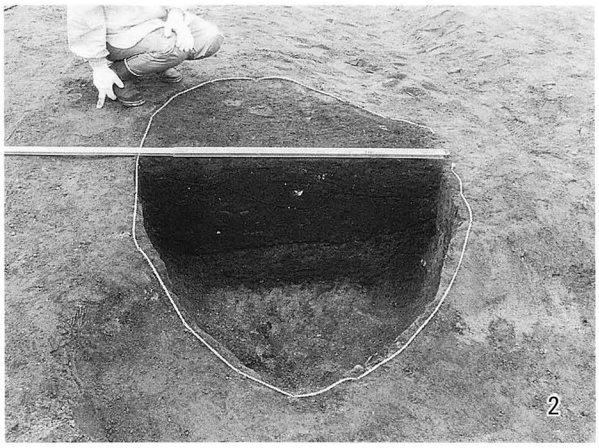
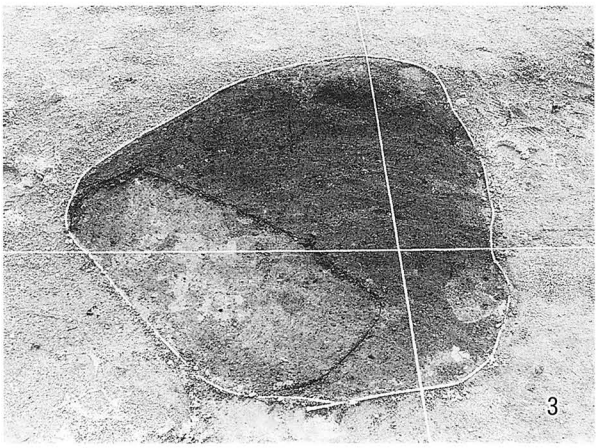
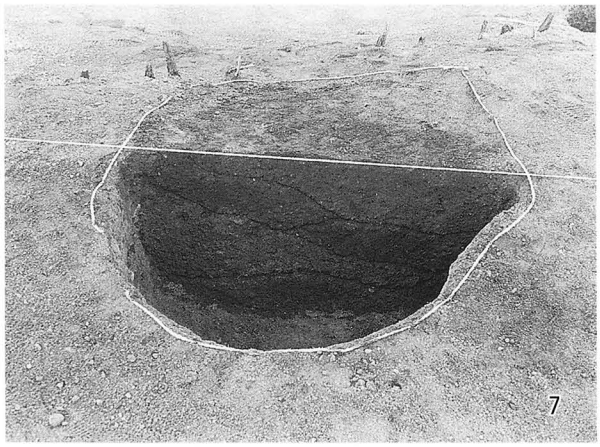





1：SB11　P３（南から）
2：〃　P４（　〃　）
3：〃　P６（北西から）
4：〃　P７（東から）
5：SB12　P７（南西から）
6：〃　P８（西から）
7：〃　P９（　〃　）

Fig.215　SB11・12 柱穴写真

### ８．溝と柵列による方形区画
### SD32・SD33・SA03

（位置と配置）溝跡SD32とSD33、柵列SA03は整然と配置され一連の方形区画を構成する遺構群である。Ｇ２区の南西隅、前述の建物による方形区画SB11・SB12と同位置に方位を違えて配置される（全体図Fig. 210、周辺図Fig. 172、写真Fig. 211）。

（方位）いずれも方位座標軸にほぼ一致するが、柵列SA03の柱筋で見る限り厳密にはごくわずか時計回り方向に振れている。南北列（P15～P22）でＮ－２°－Ｅである。溝の軸方位は厳密に見極めにくいが、SA03と均等間隔が保たれており、上記の方位と一致するとみて良い。

（溝の規模）SD32は東西に長さ19m検出し、さらに西に調査区外へと続く。SD33は東西16m（内法は15m）で直角に南に折れ、南北長さ18.6m検出したが調査区外へと続いている。両溝の間には方形区画の溝が切れる部分が長さ８mにわたって存在している。これを含めた方形区画の東西検出長は43mで、さらに西方向へと続く。なお溝が切れる部分は方形区画への出入口としての機能をもつ可能性がある。少なくとも調査区内ではSD32が南に折れる様子はみられないため、この出入口部分は方形区画の中軸線上にあるとは考えられず、東側に寄った位置に設けられている。出入口状の施設が複数設けられた方形区画も推定可能である。

SD32部分は溝底面が平坦ではなく、そのため溝の深さは30㎝～60㎝と凹凸がある。これに対してSD33部分は断面形が整った台形になるように掘られており、底面は完全に平坦に加工されている。深さは約60㎝である。

（柵列の規模）柵列SA03は溝の内側に沿って配置される。柵を構成する柱は2.7mの均等な間隔で立てられ、北辺ではＰ１～Ｐ15の柱間14間、東辺ではＰ15～Ｐ22の７間分検出している。前述した溝が途切れる部分にも柵列の柱穴は等間隔で配置されており、幅をもつ門などの構造物は設けられていない。この部分が出入口としての機能を持つものであれば、柵列になんらかの開閉装置が備わっていたことも考えられる。

（柵列の構造）掘立柱によって柱を１本ずつ立て、これを連結して柵としたものである。地上部分の構造は不明で、塀と呼称すべきかもしれない。貫や横板の構造、屋根掛けの有無などは一切復原できないが、整然とした柱穴の配置からみて丁寧な造りが想定される。

柵列の柱穴は溝の縁から1.5mの間隔を隔てた位置に配されている。北辺の西半（SD32に並行する部分）では柵の柱は１本だけでなく、主柱と添柱の２つが組みあって確認された。主柱は柱穴径80㎝～110㎝、深さ70㎝前後、添柱は径40㎝～50㎝、深さはやや浅く50㎝～60㎝である。主柱と添柱は約1.4mの間隔をもって配置される。添柱は溝SD32の縁ラインと重なるように位置しており、この柱穴を埋める埋土は溝SD32の埋土と区別できなかった。したがって柵列が解体される際に柱が抜き取られ、一連の埋土によって溝と共に埋められたと考えられる。なお添柱の柱穴は垂直方向に対して傾きが無く、まっすぐ掘られている。柱痕跡が無いため間接的な推定だが、添柱は垂直に立てられていた様子がうかがえる。したがって柵壁面に対して個々の添柱が斜めに寄りかかって支える構造ではなく、並んだ添柱の頂部に横架する材を乗せ、これを柵列本体と連結するような、かなり頑丈な構造をもつ添柱の支持が推定される。

一方、柵列SA03北辺の東半（SD33と並行する部分）では、西半とは異なる柱穴の構造が検出されている。具体的にはＰ10～Ｐ14の部分である。西半では主柱と添柱の柱穴が独立して検出され、両者とも明確な建て替え、抜き取りなどの痕跡が無かったのに対し、Ｐ10～Ｐ14では主柱と添柱の柱穴がつながり、一連の平面プランをもって検出された。これはFig. 223の土層断面図に示したように、複数回にわたる抜き取り、建て替えに伴うものであることが分かっている。主柱と添柱は溝状につながった坑を掘って抜き取られており、土層の切り合いをみる限り最大で３回の抜き取り・建て替えがあったことがうかがえる。なお最初の建設時に主柱と添柱が独立した別の柱穴であったかどうかは不明である。下層

に残されている埋土（図中１層）が当初の掘り方であれば、当初から一連の溝状掘り方内に両者が一括して立てられた可能性も残る。

なお添柱は北辺のみに付随しており、東辺と北辺の溝が途切れる部分には認められない。この部分については１本柱の柵列で、北辺とは異なる構造であったことがうかがえる。

SA03の柱穴のなかには、底近くに石を置いて礎盤（暗礎）としたものがあった。Fig. 226に写真を掲載したように、平坦な面をもつ大きめの石を１つ置くものと、円礫を５個前後固めて置くものとバリエーションが認められる。また全ての柱穴に礎盤がある訳ではない。

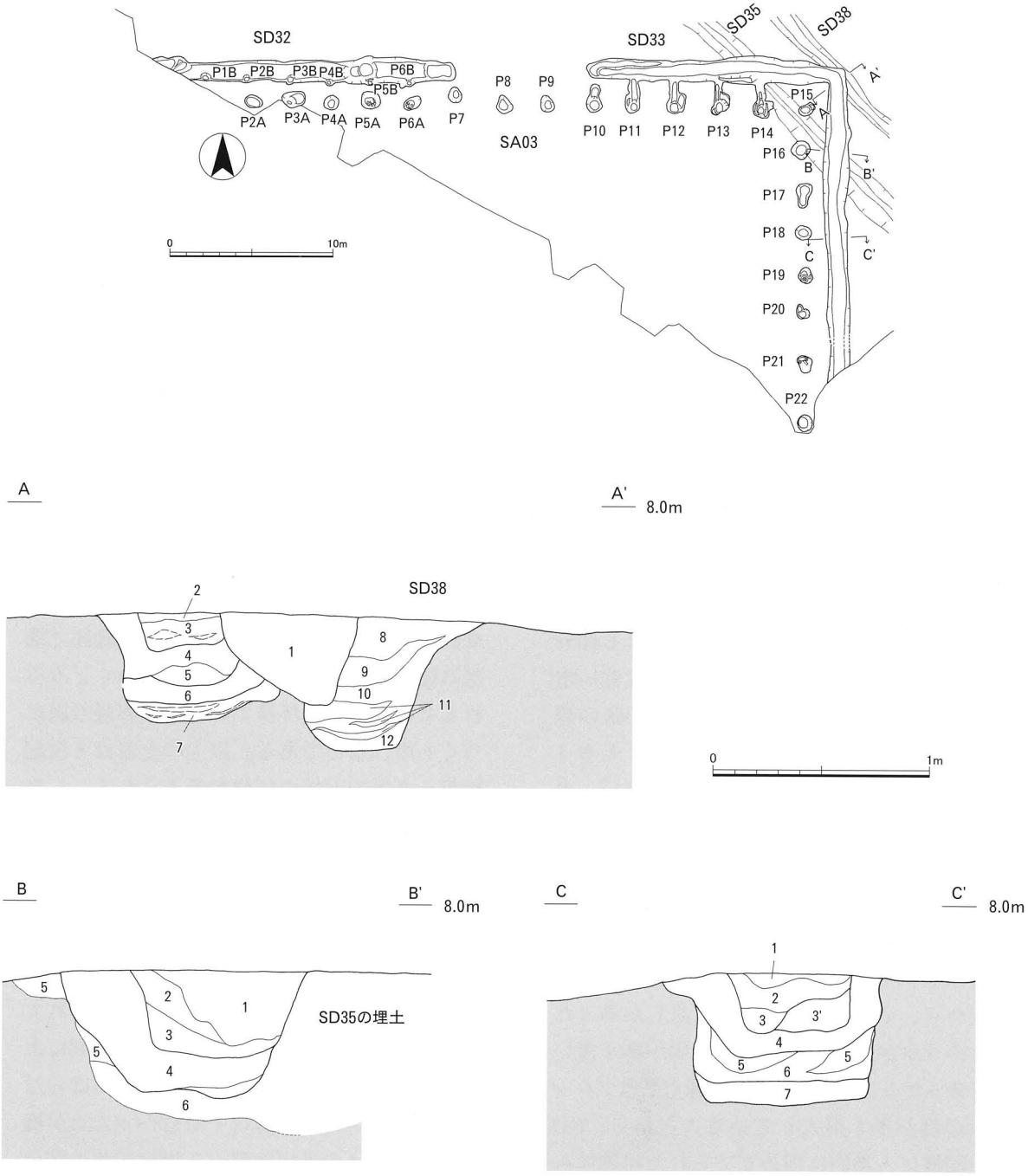
（SD33の埋土堆積状況）土層断面図をFig. 216に示している。３箇所での堆積状況を図示したが、いずれも最下層にあたる部分では水流の作用による粒度淘汰を受けた堆積を確認している。ブロック状の塊が含まれる部分もあることから、一時的にはある程度強い水量があったこともうかがえる。SD33底の標高は検出した範囲内では7.0ｍでほぼそろっており、際だった高低差は認められない。また溝の一端は途切れているため、常時水流があるような水路としての溝とは考えにくい。平常はほとんど流れがなく、気候によって水位の上下があるような壕状の溝であったものと推定される。なおFig. 216に示した埋土の状況から、２回以上の溝の掘り直しがあったことがうかがえる。最終的には幅が細く浅い溝であったらしい。この最終の埋土にはブロック状の塊が多く混入していることから、SD32と同様に人為的に埋め立てられた可能性もある。ただし後述のSD32埋土からは多量の遺物が出土しているのに対して、SD33からの遺物出土量は非常に少ない。

（SD32の埋土と遺物出土状況）Fig. 221に実測図を、Fig. 222に写真を示した。溝は柵列の添柱穴とともに一括の埋土で埋まっており、人為的に一度に埋められたと考えられる。この埋土中には土器が高い密度で包含されており、意図的な廃棄がおこなわれた可能性もある。遺物の水平分布は遺構全体にまんべんなく広がっており、垂直分布については上面から底近くまで偏り無く含まれている。このような分布状況からみると、溝を埋め戻す作業中に遺物を投棄したのではなく、埋土が供給される元の場所で廃棄、混入したものが一括して運ばれた可能性もある。

（遺物の内容と時期）出土した遺物について実測図をFig. 230～231に、写真をFig. 256～263に掲載した。各種の須恵器、赤彩土師器、土師器甕などが出土している。詳細は次節で述べるが、特殊な遺物としてはSA03Ｐ２Ｂから出土した円面硯（Fig. 231－39）、SD32から出土した須恵器坏蓋の転用硯（Fig. 231－24）、製塩土器（Fig. 230－14）などがある。

遺物の時期には若干の幅が認められる。最も新しい年代のものとしては、須恵器坏（Fig. 231－25～28）、赤彩土師器皿（Fig. 230－11）などがあげられる。また非掲載とした小片のなかにも新しい時期のものがいくつか含まれる。具体的には須恵器坏蓋の口縁部で端部の屈折が短く、宝珠状つまみがつくとみられるもの、須恵器坏身で高台が底部最外縁につくもの、などである。以上の土器は８世紀後葉～９世紀前葉の年代が考えられる。したがってSD32、SD33、SA03の廃絶年代はこれ以降であるといえる。

前項で扱った大型建物による方形区画SB11、SB12は遺構の切り合いから、溝と柵列による方形区画より古いことがわかっている。このSB11・SB12が８世紀後半に解体されているため、その後に設けられた溝と柵列による方形区画の設置年代はこれをさかのぼらない。したがって、SD32・SD33・SA03が機能した期間は８世紀後葉～９世紀前葉の間に納まるものと考えられる。




A－A' ライン

SD33
1　黒褐色細砂混粘質土（均質でしまりよい）
2　黒褐色粘質土＋淡黄白色シルトブロック
3　淡黄白色シルトブロック＋黒色粘質土（薄い層状）
4　暗褐色細砂混粘質土（均質でしまりよい）
5　暗褐色細砂混粘質土（４層に黒色土少量混じる）
6　４層と同じ
7　黒色粘質土＋明灰色シルト・砂（薄い互層状堆積、粒度淘汰）
→ゆるやかな水流

SD38
8　黒褐色細砂混粘質土
（部分的に褐色シルトブロック含み、非常にしまりよい）
9　暗黄褐色シルト
10　淡灰褐色砂混シルト（均質でしまりよい）
11　暗灰色砂（純粋な砂層）
→一時的な強い水流
12　暗茶灰色粘質土（非常に粒子細かい。地山との境界には橙色の酸化鉄が沈着する）

地山は上層が明黄白色シルト、下層が明灰色砂

B－B' ライン

SD33
1　淡褐色砂混粘質土
2　１層＋黄褐色シルト斑
3　黒褐色粘質土＋黄灰色シルトブロック
4　淡褐色砂混粘質土

SD35
5　暗褐色砂混粘質土
6　黒色砂混粘質土
7　淡灰褐色砂質土＋暗橙色シルトブロック・黒色土ブロック
→短時間の水流による埋土

C－C' ライン

1　黒色粘質土＋淡黄灰色シルト斑
2　淡褐色砂混粘質土
3　黒褐色粘質土＋黄灰色シルト
3'　黄灰色シルトの割合が多い
4　淡褐色砂混粘質土（黒色土・黄白色シルトブロック含む）
5　淡褐色細砂混粘質土（黒色土が水平方向の縞状に堆積）
→ゆるやかな水流による堆積
6　暗褐色砂混粘質土
7　淡灰褐色砂質土＋暗橙色シルトブロック・黒色土ブロック
→短時間の水流による埋土

Fig.216　SD32・33、SA03 遺構図（平面図Ｓ＝1/400、土層図Ｓ＝1/30）

Fig.217　SD32・33、SA03 遺構写真（北東から、人の位置はSA01の柱穴）

Fig.218　SD33・SA03 遺構写真（北西から、方形区画の東半分）

Fig.219　SD33南北溝部分 遺構写真（左：南から、右：北から、Fig.216のBライン）

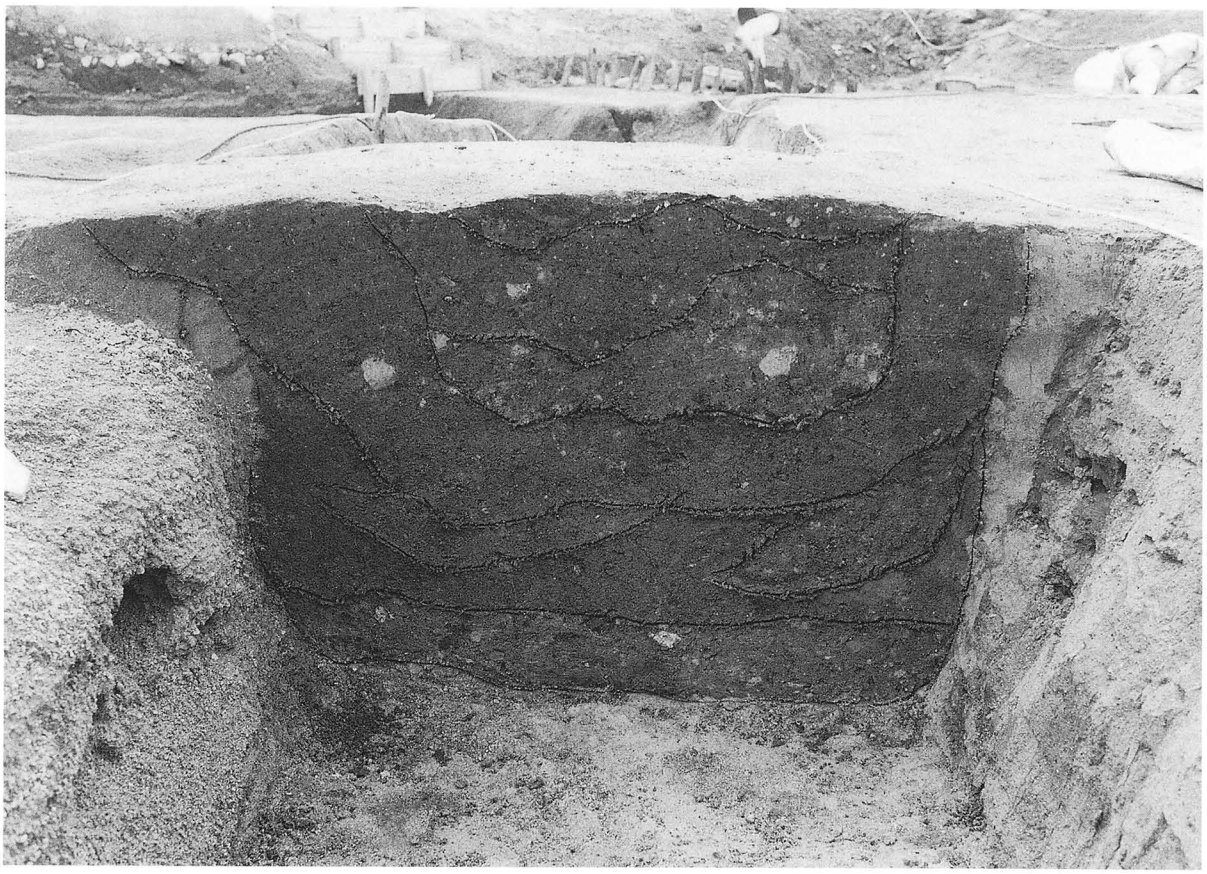


Fig.220　SD33南北溝部分 土層断面写真（北から、Fig.216のＣライン）

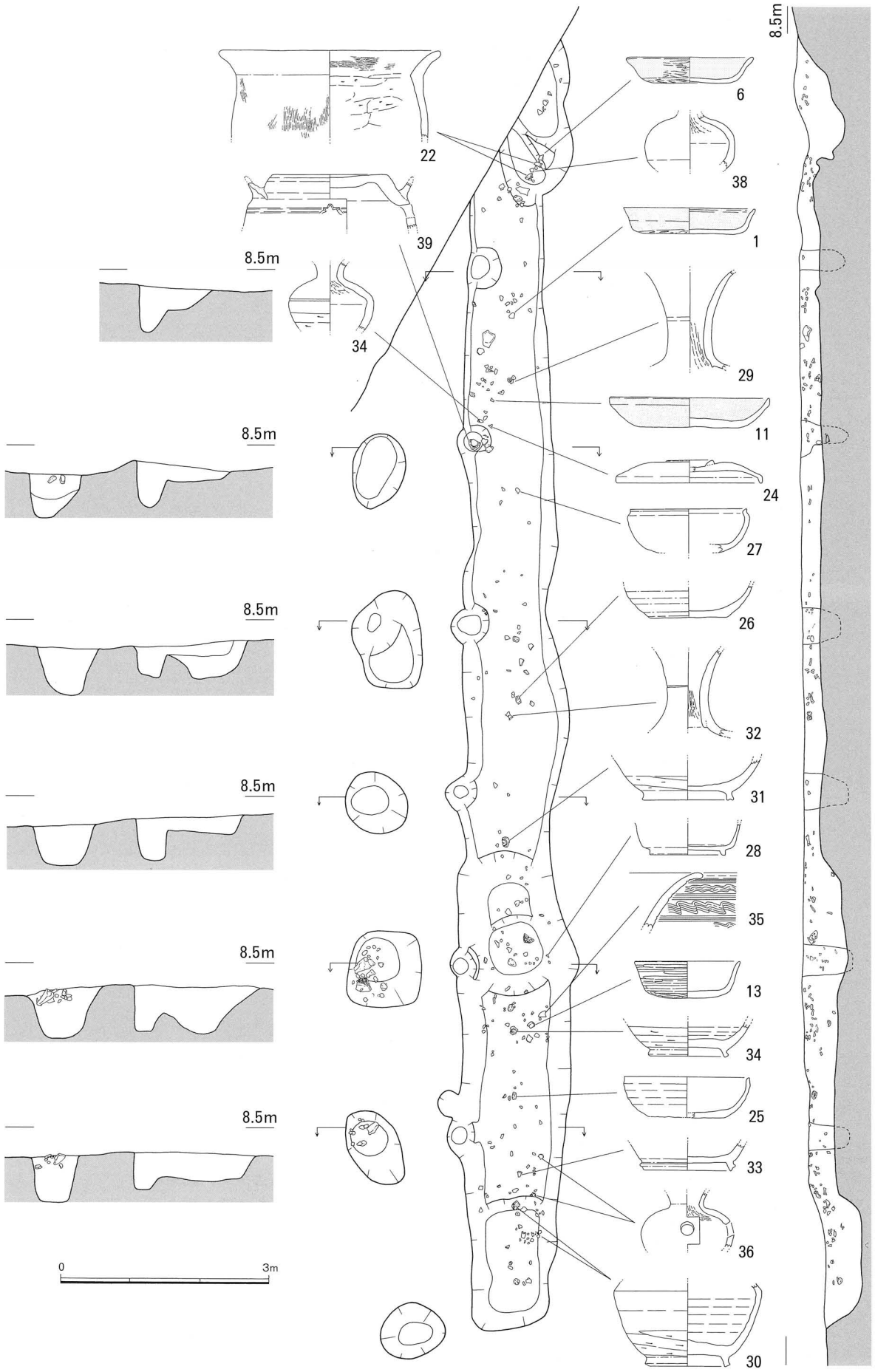
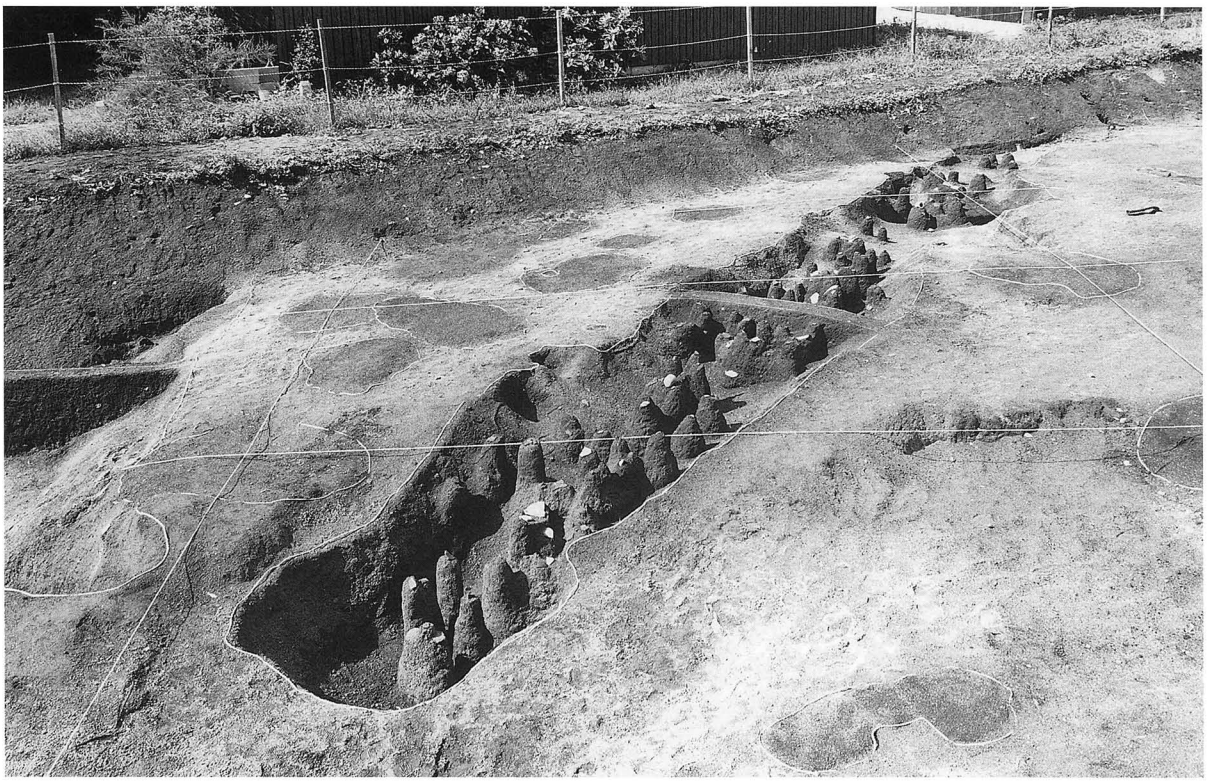



Fig.221　SD32・SA03 遺構図（S＝1/80）



1 ：遺物出土状況、北東から
2 ：遺物出土状況、東から
3 ：SD32完掘、ピットはSA03
4 ：SA03柱穴から円面硯出土状況（Ｐ２Ｂ）

Fig.222　SD32・SA03 遺構写真

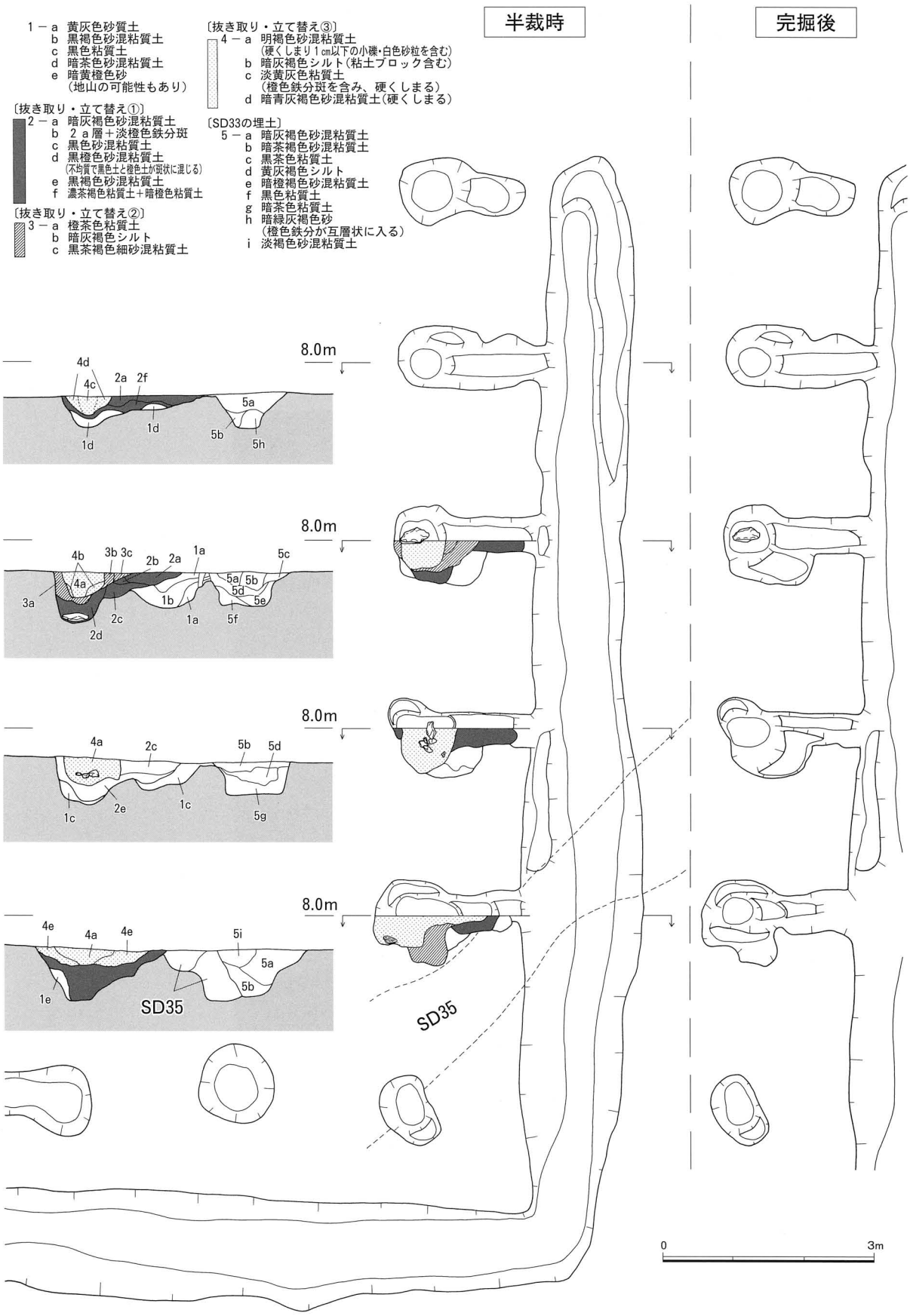



Fig.223　SD33・SA03 遺構図（S＝1/80）

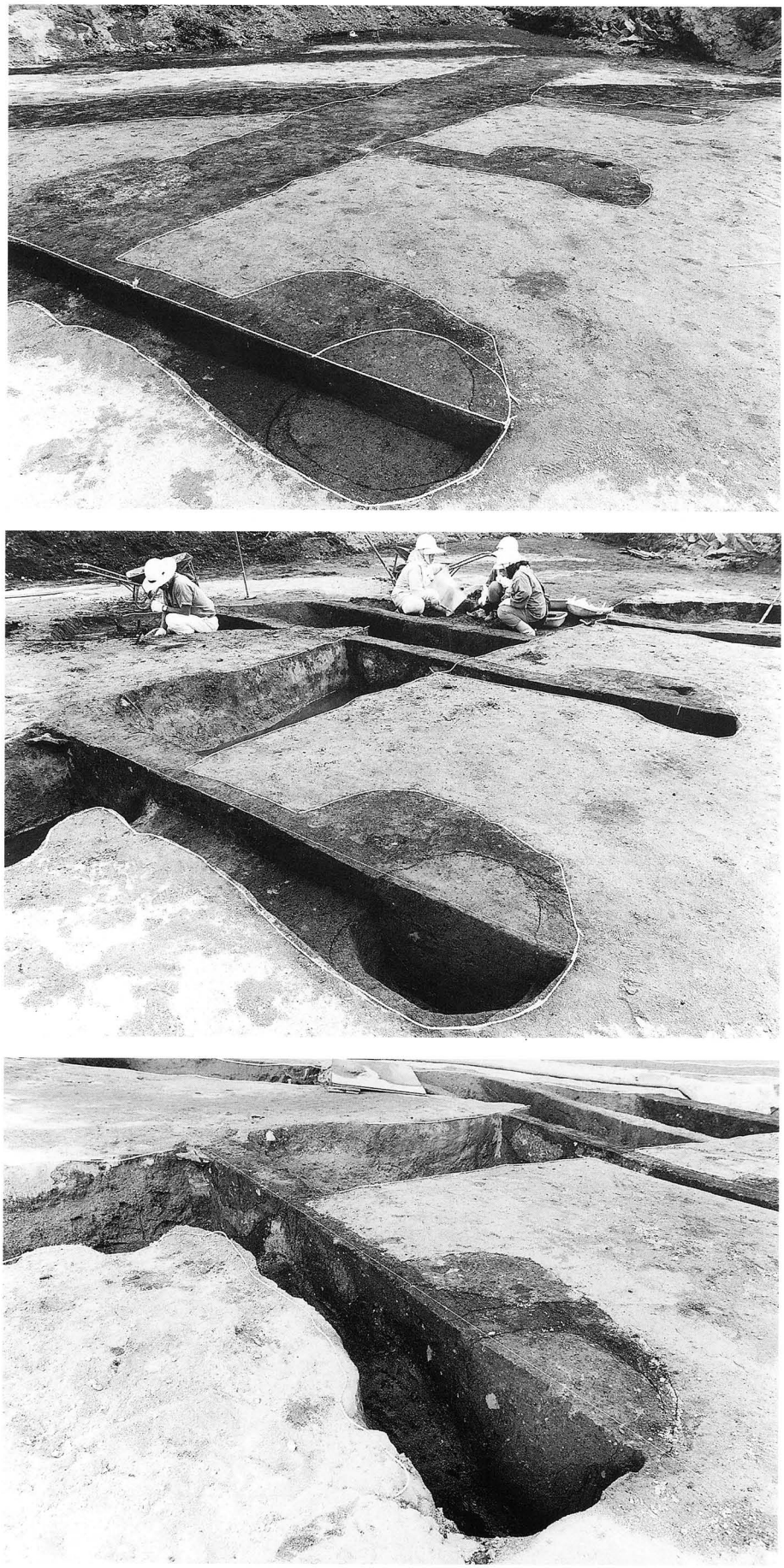
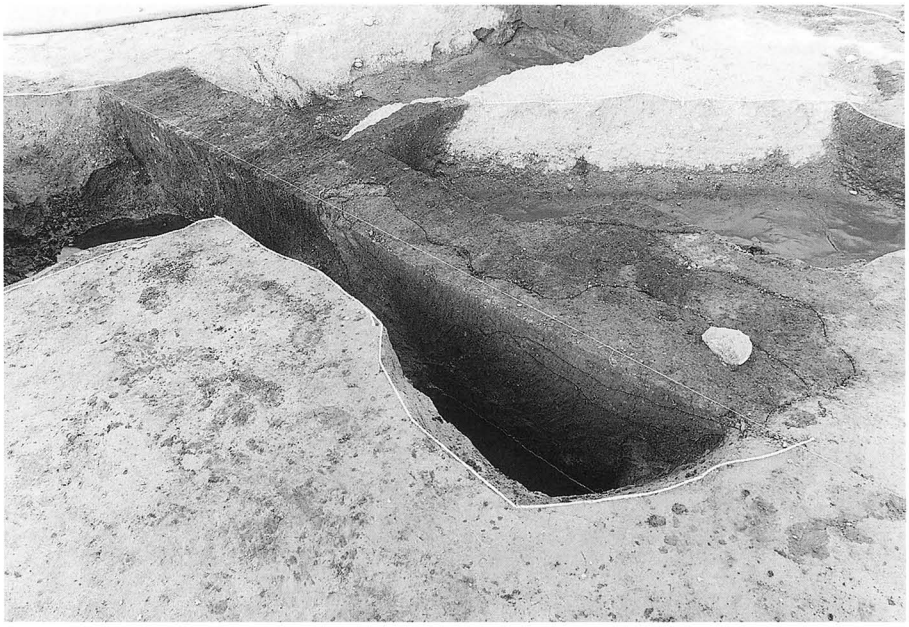


Fig.224　SA03（Ｐ12）遺構写真（南西から、上から調査順）

１：Ｐ13、南西から



２：Ｐ14、南西から

３：右からＰ11、Ｐ12、
Ｐ13、完掘時
下が北

Fig.225　SA03 遺構写真

1：Ｐ８、東から

2：Ｐ19、南から

3：Ｐ12、西から

Fig.226　SA03 遺構写真（礎盤石をもつもの）

# 第３節　遺物の詳細

以下では、前節で遺構の詳細を述べた郡家関連の建物・柵列・溝から出土した遺物の詳細を解説する。法量や調整など基本的な項目については観察表Tab. 27～39に記載しており、ここでは特記すべき点に限って述べる。なお実測図はFig. 227～231に、写真はFig. 232～263に掲載している。

**SD06**（実測図Fig. 227、写真Fig. 232～233）

比較的出土量は多いが、古い時期の遺物が混入しており時期幅がある。１は弥生土器の底部、２と３はかえりをもつ坏身で、赤彩された高坏（13～16）をあわせ古墳時代後期後葉のものが混入している。

転用硯が２点出土しており注目される。６は須恵器坏蓋が転用されたもので、内面が使用によってつるつるに摩耗し、うっすらと墨痕が残る（写真Fig. 232）。また10は長頸壺などの底部が破損後に硯として転用されたものである。実測図に示したように、破面にも墨痕が付着している（写真Fig. 233）ことから、破損したものをあえて利用していることが見て取れる。

11・12は赤彩土師器の坏で、11はつまみのついた蓋である。土師器では類例の少ない器形であるが、須恵器で同様のものがある。低い宝珠状のつまみ形状が須恵器坏蓋と共通し、８世紀後葉～９世紀初頭ごろの年代が考えられる。なお出雲国府で出土した同様の須恵器はやや古い年代が与えられている。

須恵器坏は８世紀前半の輪状つまみの蓋（６・７）と高台付の坏身（８）、８世紀中葉～後葉の底部回転糸切りの坏身（５・９）などがある。

Fig. 233に写真のみ掲載したものは、瓿、堤瓶または横瓶、坏などの破片である。

**SD12**（実測図Fig. 227、写真Fig. 234）

遺構の面積に比して出土量は少ない。17は高台付坏で、側面が急角度で立ち上がる器形、高台の稜がシャープで底部の外寄りにつくことなどの特徴からみて８世紀後半のものである可能性が高い。なお底部切り離しの痕跡は確認できない。

Fig. 234に写真のみ掲載したものは須恵器甕、古墳時代の坏身、高台付の坏などである。

**SB01**（実測図Fig. 227、写真Fig. 235）

周辺遺構との配置関係から８世紀後半頃の建物と推定されるが、柱穴内から出土した遺物はいずれも古墳時代のものである。いずれも混入と判断される。20、21が坏蓋、22～25が坏身で、蓋天井部の調整、身受け部のかえりなどから古墳時代後期後葉のものとみられる。このほかFig. 235に写真のみ掲載した須恵器甕などが出土している。

**SA01**（実測図Fig. 227、写真Fig. 236）

上記SB01と同様な状況である。図示した須恵器蓋坏、須恵器高坏の他は、写真のみ掲載した須恵器甕、同壺類底部などの破片が出土している。

**SB03**（実測図Fig. 228、写真Fig. 237）

須恵器坏の蓋身が１点ずつ出土している。身にかえりをもつ坏の最終形態で、口径の縮小化が最も進んだ段階のものである。出雲６期、７世紀中葉頃のものとみられる。

このほか写真のみ掲載したものに赤彩土師器の甕が数点ある。

**SB04**（実測図Fig. 228、写真Fig. 238～239）

須恵器坏蓋の破片がいくつかある。32と写真のみ掲載した破片は輪状つまみをもつ蓋とみられる。いずれも内面に薄く黒色の付着物があり、転用硯として使用された墨痕である可能性もあるが小片のため断定できない。33は身として図示したが、蓋の可能性もある。

34は鉄製の楔で、全長130㎜、最大幅15㎜、最大厚３㎜の平釘状をなす。実測図は保存処理前に作図したため特徴を把握しきれていないが、錆を除去したところ頭部がきれいな弧を描き、身の中ほど部分が歪曲するなどの特徴が明らかになっている（写真Fig. 239）。樹脂含浸など保存処理後の計測値であるが、

重量は24ｇほどであった。

**SB07**（実測図Fig. 228、写真Fig. 241）

35の須恵器高坏は古墳時代のもので混入と判断される。３方に方形透かしをもつ。36は須恵器坏身底部で、高台部分の破片である。焼成が悪く、表面が吸炭したように黒色を呈する。

**SB08**（実測図Fig. 228、写真Fig. 242～243）

他の建物遺構に比べ新しい時期の遺物が比較的まとまって出土している。37～41は須恵器坏蓋で、器高が低く端部の折れが小さいことが特徴である。つまみ部分はいずれも失われているが、低い宝珠状のつまみがつくものとみられる。８世紀後葉～９世紀前葉ごろのものと判断される。

42は底部回転糸切りの須恵器坏身で、底面に「若」１文字が墨書される。字の位置は幾分片寄っておりさらに別の文字を記す余白は充分あるが、これに続く文字があった痕跡は確認できない。

43と同様の赤彩土師器坏は、写真を掲載したように小片が数点出土している。

45は鉄製の紡錘車で本来の直径52㎜前後、中心に方形の孔が開く。保存処理後の重量は37ｇであった。

**SB10**（実測図Fig. 228、写真Fig. 244～245）

46は須恵器坏蓋、47は同瑕である。瑕は高台が付くもので、円孔部分は失われている。

**SB12**（実測図Fig. 228、写真Fig. 247）

49は須恵器坏蓋の破片で、肩部に稜が付いて屈折する。つまみは失われているが、推定される径からみて輪状つまみにはならず、宝珠状つまみがつくものとみられる。８世紀後葉の年代が与えられる。50の赤彩土師器高坏は古墳時代後期のものが混入したと考えられる。

**SD30**（実測図Fig. 229、写真Fig. 252～255）

SD30の遺構については次節で扱うが、遺物については他の遺構と併せてここで扱う。

１は棒状の鉄製品で、鉄釘などとみられる。断面正方形の角棒状で、出土時には図示したように須恵器坏蓋が錆び付いていた。残存長が11.9㎝、太さは一辺５㎜ほどである。保存処理後の重量は約11ｇである。

２は須恵器円面硯で、脚端径23.8㎝の大型のものである。脚部には方形の透かしが切り抜かれている。接合しないが、付近から墨を擦る陸部分とみられる破片も出土している（写真Fig. 253）。表面は使用によってつるつるに摩滅している。

４は須恵器坏蓋で、内面は摩耗し墨痕が付着している。転用硯として使用されたものである。

この他にはFig. 255に写真のみ掲載した赤彩土師器坏、土師器甕、土製支脚などが出土している。赤彩土師器坏には高台付のもの、高台がつかず静止糸切りのものなどが含まれる。

**SD32**（実測図Fig. 230～231、写真Fig. 256～262）

比較的多くの遺物がまとまって出土している。１～11は赤彩土師器坏で、11のように口径が大きく外に開く皿のような器形のものもある。器形や端部の形状にバリエーションがあり、時期的に一括性があるものか判断できない。13の土師器坏は口径が小さく非常に丁寧なミガキを施すもので、やや異質なものである。

14は製塩土器の破片である。指押さえによる成形痕が残される。製塩土器については注意して遺物検討を行ったが、他の遺構からは出土していない。

15～23は土師器甕である。破片が多いが、SD32からは煮炊具がまとまって出土している点が注意される。

24～28は須恵器坏を図示した。24の蓋は内面に墨痕が付着するもので、転用硯として使用されたものである。25～28の坏身は型式差があるが、底部糸切りの25、26、高台が外寄りについて体部が鋭角に立ち上がる28などの特徴から、おおまかに８世紀中葉～９世紀前葉にかけてのものと判断される。

29～34は長頸壺で、造りが厚いためか大きめの破片で出土している。31の底面には「×」のヘラ記号が刻まれている。

39は円面硯の上部である。SD32の廃絶と同時の埋土中から出土しているものの、厳密には柵列SA03の添柱Ｐ２Ｂから出土したものである。脚部側面には透孔が２箇所分残存している。透孔は上半しか残らないため、全体の形は不明だが、星形に切り抜かれたものである（写真Fig. 261）。２箇所の透孔は中心からの角度90°の位置に設けられているため、全体では４箇所の透孔があったものと復原される。

40は鉄製品で平面形は鏃などの利器に観察されるが、刃がつかず切り抜いた板状のものである。用途は明らかではない。

**SD33**（実測図Fig. 231、写真Fig. 263）

Fig. 231－41、42がSD33からの出土である。41は瑾などの底部、42は放射状の暗文を施した赤彩土師器坏である。

**Tab. 27　SD06出土遺物観察表**（Fig.227）

| 番号 | 種別 | 器種 | 法量（cm） | | | 色調 | 調整（内面／外面／特記事項） | 残存度 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | | | |
| 1 | 弥生土器 | 壷・甕 | － | － | 6.2 | 内外面：浅黄橙色 | 内面：指押さえ／外面：ハケメ後ナデ | 底部のみ、全周の70% |
| 2 | 須恵器 | 坏身 | 10.0 | － | － | 内外面：灰色 | 内外面：回転ナデ | 口縁部のみ、全周の10%以下 |
| 3 | 須恵器 | 坏身 | － | － | － | 内外面：暗灰色 | 内外面：回転ナデ | 口縁部のみ、全体の10%以下 |
| 4 | 須恵器 | 坏身 | － | － | － | 内外面：暗灰色 | 内面：回転ナデ／外面：体部回転ナデ、底部ヘラ切りの後不定方向のナデ、周辺部のみ回転ヘラケズリ | 体部下半から底部にかけて、全体の20% |
| 5 | 須恵器 | 坏身 | － | － | 8.9 | 内外面：オリーブ灰色 | 内面：体部回転ナデ、底部不定方向のナデ／外面：体部回転ヘラケズリの後ナデ、底部回転糸切り | 体部下半から底部のみ、全周の50% |
| 6 | 須恵器 | 坏蓋 | 13.8 | 3.2 | － | 内外面：暗灰色 | 内面：回転ナデ／外面：口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリの後回転ナデ／転用硯、内面なめらかに摩耗、一部墨痕 | 全体の70% |
| 7 | 須恵器 | 坏蓋 | － | － | － | 内外面：暗青灰色 | 内外面：回転ナデ | 口縁部のみ、全周の10%以下 |
| 8 | 須恵器 | 坏身 | － | － | － | 内外面：暗灰色 | 内面：回転ナデ／外面：体部回転ヘラケズリの後高台貼り付け周辺部回転ナデ | 体部下半から高台にかけて、全周の15% |
| 9 | 須恵器 | 坏 | 14.0 | － | 9.0 | 内　面：暗オリーブ灰色<br>外　面：体部上半部暗オリーブ褐色、以下暗オリーブ灰色 | 内面：体部回転ナデ、底部不定方向のナデ／外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り | 全体の30% |
| 10 | 須恵器 | 壷類 | － | － | 9.5 | 内　面：オリーブ灰色<br>外　面：暗灰色 | 内面：回転ナデ／体部回転ヘラケズリ、高台貼付後回転ナデ、底部不定方向のナデ／内面、破面に墨痕 | 体部下半から底部のみ、底部はほぼ全周 |
| 11 | 土師器 | 蓋 | － | － | － | 内外面：赤色塗彩<br>胎　土：灰黄褐色 | 内面：回転ナデ／外面：側面横方向のヘラミガキ、天井部ヘラケズリ、つまみ貼付後回転ナデ | 全体の15% |
| 12 | 土師器 | 坏 | 14.0 | 3.7 | － | 内外面：赤色塗彩<br>胎　土：浅黄褐色 | 内面：回転ナデ／外面：口縁～側面回転ナデ、底部ヘラケズリ整形後単位の不明瞭なミガキ | 全体の70% |
| 13 | 土師器 | 高坏 | － | － | 8.6 | 内外面：赤色塗彩<br>胎　土：明黄褐色 | 内面：ケズリ、不定方向のナデ、裾部ヨコナデ／外面：指押さえの後ナデ、裾部ヨコナデ | 脚部のみ、全周の40% |
| 14 | 土師器 | 高坏 | － | － | 8.0 | 内外面：赤色塗彩<br>胎　土：明黄褐色 | 内面：不定方向のナデ、ケズリ、端部ヨコナデ／外面：ヨコナデ | 脚部のみ、全周の40% |
| 15 | 土師器 | 高坏 | － | － | － | 外　面：赤色塗彩<br>胎　土：浅黄褐色 | 内面：接合部粗いナデ／外面：タテハケ、滑らかなナデ／坏部の軸を脚で包んで接合 | 脚部のみ、全体の20% |
| 16 | 土師器 | 高坏 | － | － | 14.0 | 内外面：橙色 | 内面：粗いヘラケズリ、脚端部なめらかなヘラケズリ／外面：筒部縦方向のヘラケズリ、裾部～脚端部ナデ／坏部との平滑な接合面で剥離 | 脚部のみ、全体の30% |

**Tab. 28　SD12出土遺物観察表**（Fig.227）

| 番号 | 種別 | 器種 | 法量（cm） | | | 色調 | 調整（内面／外面／特記事項） | 残存度 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | | | |
| 17 | 須恵器 | 坏身 | － | － | － | 内外面：灰色 | 内外面：回転ナデ | 底部から高台にかけて、全周の20% |
| 18 | 須恵器 | 瓶・壷類 | － | － | － | 内外面：灰色 | 内外面：回転ナデ | 口縁部のみ、全周の10%以下 |
| 19 | 須恵器 | 高坏 | － | － | － | 内外面：灰色 | 内外面：回転ナデ／瓶類の可能性あり | 口縁部のみ、全周の10% |

## Tab. 29　SB01出土遺物観察表（Fig.227）

| 番号 | 柱穴遺構名 | 種別 | 器種 | 法量（cm） | | | 色調 | 調整（内面／外面／特記事項） | 残存度 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 口径 | 器高 | 底径 | | | |
| 20 | P５ | 須恵器 | 坏蓋 | 11.4 | － | － | 内外面：明灰色 | 内面：回転ナデ、口縁部に刻みなど無し／外面：天井部ケズリ無し、ナデ | 全体の10% |
| 21 | P16 | 須恵器 | 坏蓋 | － | － | － | 内外面：暗灰色 | 内面：回転ナデ、口縁部に沈線／外面：回転ナデ、肩部に沈線 | 全体の５% |
| 22 | P３ | 須恵器 | 坏身 | － | － | － | 内外面：明灰色 | 内外面：回転ナデ | 全体の５%以下 |
| 23 | P12 | 須恵器 | 坏身 | － | － | － | 内外面：明灰色 | 内外面：回転ナデ | 全体の５% |
| 24 | P14 | 須恵器 | 坏身 | － | － | － | 内外面：暗灰色 | 内外面：回転ナデ | 全体の５%以下 |
| 25 | P14 | 須恵器 | 坏身 | － | － | － | 内外面：暗灰色 | 内外面：回転ナデ | 全体の５% |

## Tab. 30　SA01出土遺物観察表（Fig.227）

| 番号 | 柱穴遺構名 | 種別 | 器種 | 法量（cm） | | | 色調 | 調整（内面／外面／特記事項） | 残存度 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 口径 | 器高 | 底径 | | | |
| 26 | P１ | 須恵器 | 坏蓋 | － | － | － | 内外面：暗青灰色 | 内外面：回転ナデ | 全体の５%以下 |
| 27 | P８ | 須恵器 | 坏身 | － | － | － | 内外面：暗青灰色 | 内外面：回転ナデ | 全体の７% |
| 28 | － | 須恵器 | 低脚高坏 | － | － | － | 内外面：暗灰色 | 内外面：回転ナデ／脚部方形２方透かし | 脚部の40% |

## Tab. 31　SB03出土遺物観察表（Fig.228）

| 番号 | 柱穴遺構名 | 種別 | 器種 | 法量（cm） | | | 色調 | 調整（内面／外面／特記事項） | 残存度 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 口径 | 器高 | 底径 | | | |
| 29 | P10 | 須恵器 | 坏蓋 | 9.2 | 3.1 | － | 外面側面：暗灰色　外面上面、内面：明灰色 | 内面：回転ナデ／外面：天井部回転ケズリ、体部回転ナデ | 全体の30% |
| 30 | P１ | 須恵器 | 坏身 | 11.8 | 3.6 | － | 内外面：暗灰色 | 内面：回転ナデ／外面：底部回転ヘラケズリ、敷物圧痕、側面回転ナデ | 全体の50% |

## Tab. 32　SB04出土遺物観察表（Fig.228）

| 番号 | 柱穴遺構名 | 種別 | 器種 | 法量（cm） | | | 色調 | 調整（内面／外面／特記事項） | 残存度 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 口径 | 器高 | 底径 | | | |
| 31 | P６ | 土師器 | 皿 | － | － | － | 胎　土：淡褐色<br>内外面：赤色塗彩 | 内外面：丁寧なナデ、赤色塗彩 | 側面のみ、全周の10% |
| 32 | P３ | 須恵器 | 坏蓋 | (17.6) | － | － | 内外面：灰色 | 内外面：回転ナデ、内面に黒いシミ、墨痕か | 全周の５%以下 |
| 33 | P２ | 須恵器 | 坏身 | － | － | － | 内外面：灰色 | 内外面：回転ナデ | 全周の５%以下 |
| 34 | P12 | 鉄製品 | 楔状平釘 | 全長<br>130㎜ | 最大幅<br>15㎜ | 最大厚<br>３㎜ | | 頭部が弧状に曲がる。体部中ほどで湾曲する。先端をわずかに欠く。 | ほぼ完形 |

## Tab. 33　SB07出土遺物観察表（Fig.228）

| 番号 | 柱穴遺構名 | 種別 | 器種 | 法量（cm） | | | 色調 | 調整（内面／外面／特記事項） | 残存度 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 口径 | 器高 | 底径 | | | |
| 35 | P３ | 須恵器 | 長脚高坏 | 11.0 | － | － | 内外面：暗灰色 | 坏部内面：回転ナデ／坏部外面：回転ナデ、２条の沈線／脚部：３方方形透かし | 坏部の40% |
| 36 | P１ | 須恵器 | 坏身 | － | － | － | 胎　土：灰褐色<br>表　面：黒褐色 | 内外面：焼成不良のため摩耗し調整不明、表面は黒斑状に吸炭する | 高台部周辺、全周の10% |

## Tab. 34　SB08出土遺物観察表（Fig.228）

| 番号 | 柱穴遺構名 | 種別 | 器種 | 法量（cm） | | | 色調 | 調整（内面／外面／特記事項） | 残存度 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 口径 | 器高 | 底径 | | | |
| 37 | P６ | 須恵器 | 坏蓋 | 12.6 | － | － | 内外面：暗灰色 | 内外面：回転ナデ | 全体の10% |
| 38 | P11 | 須恵器 | 坏蓋 | 13.0 | － | － | 内外面：暗灰色 | 内外面：回転ナデ | 全体の20% |
| 39 | P６ | 須恵器 | 坏蓋 | － | － | － | 内外面：暗灰色 | 内外面：回転ナデ、内面に墨痕付着、転用硯 | 全体の５% |
| 40 | P10 | 須恵器 | 坏蓋 | 13.0 | － | － | 内外面：暗灰色 | 内外面：回転ナデ | 全体の５% |
| 41 | P11 | 須恵器 | 坏蓋 | 17.0 | － | － | 内外面：暗灰色 | 内外面：回転ナデ | 全体の５% |
| 42 | P１ | 須恵器 | 坏身 | | － | (9.2) | 内外面：灰色 | 内面：回転ナデ／底面：回転糸切り、底面に墨書「若」 | 底面の40% |
| 43 | P11 | 土師器 | 坏 | 14.3 | － | 11.0 | 胎　土：淡褐色<br>内外面：赤色塗彩 | 内外面：回転ナデ | 全体の15% |
| 44 | P５ | 土師器 | 坏 | － | － | － | 胎　土：淡褐色<br>内外面：赤色塗彩 | 内外面：回転ナデ | 全体の10% |
| 45 | P６ | 鉄製品 | 紡錘車 | 直径<br>52㎜ | － | － | | 中心に方形の軸孔が開く | 完形 |

## Tab. 35　SB10出土遺物観察表（Fig.228）

| 完形 | 柱穴遺構名 | 種別 | 器種 | 法量（cm） | | | 色調 | 調整（内面／外面／特記事項） | 残存度 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 口径 | 器高 | 底径 | | | |
| 46 | P２ | 須恵器 | 坏蓋 | － | － | － | 内外面：灰色 | 内外面：回転ナデ | 全体の５% |
| 47 | P５ | 須恵器 | 瑕 | － | － | 5.3 | 内外面：灰色 | 内外面：回転ナデ、高台内：高台貼り付け後回転ナデ | 体部の40% |
| 48 | － | 土師器 | 坏 | 14.4 | 3.8 | (11.0) | 胎　土：淡褐色<br>内外面：赤色塗彩 | 内面：丁寧なナデ／外面：側面丁寧なナデ、底部稜を残すミガキ | 全体の30% |

## Tab. 36　SB12出土遺物観察表（Fig.228）

| 番号 | 柱穴遺構名 | 種別 | 器種 | 法量（cm） | | | 色調 | 調整（内面／外面／特記事項） | 残存度 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 口径 | 器高 | 底径 | | | |
| 49 | P８ | 須恵器 | 坏蓋 | － | － | － | 内外面：灰色 | 内外面：回転ナデ | 全体の５%以下 |
| 50 | P14 | 土師器 | 高坏 | － | － | － | 胎　土：明褐色坏部、脚部外面：赤色塗彩 | 坏部回転ナデ／脚部外面：横方向のヘラケズリ、指押さえ／脚部内面：ヘラケズリ | 坏部下半から脚部にかけて、全体の70% |

## Tab. 37　SD30出土遺物観察表（Fig.229）

| 番号 | 種別 | 器種 | 法量（cm） | | | 色調 | 調整（内面／外面／特記事項） | 残存度 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | | | |
| 1 | 鉄製品 | 釘 | 残存長11.9cm | － | － | | 断面方形、須恵器坏蓋破片銹着 | 両端を欠く |
| 2 | 須恵器 | 円面硯 | － | － | 23.8 | 内外面：暗灰色　部分的に明灰色、自然釉 | 内面：回転ナデ／外面：脚端部に２条の沈線、脚底面に粗いハケ、凹凸の残る回転ナデ | 脚部のみ、全周の30% |
| 3 | 須恵器 | 坏蓋 | － | － | － | 内外面：灰色 | 内外面：回転ナデ | 口縁部のみ、全周の10%以下 |
| 4 | 須恵器 | 坏蓋 | 15.1 | － | － | 内外面：オリーブ灰色 | 内面：口縁部回転ナデ、天井部不定方向のナデ／外面：口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ／内面と外面つまみ内に墨痕あり | 全体の20% |
| 5 | 須恵器 | 甕 | － | － | － | 内外面：灰色 | 内面：頸部ナデ、肩部以下回転ナデ／外面：頸部～肩部回転ナデ、胴部回転ヘラケズリ後ナデ／円孔は欠損 | 頸部から胴部上半にかけて、全体の30% |
| 6 | 須恵器 | 甕 | － | － | － | 内外面：灰色 | 内面：頸部ナデ、肩部以下回転ナデ／外面：頸部～肩部回転ナデ、胴部下半回転ヘラケズリ後回転ナデ、底部高台貼り付けの後回転ナデ | 頸部から胴部上半にかけて、全体の70% |
| 7 | 須恵器 | 長径壷 | － | － | － | 内　面：青灰色<br>外　面：灰色 | 内外面：回転ナデ | 胴部のみ、全体の30% |
| 8 | 土製品 | 土製支脚 | － | － | － | 黄橙色 | 全面：粗いナデ | 突起部 |
| 9 | 土師器 | 皿 | 16.6 | 3.4 | － | 内外面：赤色塗彩<br>胎　土：にぶい橙色 | 内面：口縁部回転ナデ、底部不定方向のナデ／外面：口縁部回転ナデ、底部回転糸切り後ナデ | 全体の80% |
| 10 | 土師器 | 甕 | － | － | － | 内外面：灰黄褐色 | 内面：口縁部～頸部ヨコナデ、以下横方向のヘラケズリ／外面：口縁部～頸部ヨコナデ／外面煤 | 口縁部から胴部上半にかけて、全体の30% |
| 11 | 土師器 | 甕 | － | － | － | 内外面：浅黄橙色 | 内面：口縁部ヨコナデ、頸部不定方向のナデ、以下ヘラケズリ／外面口縁部～頸部ヨコナデ、以下タテハケが微かに残る | 口縁部から頸部にかけて、全周の15% |
| 12 | 土師器 | 甕 | － | － | － | 内　面：にぶい橙色<br>外　面：浅黄橙色 | 内面：口縁部ヨコハケの後ヨコナデ、頸部ヘラケズリ／外面：ヨコナデ | 口縁部のみ、全周の10%以下 |

## Tab. 38　SD32出土遺物観察表（Fig.230～231）

| 番号 | 種別 | 器種 | 法量（cm） | | | 色調 | 調整（内面／外面／特記事項） | 残存度 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | | | |
| 1 | 土師器 | 皿 | 14.0 | 2.8 | － | 内外面：赤色塗彩<br>胎　土：浅黄橙色 | 内面：口縁部～体部回転ナデ、底部不定方向のナデ／外面：口縁部回転ナデ、底部回転糸切りの後周辺部ヘラケズリ | 全体の60% |
| 2 | 土師器 | 皿 | － | － | － | 内外面：赤色塗彩<br>胎　土：浅黄橙色 | 内面：口縁部～体部回転ナデ、底部不定方向のナデ／外面：口縁部回転ナデ、底部回転糸切りの後周辺部ヘラケズリ | 全体の10% |
| 3 | 土師器 | 皿 | | － | － | 内外面：赤色塗彩<br>胎　土：黄橙色 | 内面：回転ナデ／外面：口縁部回転ナデ、体部ヘラケズリ | 口縁部から体部にかけて、全周の15% |
| 4 | 土師器 | 皿 | － | － | － | 内外面：赤色塗彩<br>胎　土：明橙色 | 内面：口縁部回転ナデ、体部不定方向のナデ／外面口縁部回転ナデ、底部ヘラケズリ | 口縁部から体部にかけて、全周の25% |
| 5 | 土師器 | 坏 | － | － | － | 内外面：赤色塗彩<br>胎　土：浅黄橙色 | 内外面：回転ナデ | 口縁部のみ、全周の15% |
| 6 | 土師器 | 皿 | 13.6 | 2.8 | － | 内外面：赤色塗彩<br>胎　土：にぶい橙色 | 内面：口縁部ヨコナデ、底部不定方向のナデ／外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラミガキ、底部不定方向のヘラケズリ | 全体の30% |
| 7 | 土師器 | 皿 | － | － | － | 内外面：赤色塗彩<br>胎　土：明橙色 | 内面：体部回転ナデ、底部不定方向のナデ／外面：体部回転ナデ、静止糸切り | 体部下半から底部にかけて、全体の60% |
| 8 | 土師器 | 皿 | － | － | － | 内外面：赤色塗彩<br>胎　土：にぶい橙色 | 内面：回転ナデ／外面：口縁部回転ナデ、体部ヘラケズリ | 口縁部から底部にかけて、全体の10%以下 |
| 9 | 土師器 | 坏 | － | － | － | 内外面：赤色塗彩<br>胎　土：明赤褐色 | 内面：回転ナデ／外面：口縁部回転ナデ、体部ヘラケズリ | 口縁部から体部にかけて、全周の10%以下 |
| 10 | 土師器 | 坏 | － | － | － | 内外面：赤色塗彩<br>胎　土：にぶい橙色 | 内面：回転ナデ／外面：口縁部回転ナデ、体部下半回転ヘラケズリ | 口縁部から体部にかけて、全周の15% |
| 12 | 土師器 | 高台付坏 | － | － | － | 内外面：浅黄橙色、外面に赤色塗彩 | 内外面：ヨコナデ | 高台部のみ、全体の40% |
| 13 | 土師器 | 坏 | 11.2 | 4.0 | － | 内外面：黄橙色 | 内面：体部回転ナデ、底部不定方向のナデ／外面：体部回転ナデの後回転ヘラミガキ、底部不定方向のヘラミガキ／焼成やや不良／内面全体と外面底部に焼成時の黒斑 | 全体の60% |
| 14 | 土師器 | 製塩土器 | － | － | － | 内外面：黄橙色 | 内外面：指押さえ／胎土：砂粒をほとんど含まない | 体部のみ、全体の10%以下 |
| 15 | 土師器 | 甕 | － | － | － | 内　面：浅黄橙色<br>外　面：灰黄褐色 | 内面：口縁部ヨコナデ、頸部横方向のヘラケズリ | 口縁部から頸部にかけて、全周の10%以下 |
| 16 | 土師器 | 甕 | － | － | － | 内　面：明橙色<br>外　面：黄橙色 | 内面：口縁部ヨコナデ、頸部横方向のヘラケズリ／外面：ヨコナデ／外面に煤付着 | 口縁部から頸部にかけて、全周の10%以下 |
| 17 | 土師器 | 甕 | － | － | － | 内　面：浅黄橙色<br>外　面：黒褐色 | 内面：口縁部ヨコナデ、頸部以下ヘラケズリ／外面：口縁部～頸部ヨコナデ、肩部タテハケ／焼成やや不良 | 口縁部から肩部にかけて、全周の10%以下 |
| 18 | 土師器 | 甕 | － | － | － | 内外面：明赤褐色 | 内面：口縁部回転方向のハケメ、頸部以下ヘラケズリ／外面：ヨコナデ | 口縁部から頸部にかけて、全周の20% |
| 19 | 土師器 | 甕 | － | － | － | 内外面：明橙色 | 内面：口縁部ヨコナデ、頸部以下横方向のヘラケズリ／外面：ヨコナデ | 口縁部から頸部にかけて、全周の10%以下 |
| 20 | 土師器 | 甕 | － | － | － | 内外面：にぶい橙色 | 内面：ヨコナデ／外面：口縁部ヨコナデ、頸部以下ヘラケズリ | 口縁部かから頸部にかけて、全周の10% |
| 21 | 土師器 | 甕 | － | － | － | 内　面：浅黄橙色<br>外　面：明橙色 | 内面：口縁部ヨコナデ、頸部以下ヘラケズリ／外面：口縁部ヨコナデ、頸部タテハケ | 口縁部から頸部にかけて、全周の10%以下 |
| 22 | 土師器 | 皿 | 24.0 | － | － | 内　面：黄橙色<br>外　面：灰黄褐色 | 内面：口縁部ヨコハケの後ナデ、頸部以下横方向のヘラケズリ／外面：口縁部ヨコナデ、頸部指押さえ、以下タテハケの後部分的にナデ／外面に煤付着 | 口縁部から肩部にかけて、全周の40% |
| 23 | 土師器 | 甕 | 32.0 | － | － | 内外面：浅黄橙色 | 内面：口縁部ヨコハケ、頸部ヨコナデ、肩部以下ヘラケズリ／外面：口縁部ヨコナデ、頸部以下タテハケの後頸部ヨコナデ | 口縁部から体部上半にかけて、全周の20% |
| 24 | 須恵器 | 坏蓋 | 15.8 | 2.5 | － | 内外面：灰色 | 内面：口縁部回転ナデ、天井部不定方向のナデ／外面：口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ／転用硯、内面なめらかに摩耗 | 全体の40% |
| 25 | 須恵器 | 坏身 | 13.6 | － | － | 内外面：灰色 | 内面：体部回転ナデ、底部不定方向のナデ／外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り | 全体の40% |

| 番号 | 種　別 | 器種 | 法　量（cm） | | | 色　　調 | 調　　整（内面／外面／特記事項） | 残　存　度 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | | | |
| 26 | 須恵器 | 坏　身 | － | － | 8.4 | 内外面：暗青灰色 | 内面：体部回転ナデ、底部不定方向のナデ／外面：体部回転ナデ、底部回転糸切りの後不定方向のナデ | 体部下半から底部にかけて、全体の30% |
| 27 | 須恵器 | 坏　身 | 12.6 | － | － | 内外面：灰色 | 内面：回転ナデ／外面：口縁部回転ナデ、体部下半不定方向のナデ | 口縁から体部下半にかけて、全体の15% |
| 28 | 須恵器 | 坏　身 | － | － | 8.2 | 内外面：灰色 | 内外面：回転ナデ／底部回転糸切り、高台貼り付けの後ナデ | 底部のみ、全周の40% |
| 29 | 須恵器 | 長頸壺 | － | － | － | 内外面：青黒色 | 内外面：回転ナデ | 頸部の70% |
| 30 | 須恵器 | 壷 | － | － | 8.2 | 内外面：灰色 | 内面：粗い回転ナデ／外面：胴部上半は回転ナデ、下半は回転ヘラケズリ、底部回転糸切りの後ナデ、高台部回転ナデ | 胴部から底部にかけて、全体の20% |
| 31 | 須恵器 | 壷 | － | － | － | 内　面：青灰色<br>外　面：赤灰色 | 内面：回転ナデ／外面：下半回転ヘラケズリの後回転ナデ、底部回転糸切り、高台貼り付けの後回転ナデ／底面にヘラ記号「×」 | 胴部下半から底部にかけて、全体の20% |
| 32 | 須恵器 | 長頸壺 | － | － | － | 内外面：青灰色 | 内外面：回転ナデ | 頸部の80% |
| 33 | 須恵器 | 壷 | － | － | 9.4 | 内　面：灰色<br>外　面：暗赤灰色 | 内面：回転ナデ／外面：胴部回転ヘラケズリ、高台部～底部回転ナデ、高台内ナデ | 底部のみ、全周の20% |
| 34 | 須恵器 | 壷 | － | － | 8.9 | 内外面：灰色 | 内面：回転ナデ／外面：回転ヘラケズリ、高台部回転ナデ、底部回転糸切りの後ナデ | 底部のみ、全周の100% |
| 35 | 須恵器 | 甕 | － | － | － | 内外面：灰色 | 内外面：回転ナデ／2条づつのヘラ描き沈線によって区画された文様帯3段に３～4条の櫛描き波状文 | 口縁部のみ、全周の20% |
| 36 | 須恵器 | 甕 | － | － | － | 内外面：灰色 | 内面：頸部ナデ、肩部以下回転ナデ／外面：頸部～肩部回転ナデ、胴部回転ヘラケズリの後ナデ／円孔1ヶ所 | 全体の30% |
| 37 | 須恵器 | 甕 | － | － | － | 内外面：灰色 | 内面：頸部ナデ、肩部以下回転ナデ／外面：頸部～肩部回転ナデ、胴部下半回転ヘラケズリ／透孔は欠損 | 全体の30% |
| 38 | 須恵器 | 甕 | － | － | － | 内　面：にぶい赤褐色<br>外　面：赤黒色、オリーブ黄 | 内面：回転ナデ／外面：肩部回転ナデ、胴部回転ヘラケズリの後回転ナデ／焼成不良 | 胴部のみ、全周の30% |
| 39 | 須恵器 | 円面硯 | － | － | － | 内外面：灰色、上面に自然釉 | 内面：天井部粗い指ナデ、側面回転ナデ／外面：回転ナデ／上面(陸)は使用によりなめらかに摩耗、一部に墨痕 | 上部のみ、全体の30% |
| 40 | 鉄製品 | 不明板状 | | | | | 平面鏃状だが刃つかず、板状をなす | |

## Tab. 39　SD33出土遺物観察表（Fig.231）

| 番号 | 種　別 | 器種 | 法　量（cm） | | | 色　　調 | 調　　整（内面／外面／特記事項） | 残　存　度 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | | | |
| 41 | 須恵器 | 甕 | － | － | 4.8 | 内外面：灰色 | 内面：回転ナデ／外面：回転ヘラケズリ、底部回転糸切り／見込みにはらせん状にナデ痕が溝状に残る | 底部のみ、全周の70% |
| 42 | 土師器 | 坏 | 15.8 | － | － | 内外面：赤色塗彩<br>胎　土：灰黄褐色 | 内面：口縁部回転ナデ／外面：口縁部回転ナデ、体部ヘラケズリ／見込みに放射状の暗文かすかに残る | 全体の25% |

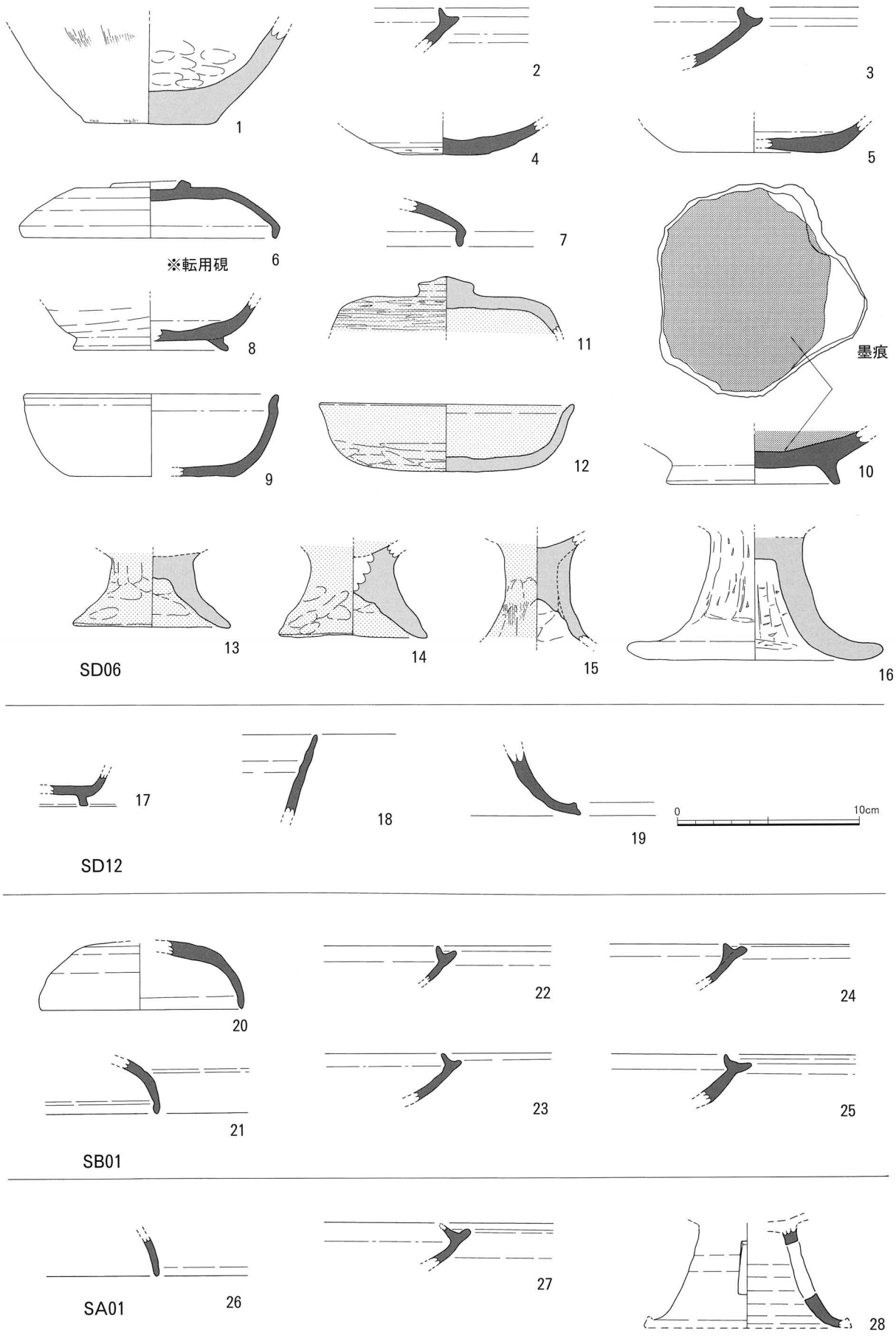



Fig.227　掘立柱建物・溝出土遺物実測図①（S＝1/3）

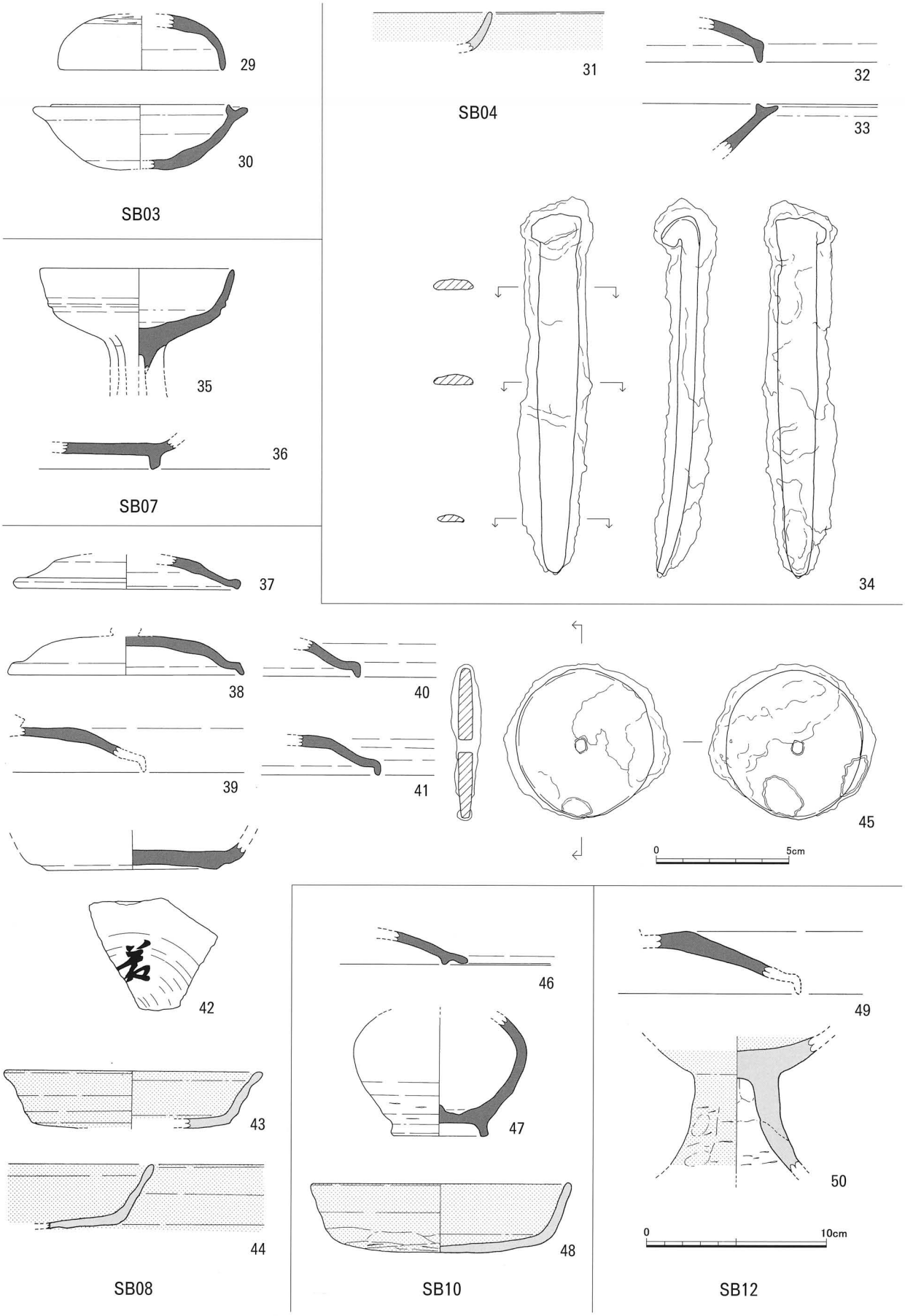



Fig.228　掘立柱建物・溝出土遺物実測図②（Ｓ＝1/3、鉄製品はＳ＝1/2）

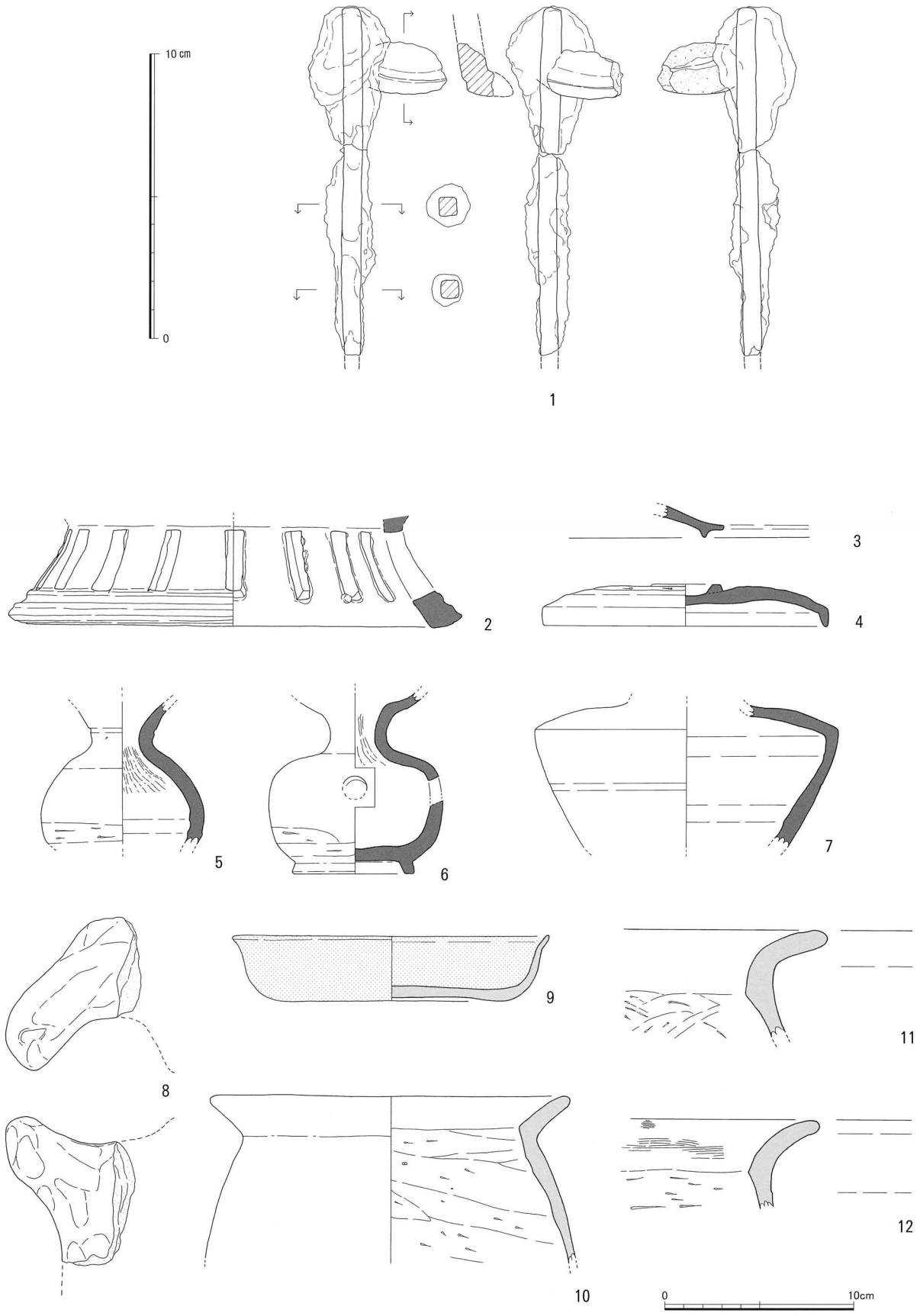



Fig.229　SD30 遺物実測図（S＝1/3、鉄製品はS＝1/2）

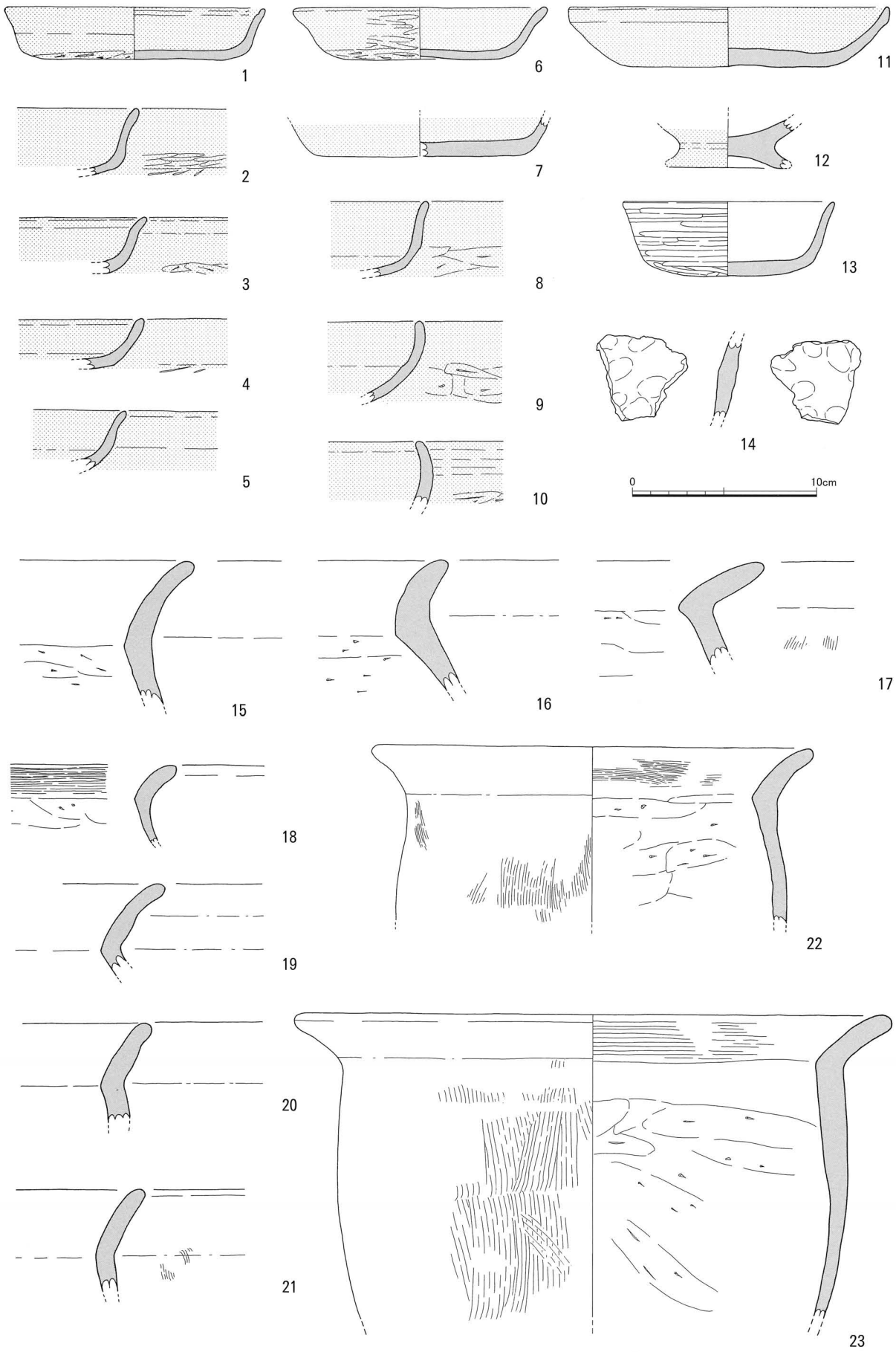



Fig.230　SD32 遺物実測図（S＝1/3）

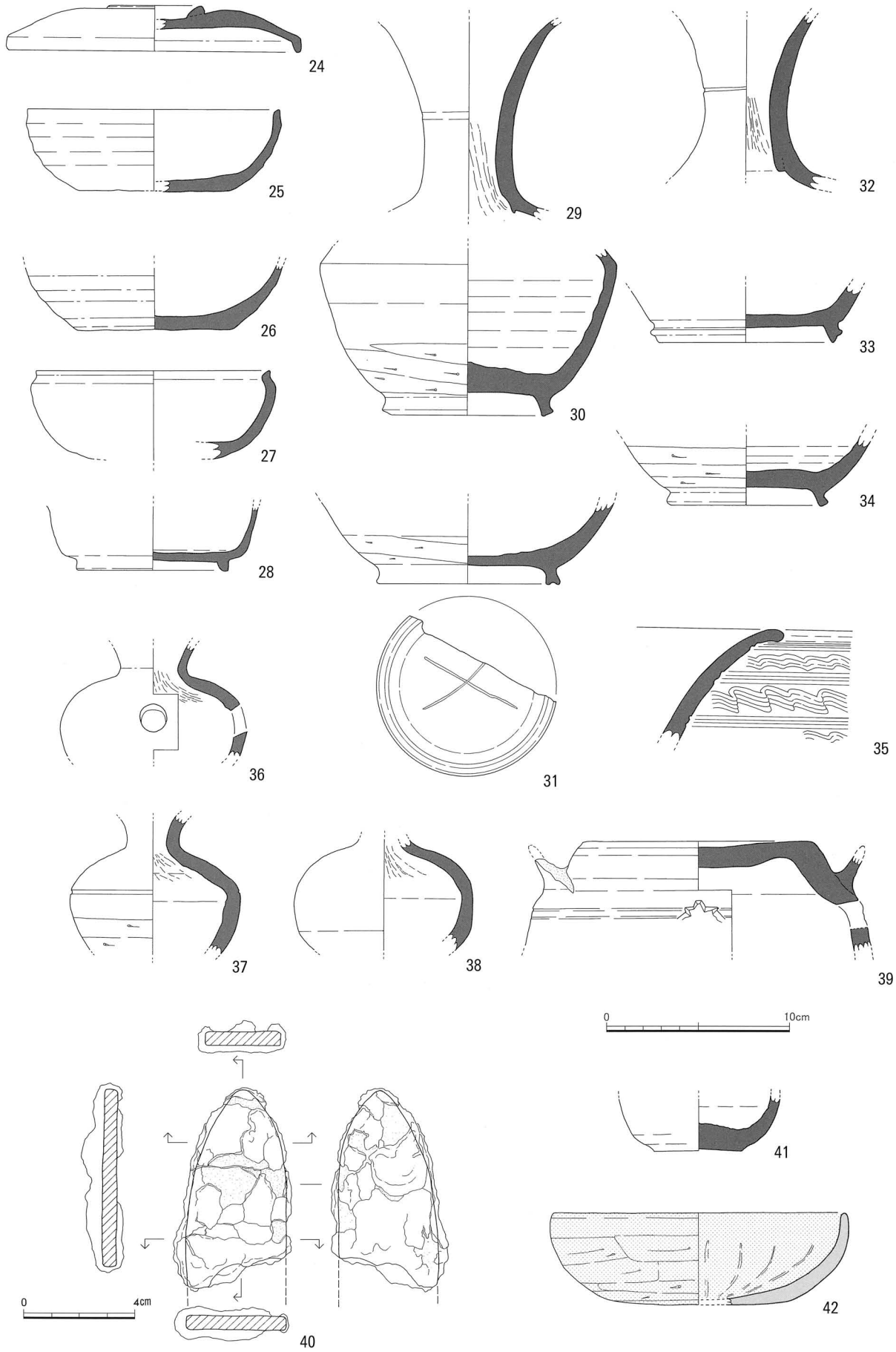
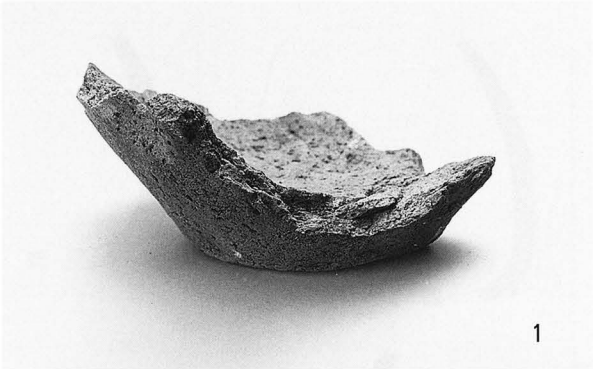



Fig.231　SD32・SD33 遺物実測図（S＝1/3、鉄製品はS＝1/2）



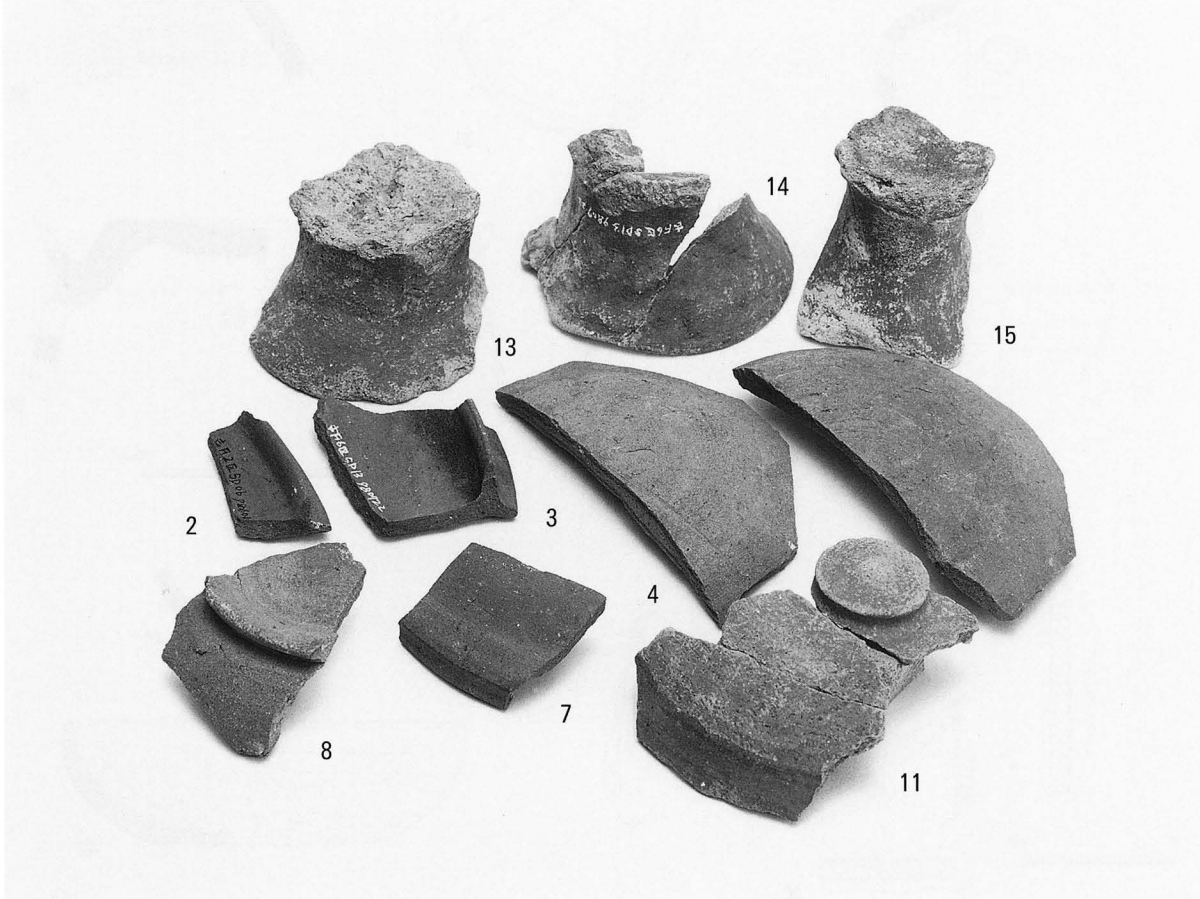
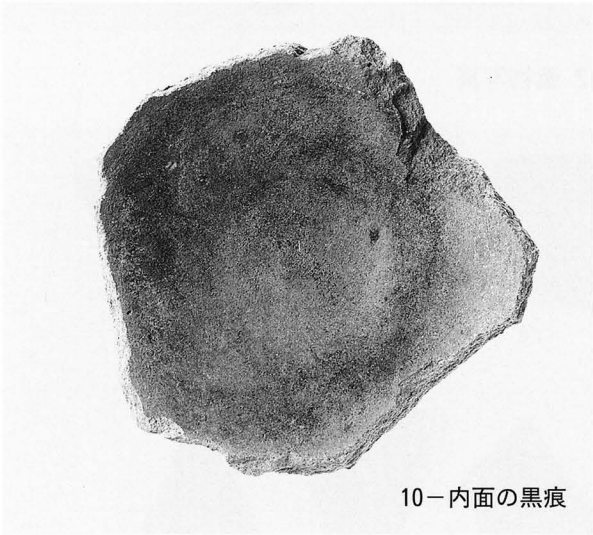



Fig.232　SD06 遺物写真①

10


10－内面の黒痕

12

12－裏面

16

16－内面

実測図非掲載

Fig.233　SD06 遺物写真②

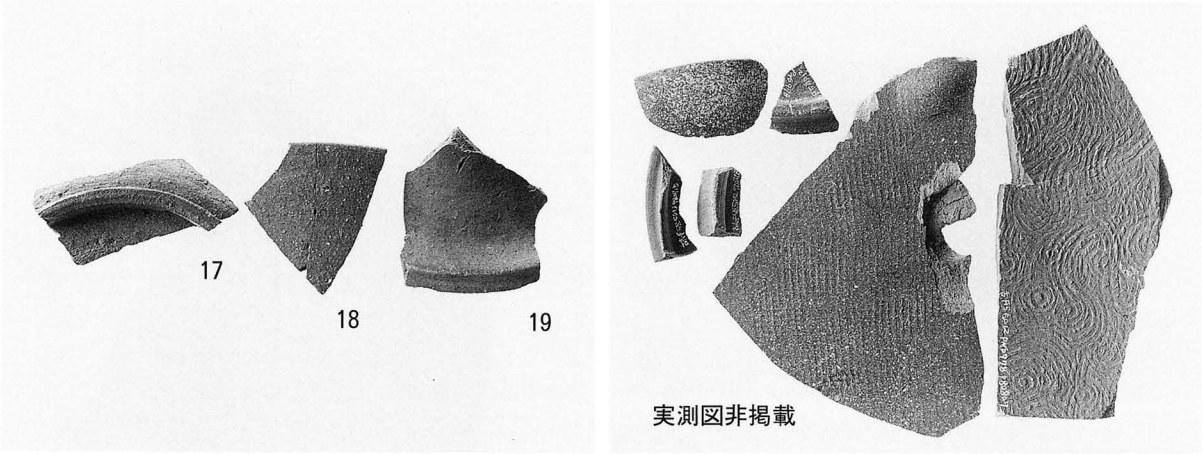
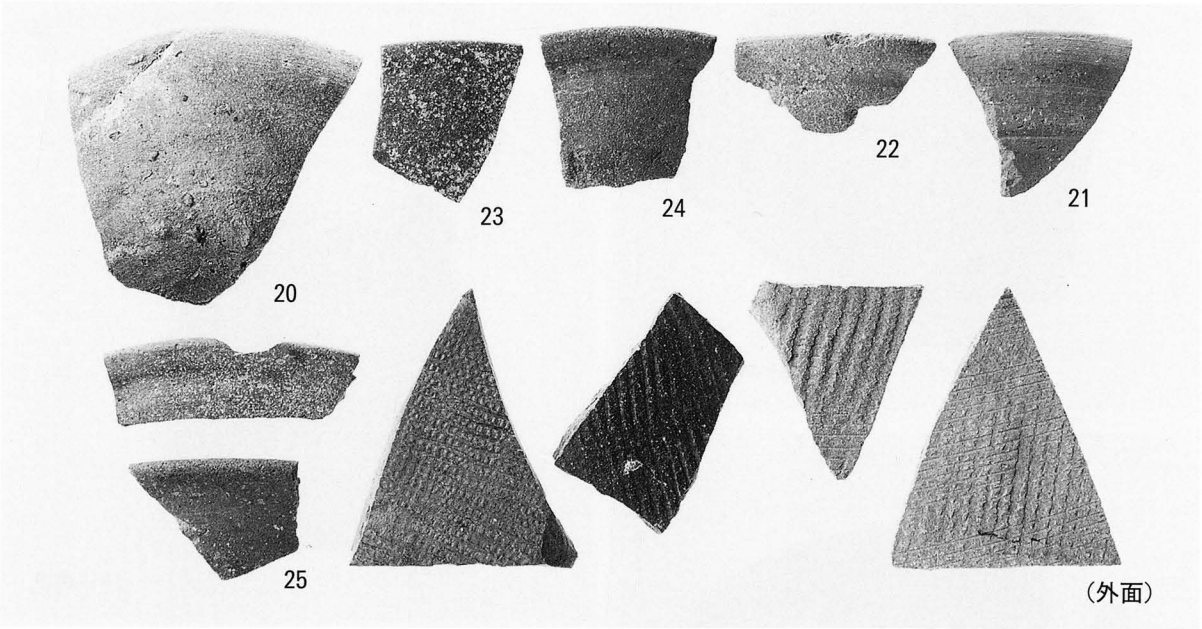



Fig.234　SD12 遺物写真



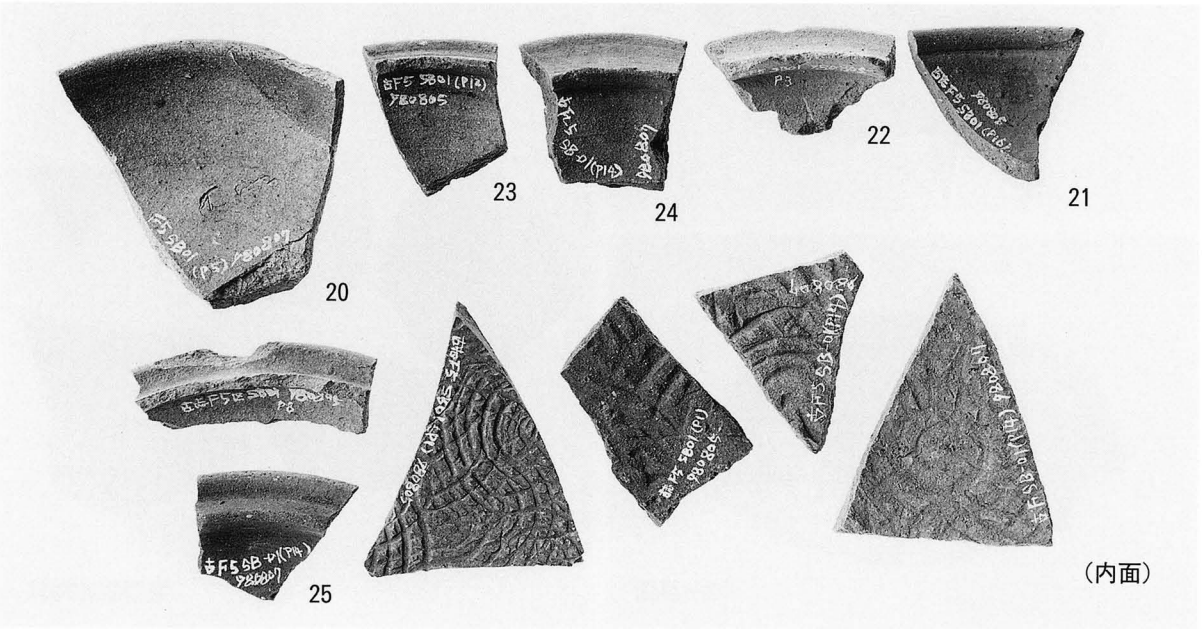
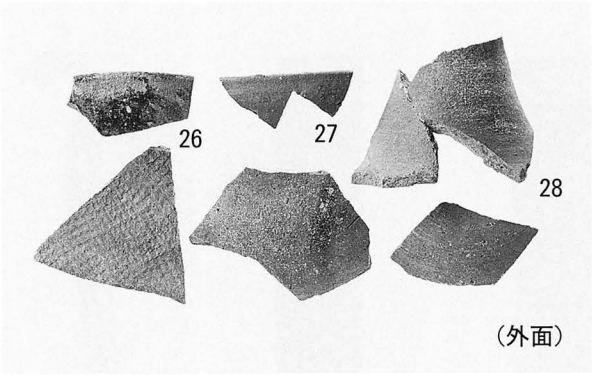




Fig.235　SB01 遺物写真



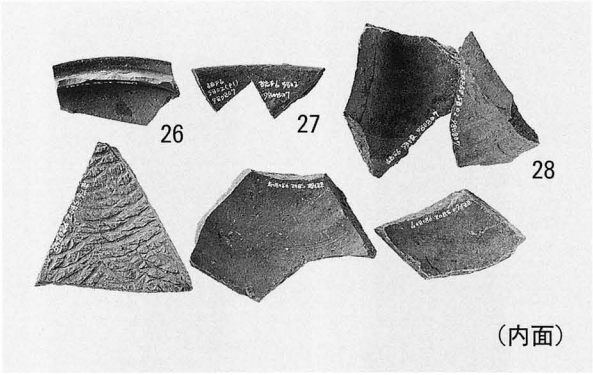
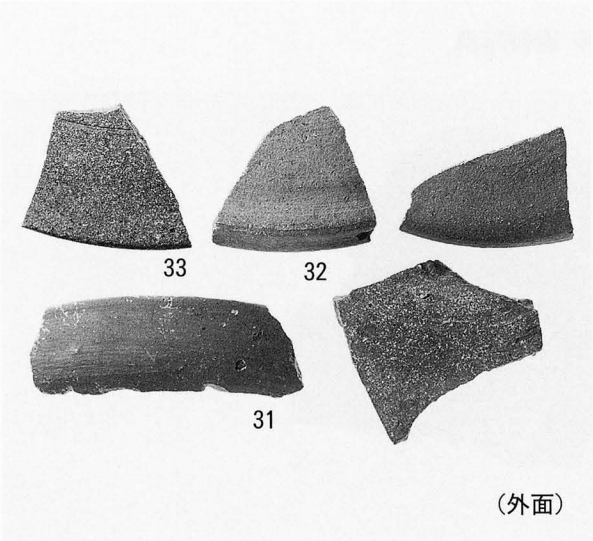




Fig.236　SA01 遺物写真

Fig.237　SB03 遺物写真



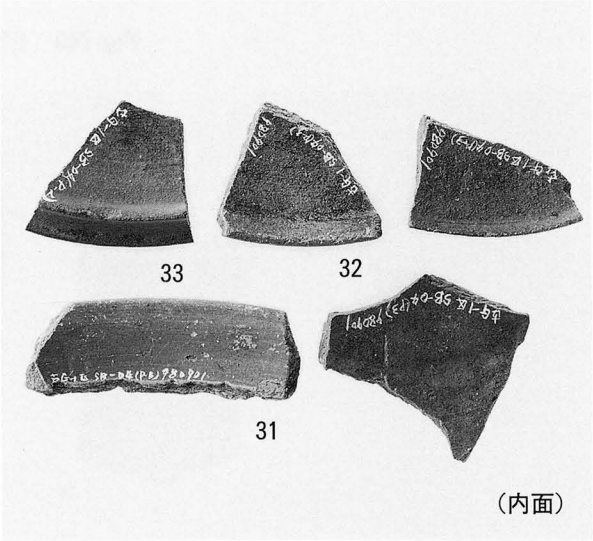




Fig.238　SB04 遺物写真①

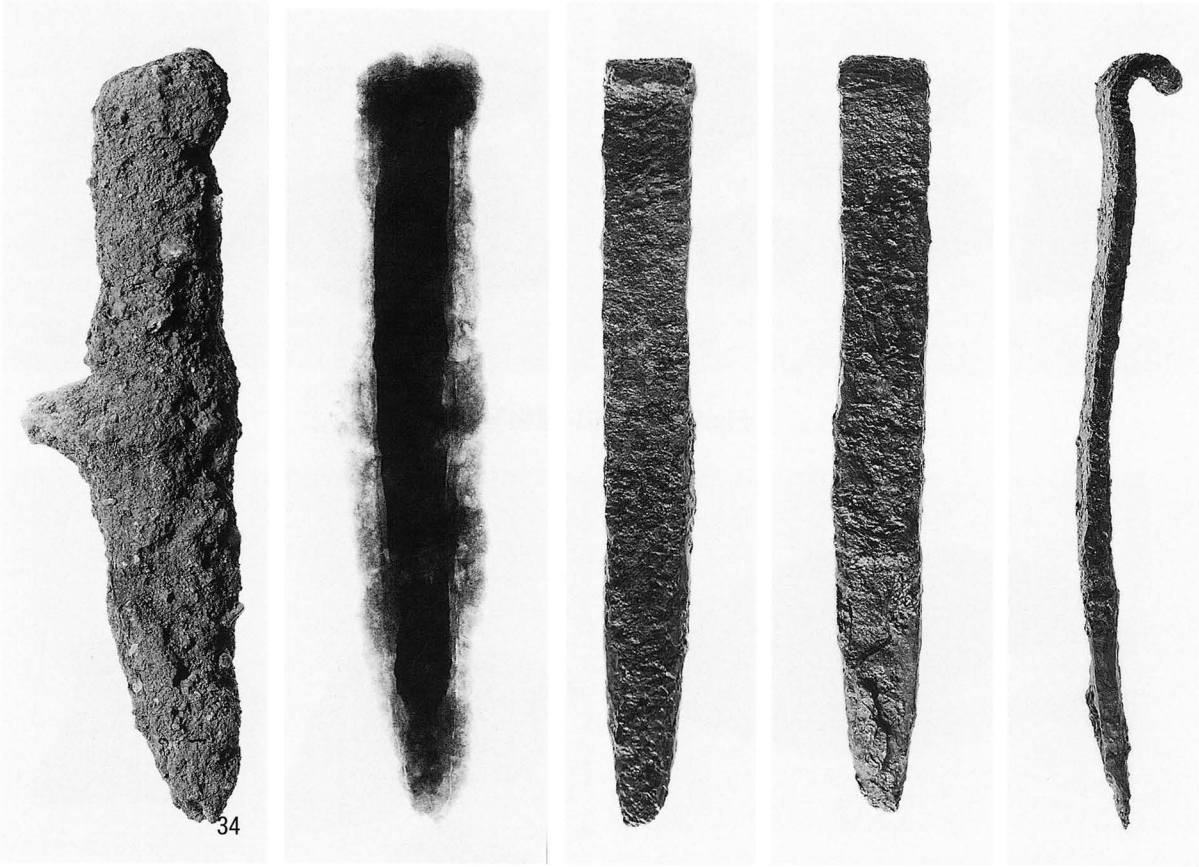



Fig.239　SB04 遺物写真②（左から処理前、同Ｘ線透過、処理後3面）

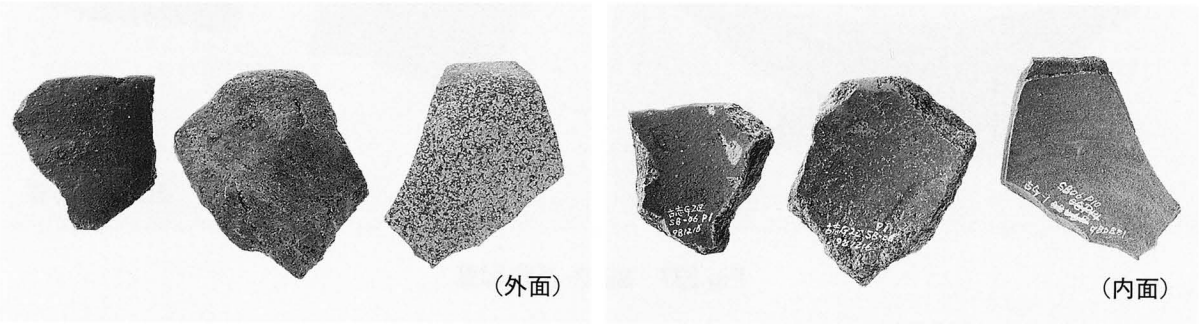



Fig.240　SB06 遺物写真

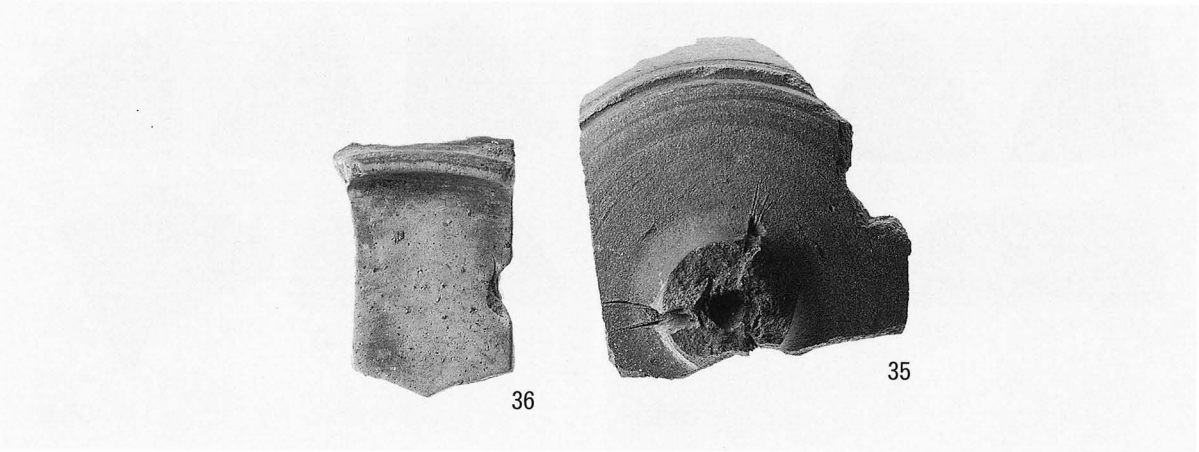
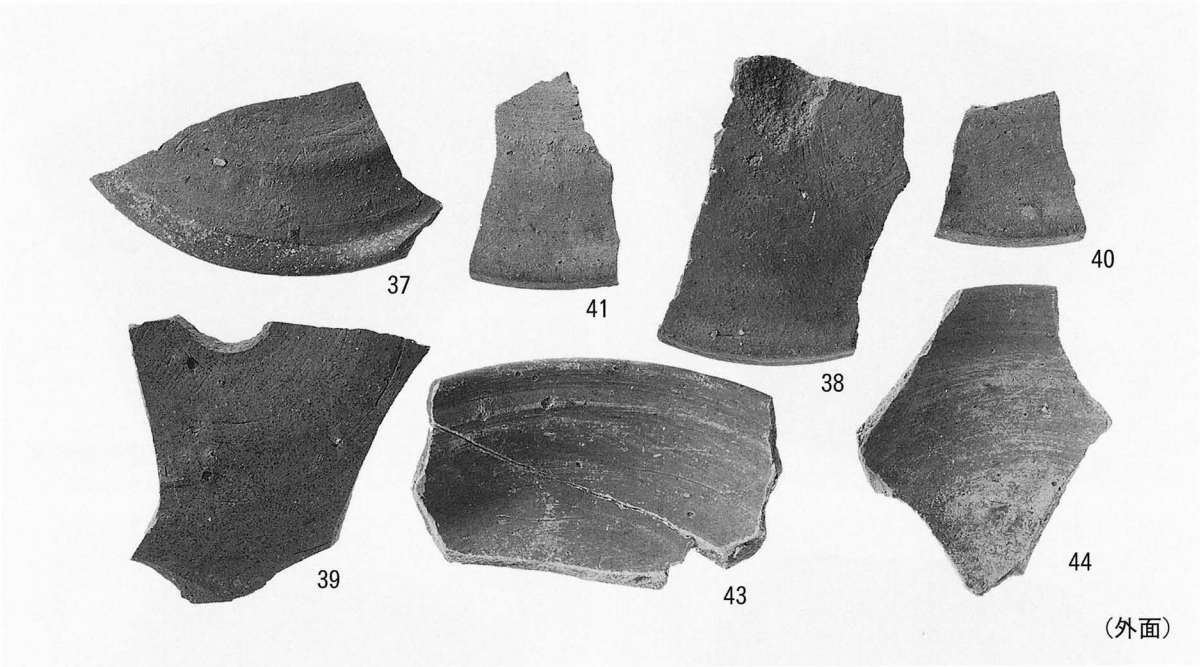
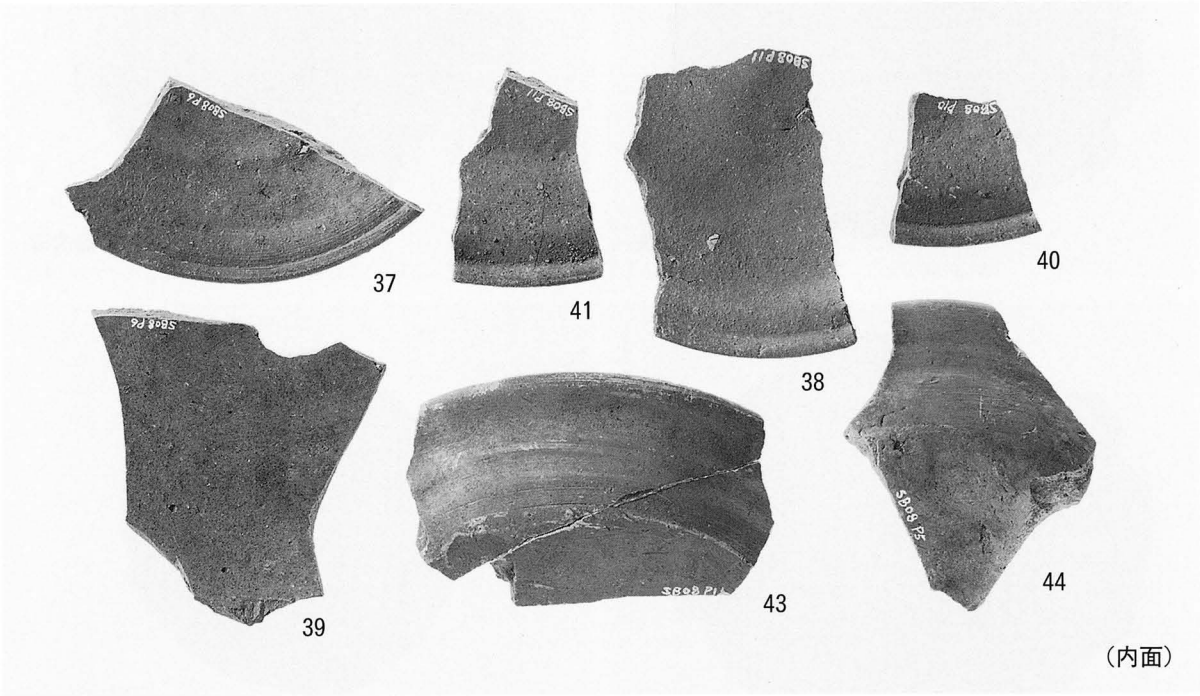
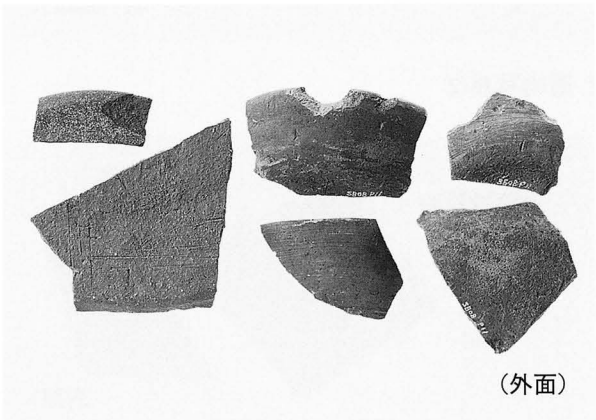



Fig.241　SB07 遺物写真



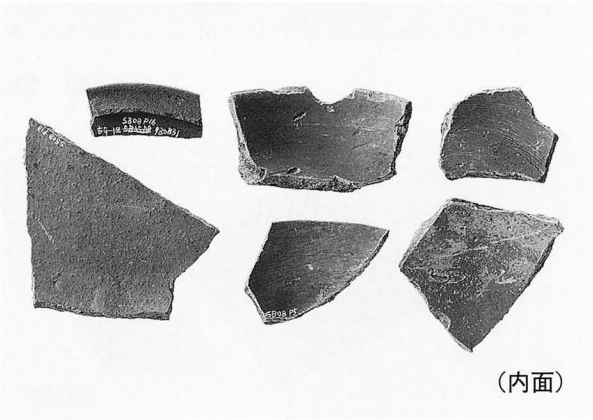
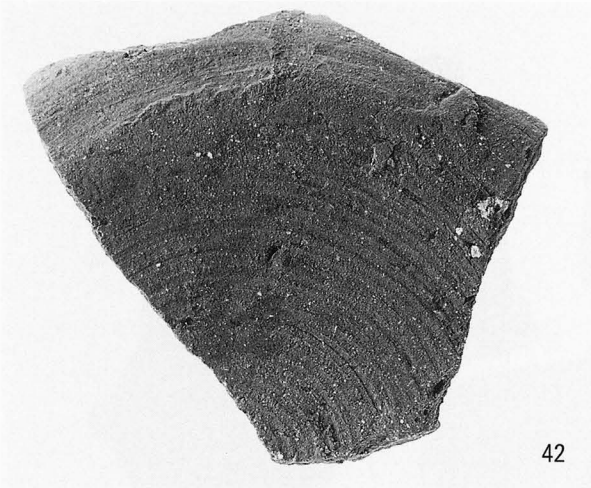
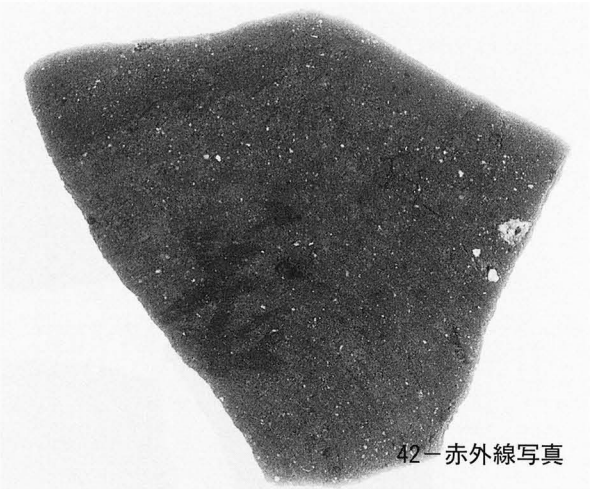
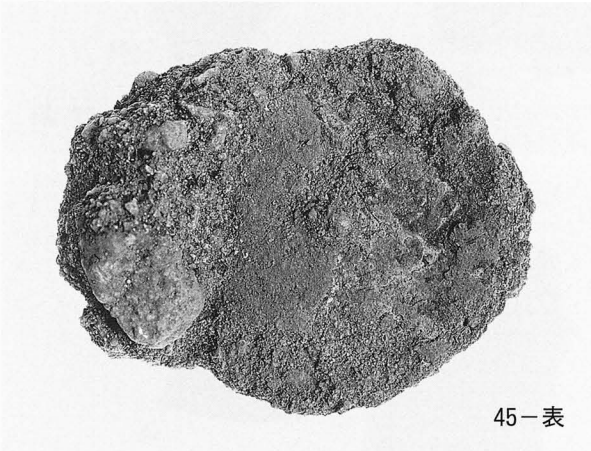
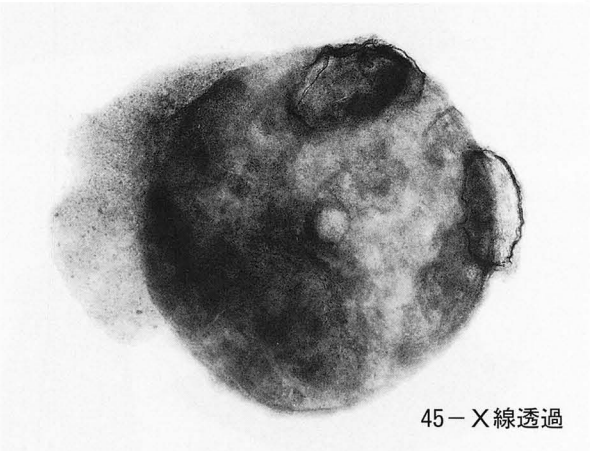



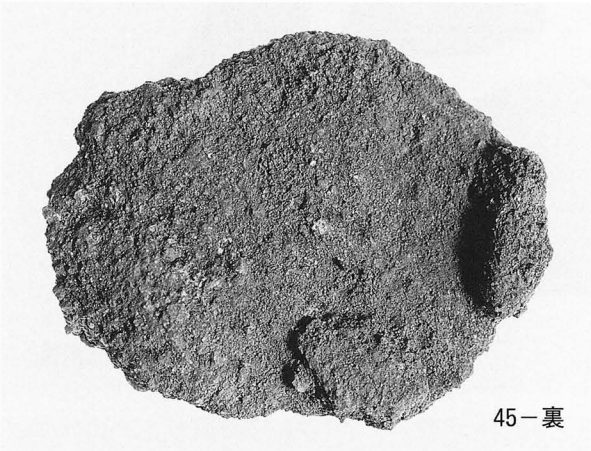

Fig.242　SB08 遺物写真①



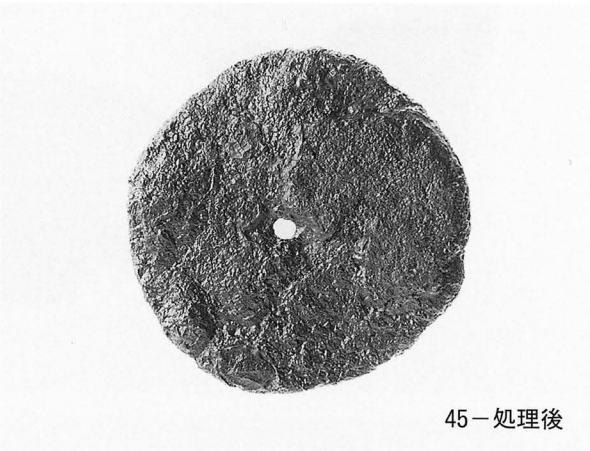
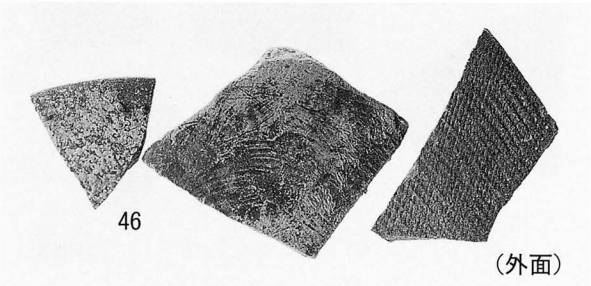




Fig.243　SB08 遺物写真②



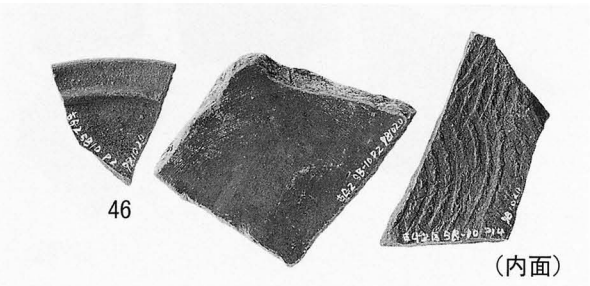




Fig.244　SB10 遺物写真①

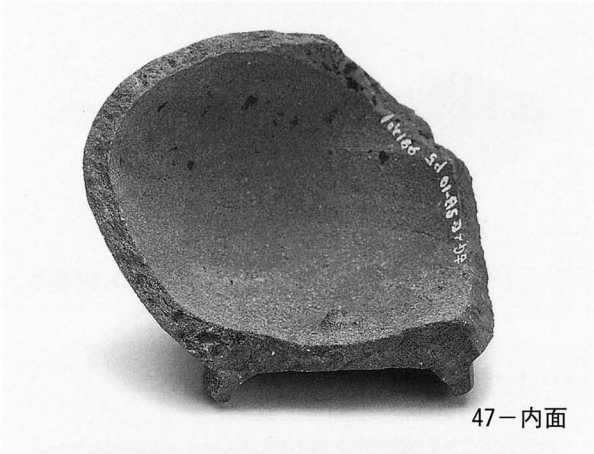



Fig.245　SB10 遺物写真②

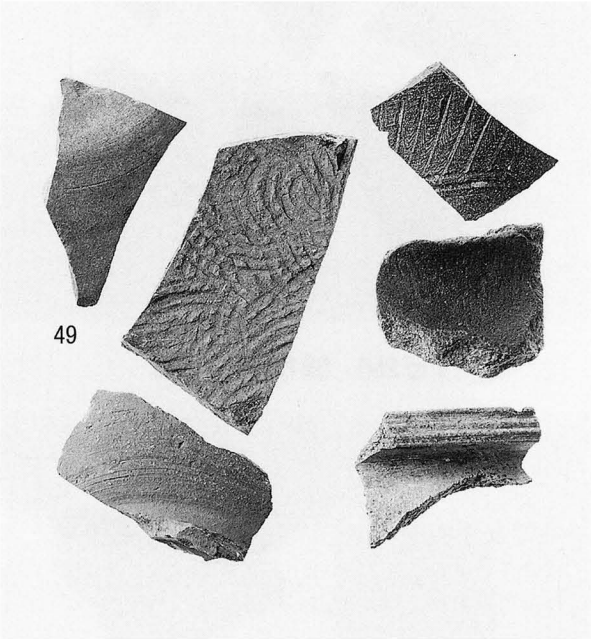



Fig.247　SB12 遺物写真

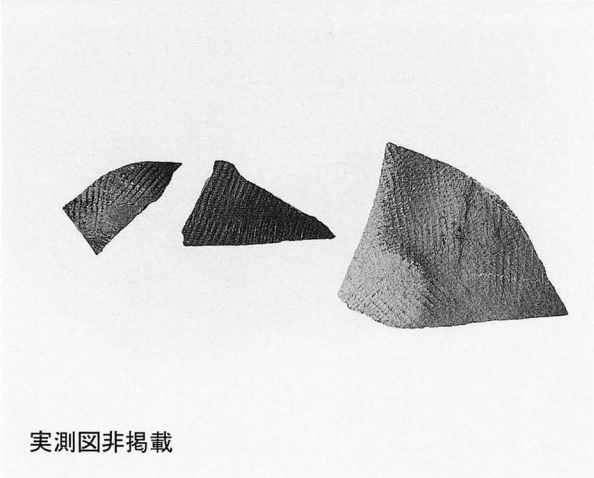



Fig.246　SB11 遺物写真

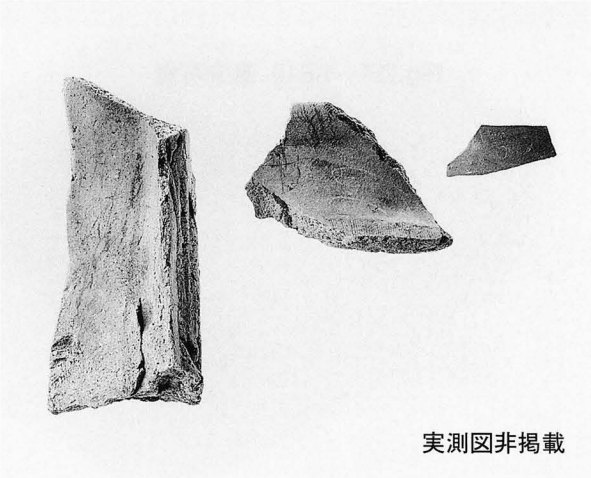



Fig.248　SB13 遺物写真

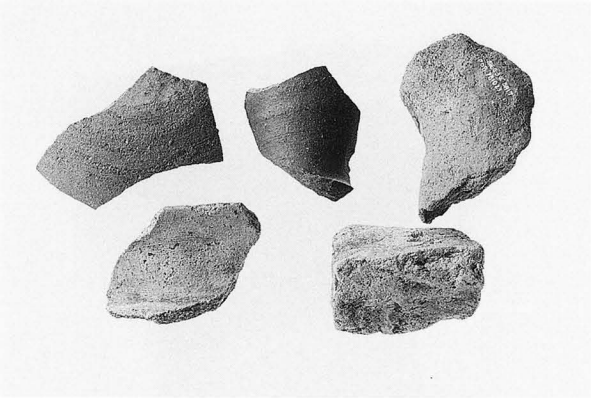


Fig.249　SB17 遺物写真

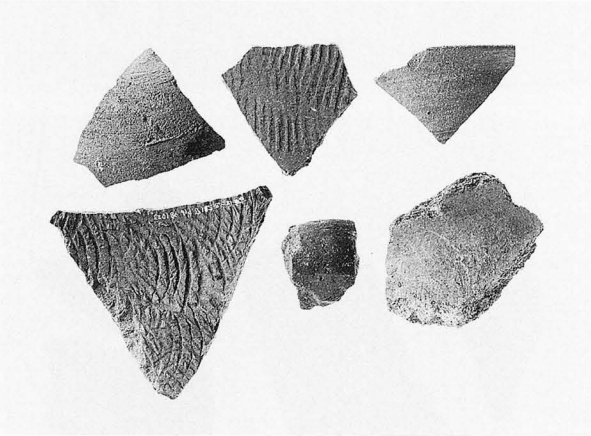


Fig.250　SB18 遺物写真

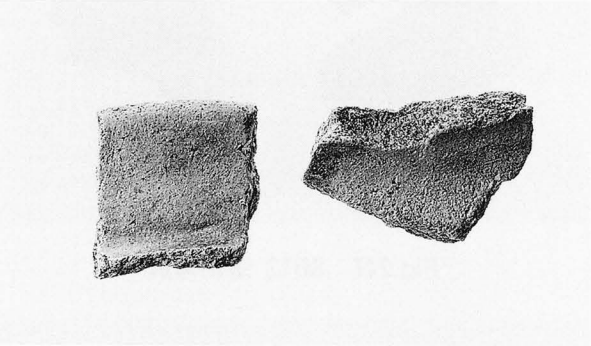
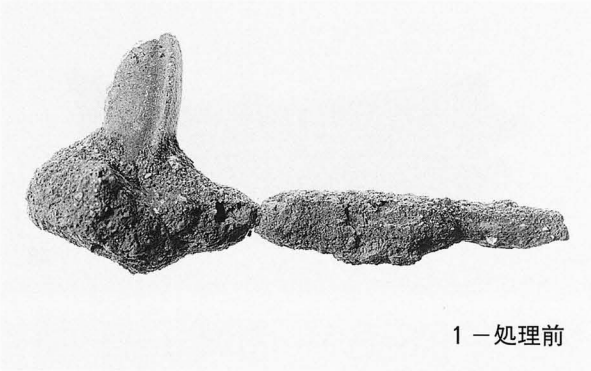
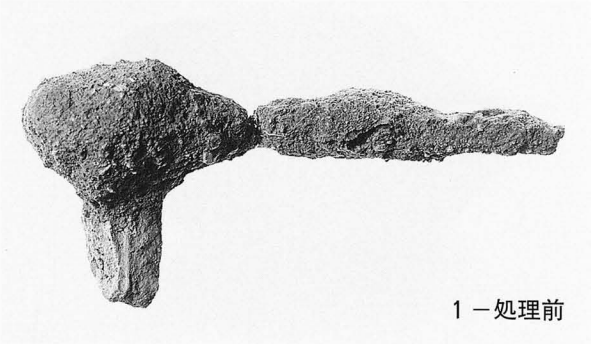


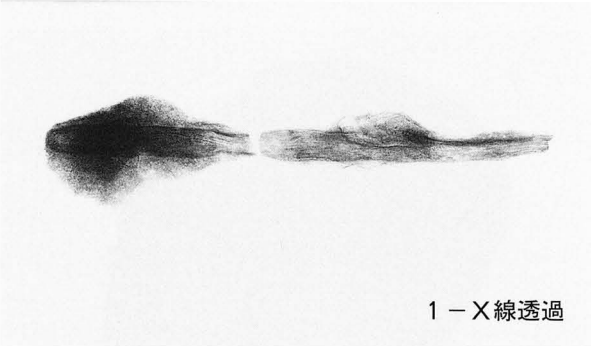
Fig.251　SB19 遺物写真



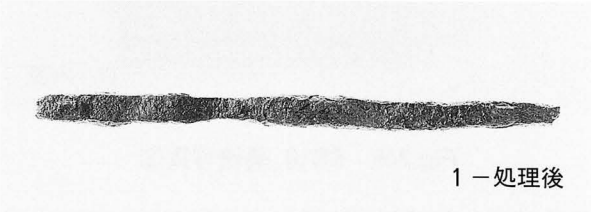
1 －処理前



1 －処理前



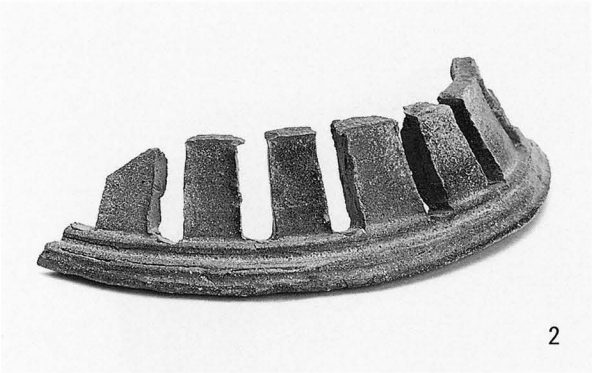
1 －Ｘ線透過

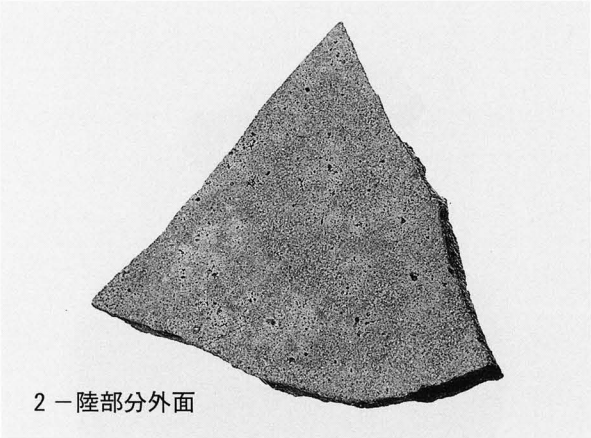


1 －処理後

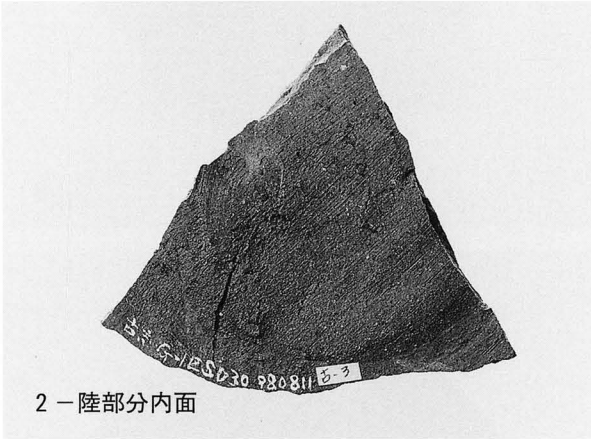
3

Fig.252　SD30 遺物写真①


2


2 －陸部分外面

2 －内面


2 －陸部分内面

2 －部分

5

4

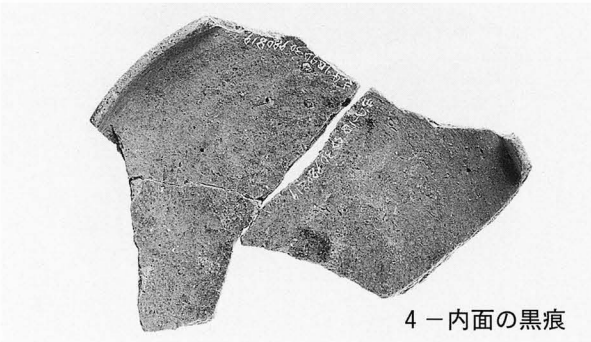
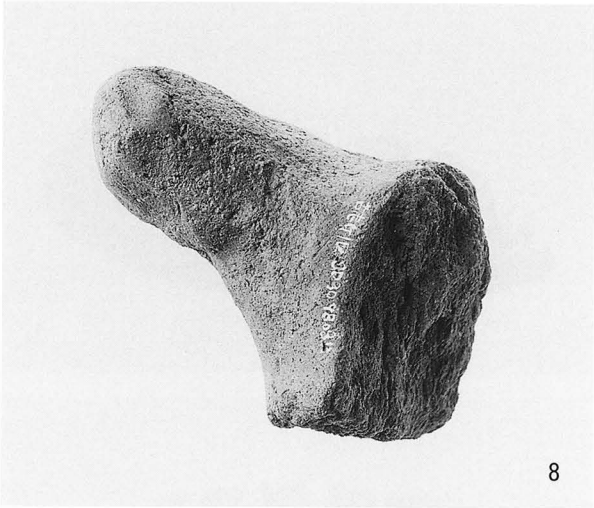

4 －内面の黒痕

Fig.253　SD30 遺物写真②

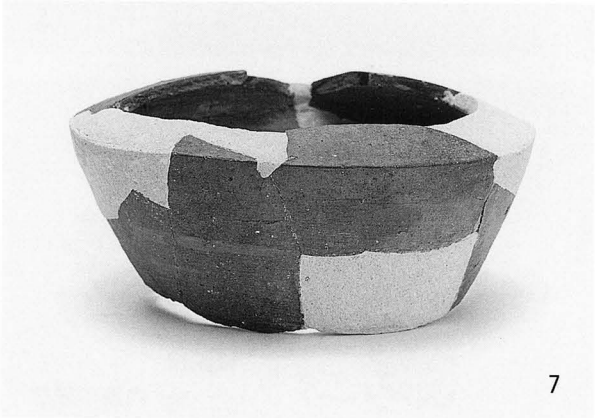
6


8

6－底面

9

10


7

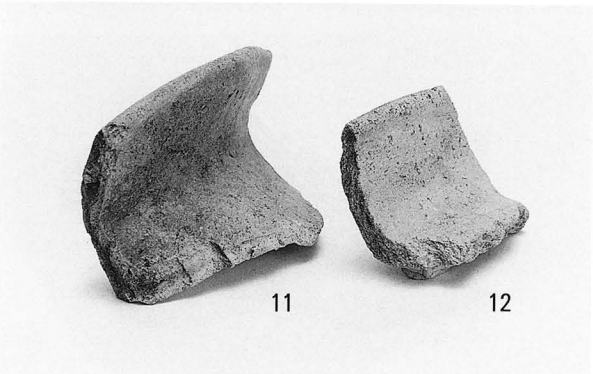

11　12

Fig.254　SD30 遺物写真③

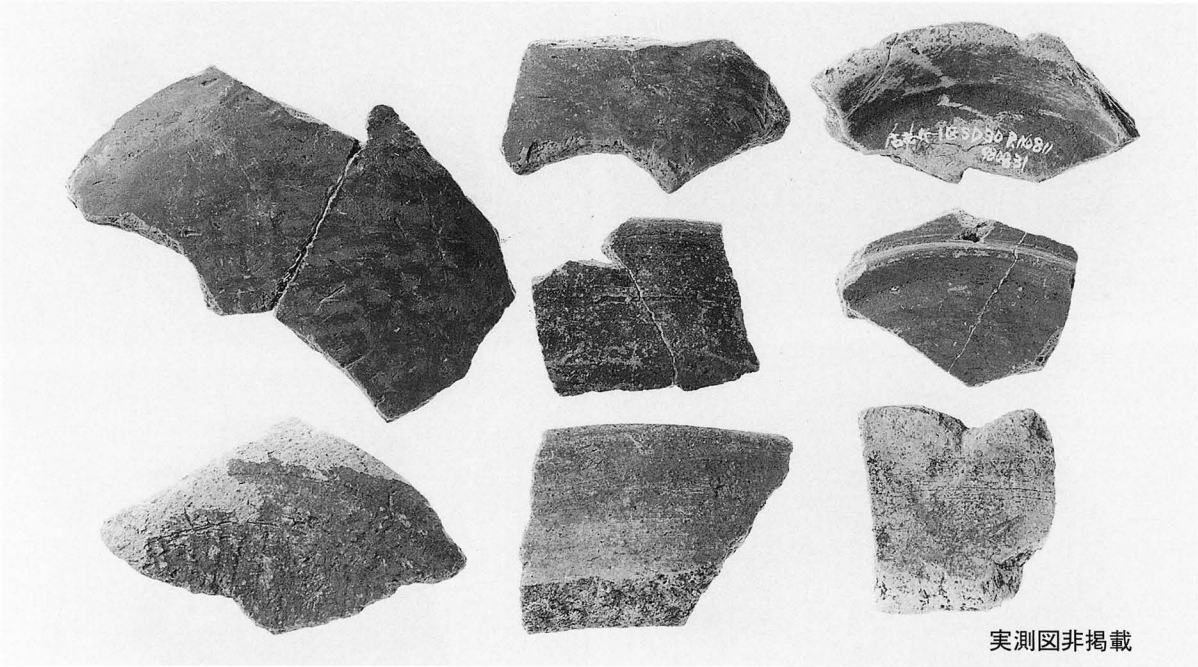
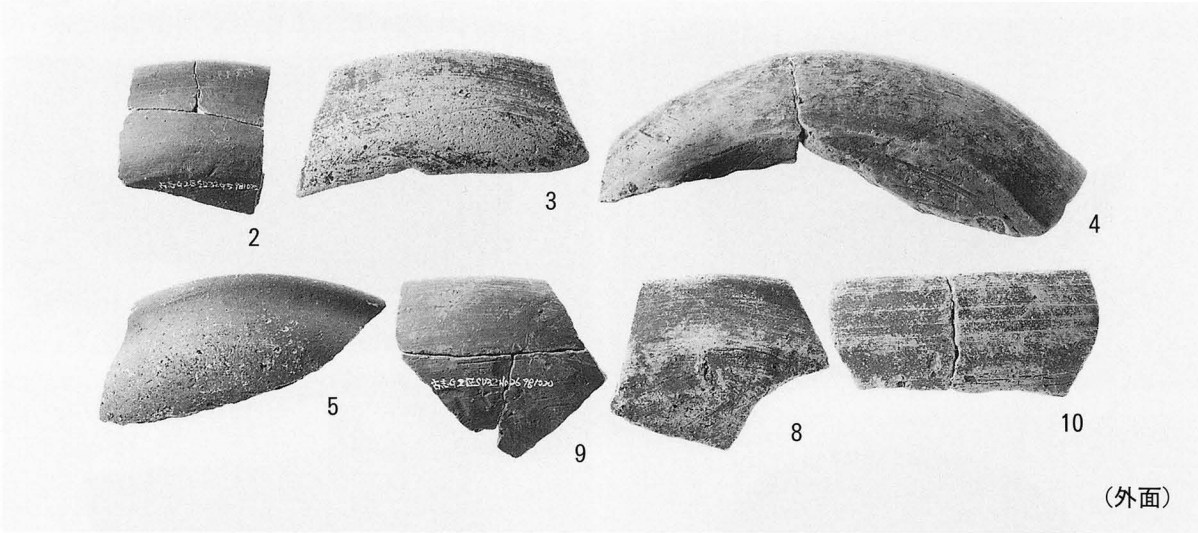



Fig.255　SD30 遺物写真④



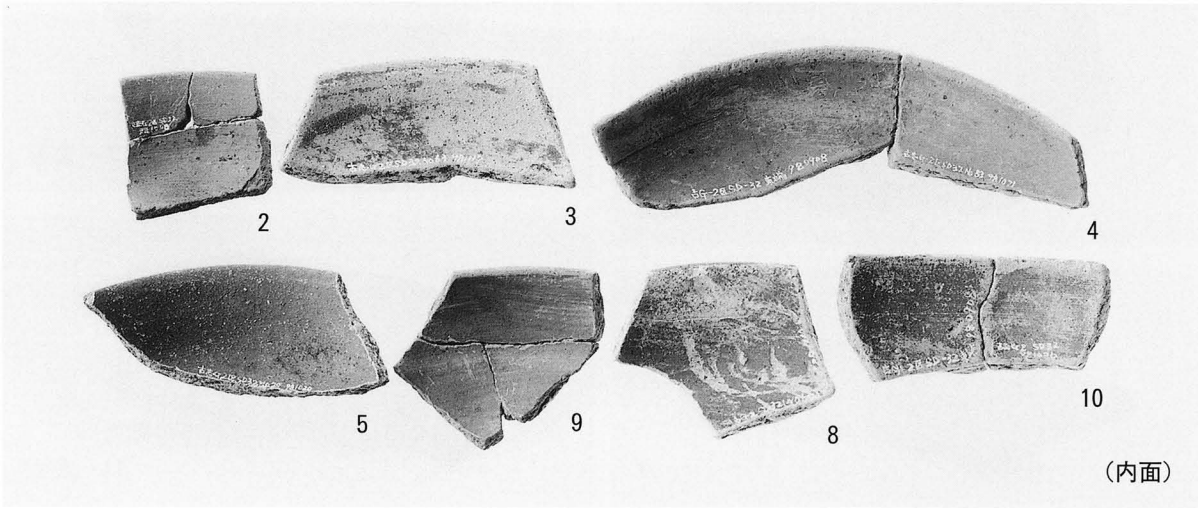
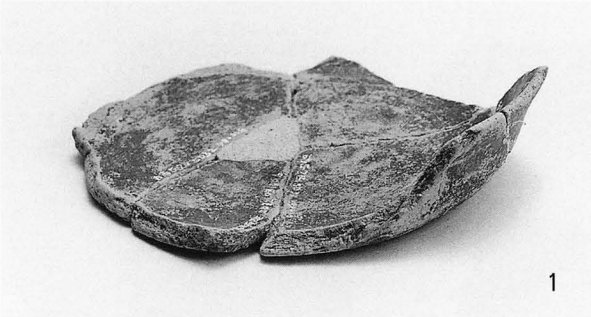
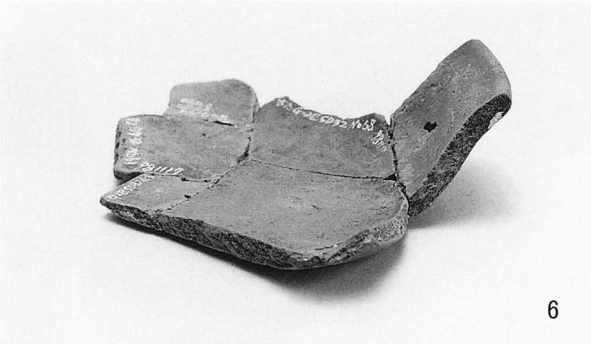
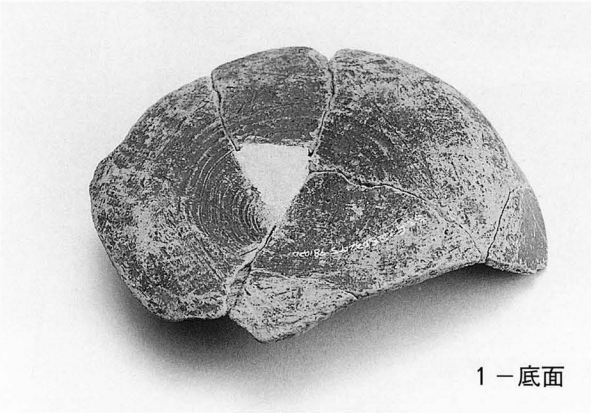
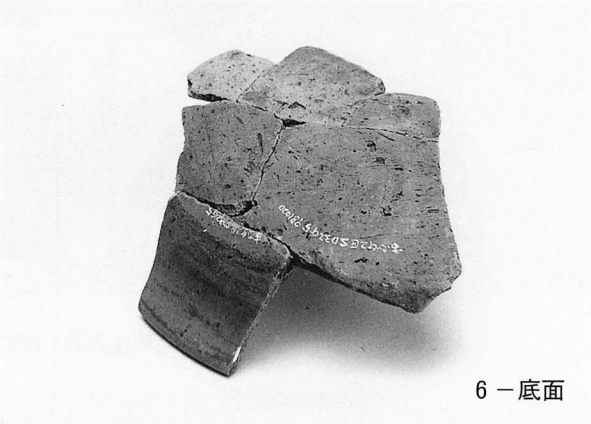




Fig.256　SD32 遺物写真①


1


6

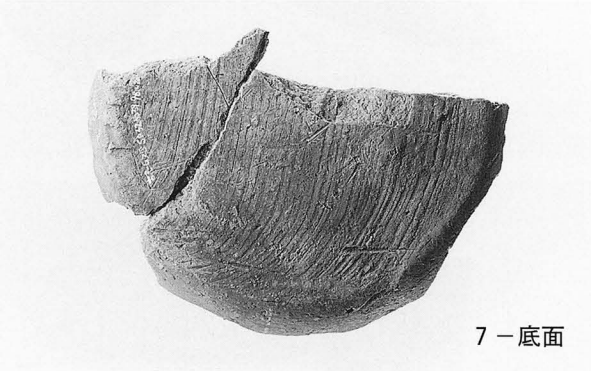

1－底面

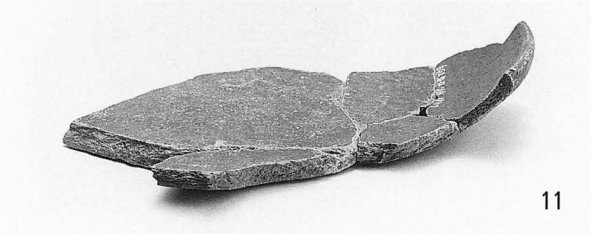

6－底面

13

7

13－底面


7－底面


11

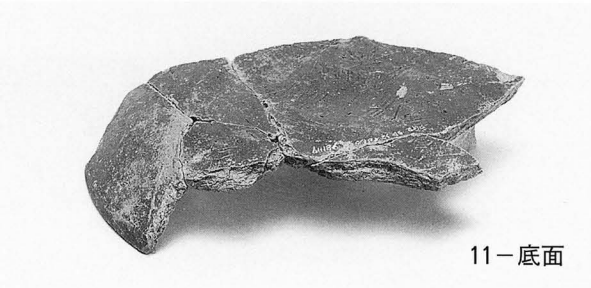
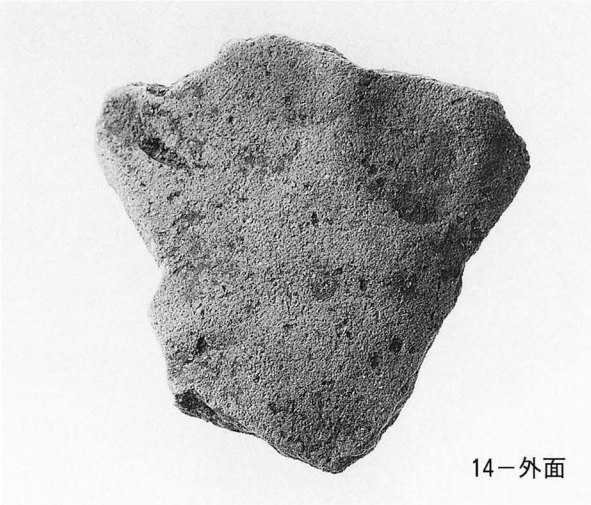
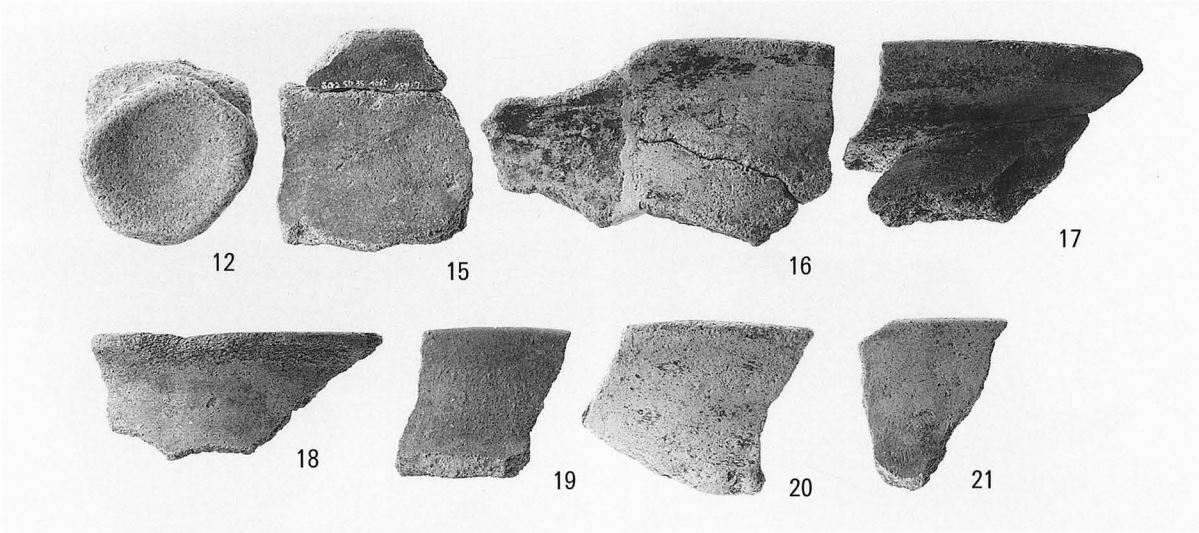
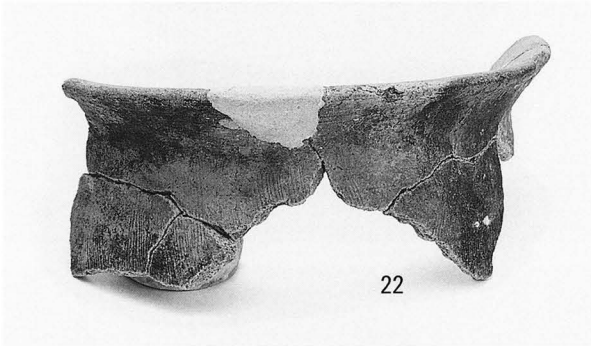
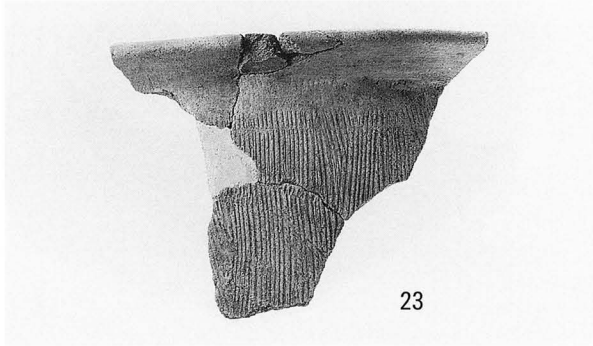

11－底面

Fig.257　SD32 遺物写真②





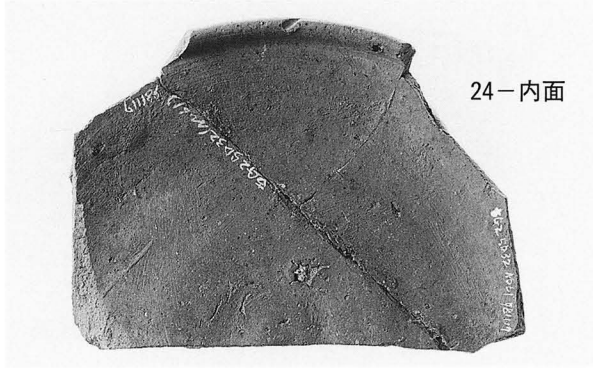
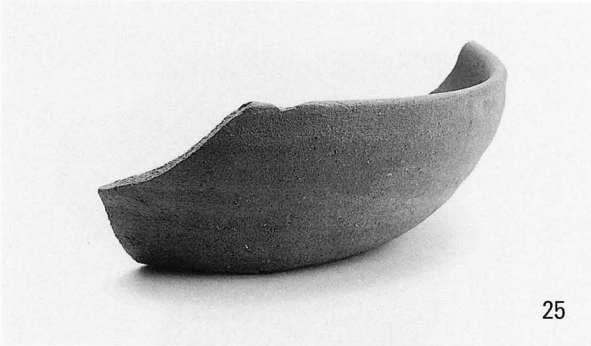
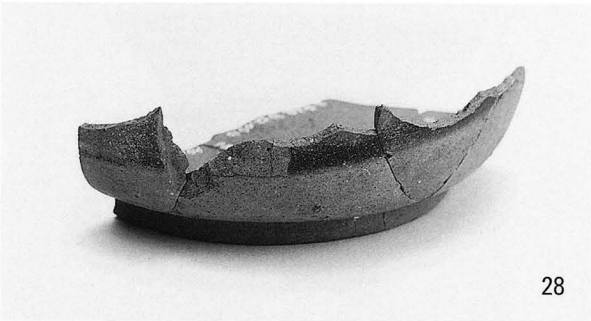
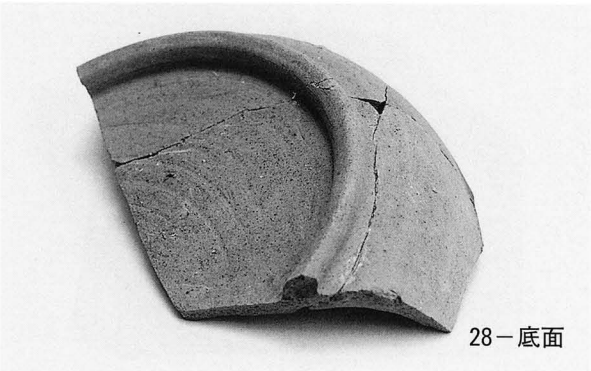
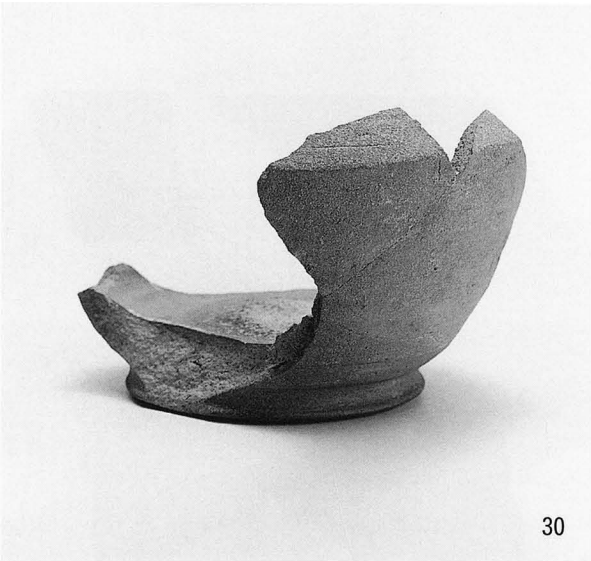



Fig.258　SD32 遺物写真③







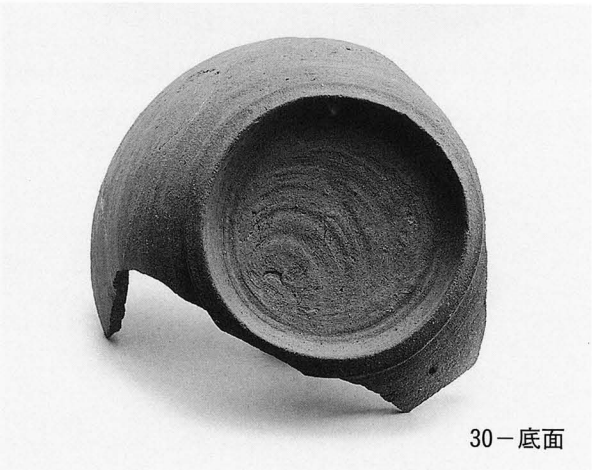




Fig.259　SD32 遺物写真④

31

33－底面

31－底面の
ヘラ記号

34

32

34－底面

32－体部との
接合部分

35

Fig.260　SD32 遺物写真⑤

36

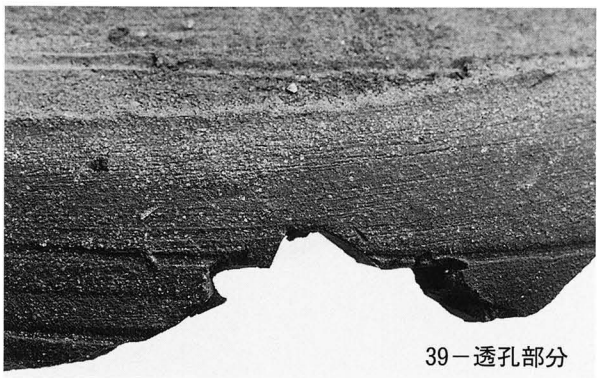
39

37

39

38

39－上面


39－透孔部分

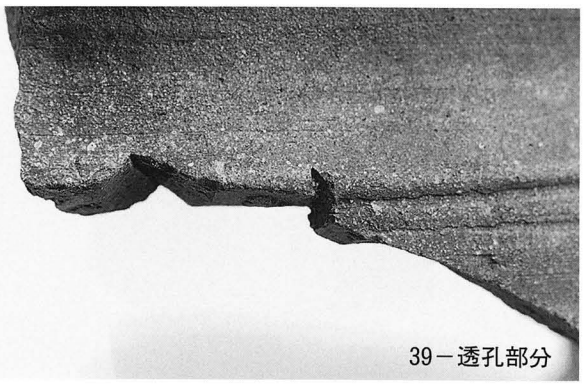
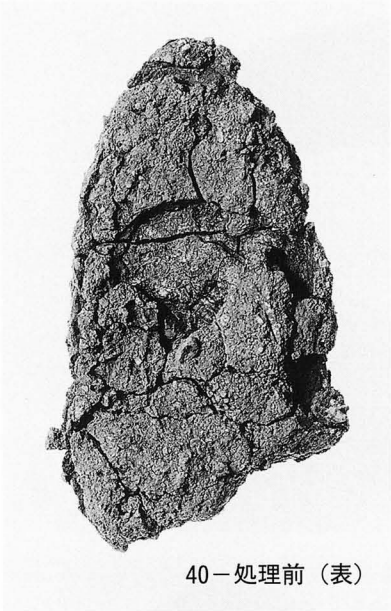
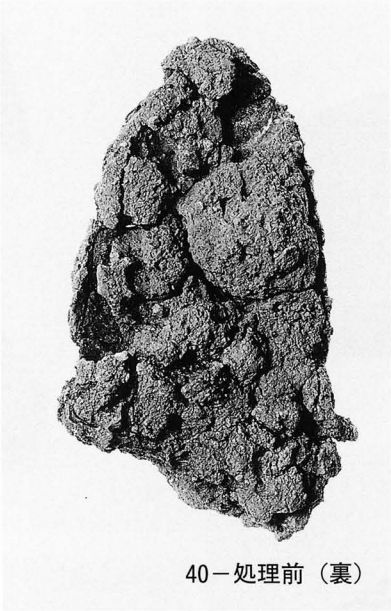
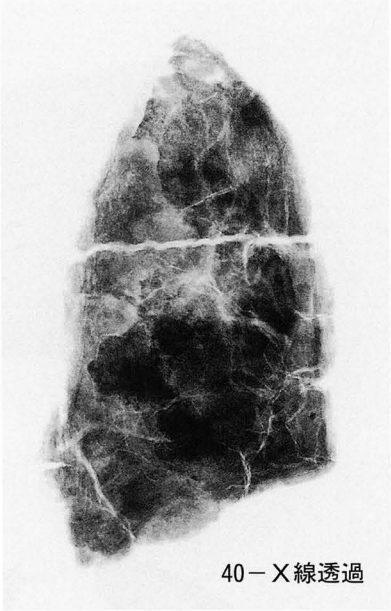

39－透孔部分

Fig.261　SD32 遺物写真⑥


40－処理前（表）


40－処理前（裏）


40－Ｘ線透過

40－処理後（表）

40－処理前（裏）

実測図非掲載

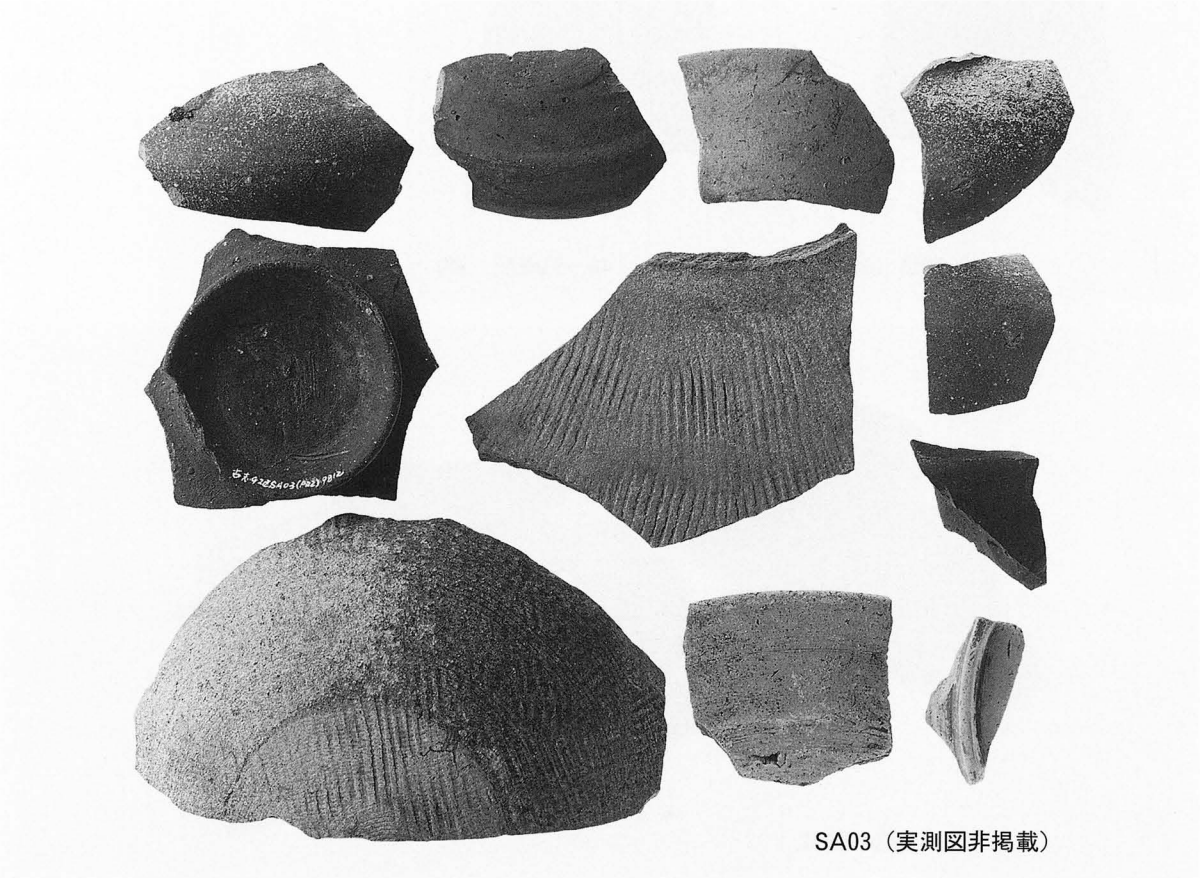
Fig.262　SD32 遺物写真⑦

41

42

42－内面

42－外面



SA03（実測図非掲載）

Fig.263　SD33・SA03 遺物写真

# 第４節　その他の溝・土坑

本節ではＧ区におけるその他の溝と土坑について解説する。これらの溝と土坑からは硯や瓦などの特殊遺物が出土しており、前節までに詳細を述べた神門郡家と関連する建物群と深い関係が窺える。これらの土坑の中には建物柱穴が含まれる可能性があるが、柱並びなどは不明のため、ここでは土坑として扱った。調査区境界近くに位置するものについては、建物本体が調査区外にあるものの一部にあたる可能性もある。

**１．SD30**（遺構写真Fig.264、遺物実測図Fig.229、遺物写真Fig.252～255）

（位置）Ｇ１区の西寄りに位置する南北方向の溝跡である。調査区境界を流れる現在の水路に隔てられ、Ｇ３区まで続いている（周辺図171）。Ｇ３区では遺構面が深く削られているため溝は底近くがわずかに残るのみである。また溝の北端は完全に削られており、途中で検出できなくなってしまった。この北側で西へ直角に曲がりＦ区のSD06と一連の溝となり、方形区画を作る溝である可能性もある（遺構位置図Fig.170）。

（規模・方位）幅２ｍ前後、検出面からの深さ最大で50㎝である。溝の軸は見極めがたいが、方位はほぼ南北方位座標軸と一致する。

（遺物の出土状況）写真Fig.264で示したように、溝の埋土の上層から底近くまで遺物が包含されている。

（遺物の内容）SD30の遺物については、前節で掲載している。円面硯など文字関連遺物が出土している。

**２．SK449**（遺物実測図Fig.268、遺物写真Fig.270）

Ｇ２区南東隅、柵列SA03の内側に位置する土坑である。須恵器坏蓋１点が出土している。やや焼成が甘いもので、輪状つまみの形状から８世紀中葉のものとみられる。内面はつるつるに摩耗し、墨痕が付着する。転用硯として使用されたものである。

**３．SK453**（遺物実測図Fig.268、遺物写真Fig.270）

大型建物SB11の北側に掘られた土坑である。須恵器坏身１点が出土している。

**４．SK458**（遺構図Fig.266、遺構写真Fig.267、遺物実測図Fig.268、遺物写真Fig.271）

Ｇ２区南壁沿いで確認された土坑である。大型建物SB12の内側に位置している。掲載した遺物は１が弥生前期頃の甕、２が弥生後期初頭頃の甕で両者とも混入である。３は円面硯の上端部分で、海部に貼り付けた部分から剥離している。４は平瓦の破片で、端部一面以外はすべて破面である。外面には縄目のタタキ痕、内面には布目痕が残る。内面には模骨痕とみられる段差が観察される。成形方法は布目繊維の方向が斜行する点から桶巻き作りの可能性もあるが、湾曲がゆるやかで一枚作りの特徴も備えており断定できない。全体に色調が明橙色を呈して焼成が甘い点は新しい様相といえるが、小片のため断定できない。

**５．SK459**（遺構図Fig.266、遺構写真Fig.267）

SB12の柱穴を切っている。径120㎝の正円形で、深さ70㎝ほどである。下層は単一の埋土で満たされるが、上層部分からは礫が集中して出土した。この中には比較的平坦な面をもつ大きめの石も含まれている。平面形が整っていることから礎石設置のための根石を含む地行の可能性も考えられるが、断定はできない。下層については柱痕跡など無く、掘立柱からの建て替えの可能性もあるが不明である。遺物は出土していない。

**６．SK460**（遺構図Fig.266、遺構写真Fig.267、遺物実測図Fig.268、遺物写真Fig.272）

SB12の柱穴を切っている。差し渡し最大で130㎝、不定形の土坑である。最上面に拳大の亜円礫が多数集中して置かれていた。これも礎石根石の可能性が考えられる。下層については分層できない単一の埋土で、柱痕跡などは一切認められない。

遺物はFig.268に示したように赤彩土師器の坏などが出土している。

**７．SK474**（遺構図Fig.266、遺物実測図Fig.269、遺物写真Fig.275～276）

方形区画に伴う柵列SA03の内側に接して設けられた土坑である。Fig.266に示したように２つの土坑が連結したような構造をもつ。東側はやや浅く、40㎝大の大型の角礫がまばらに混じる。石上面の傾きはまちまちで、面をそろえてある訳ではない。東側はこれを切っているように観察され、やや深い。東側にあるような大型の石は含まれず、10～20㎝大の亜円礫がほぼ水平に敷かれる。礫と土層の状況からみて礎石根石である可能性も高いが、断定することはできない。

遺物は主に東側の浅い部分から出土している。Fig.269に示したように、やや特殊な性格をもつ須恵器が出土している。１は坏蓋の転用硯で、内面に墨痕が残る。３は大型の盤で中央が反り上がっている。４は器種不明である。大型で浅い器形に復元される。肩部に強い稜がつき、口縁部は外反しながら外に開く。端部にはしっかりした面がつくられている。盤の可能性もあるが、その場合底面にあたる部分が曲面をもっており安定しない。高台の痕跡も無い。したがって大型の蓋と考えて図示した。５は円形の平面形をもつ硯である。手捏ね成形された脚が１箇所に残り、これと対応する別の脚の剥離痕が１箇所確認できる。口縁の傾きが均一でなく若干開くように観察されるため、完全な平面円形ではなく風字硯状になる可能性もある。残った脚の底面はわずかに傾きがあるようであり、これが全体の傾きを反映したものと推定して図示した。内面には黒色の墨痕が濃く残り、つるつるに摩耗している。底面には黒色の墨痕は無く、赤色顔料の付着が認められた。いわゆる「朱墨」といわれるものである。底面は粗い不定方向のナデで調整され、やや表面調整が粗いせいか焼成時のひび割れを生じている。このひび割れにも顔料は入り込んでいる。顔料は特定の文字を記したものではなく、また顔料を擂ったような器壁表面の摩耗も認められない。顔料を水溶する顔料皿のような用途が考えられる。顔料の成分は蛍光Ｘ線成分分析によって酸化鉄に由来するベンガラであることが判明している。なおこの成分分析の結果と、当遺跡出土の硯については次章でまとめている。

**８．SK478**（遺物実測図Fig.268、遺物写真Fig.273）

SB11の北側に位置する土坑である。埋土中から円面硯の脚部破片が出土している。部分的な破片のため全形は不明であるが、十字形と半円形の透かしを交互に配したものとみられる。

**９．SK483**（遺構図Fig.266、遺構写真Fig.267）

Ｇ２区の南壁沿いに位置する。遺構の半分は調査区外にかかっているため全体は不明である。長径130㎝、深さ50㎝の円形土坑である。埋土中には５～10㎝大の円礫が含まれている。礫の垂直分布にはまとまりがなくまんべんなく含まれている。遺物は無い。

**10．SK501**（遺物実測図Fig.268、遺物Fig.274）

溝と柵列による方形区画の内側に位置する。SB13と重複し、SK501がこれを切っている。宝珠状つまみをもつとみられる須恵器坏蓋１点が出土している。

## Tab. 40　G区土坑出土遺物　観察表（実測図Fig.268～269、写真Fig.270～276）

| 遺構名 | 番号 | 種別 | 器種 | 法量（cm） | | | 色調 | 調整（内面／外面／特記事項） | 残存度 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 口径 | 器高 | 底径 | | | |
| SK449 | | 須恵器 | 坏蓋（転用硯） | － | － | － | 内外面：暗灰色<br>端部：赤灰色 | 内外面：回転ナデ、外面肩部に回転ナデによる段／内面摩耗し全体に墨痕付着 | 全体の60% |
| SK453 | | 須恵器 | 坏身 | 12.8 | － | － | 内外面：灰色<br>斑状に暗青灰色 | 内外面：回転ナデ、口縁部回転ナデによる成形でわずかに外反する | 口縁周辺のみ、全周の40% |
| SK458 | 1 | 弥生土器 | 甕 | － | － | － | 内外面：にぶい黄橙色 | 内面：ヨコハケ、口縁部丁寧なナデ／外面：タテハケ。頸部ヨコナデ、体部指押さえ／外面全体に煤付着 | 全周の５% |
| | 2 | 弥生土器 | 甕 | (21.0) | － | － | 内外面：浅黄橙色 | 内面：頸部以下不定方向のナデ、下部ナナメハケ、口縁部ヨコナデ／外面：ヨコナデ、口縁部３条の凹線、肩部斜め方向の刻み目後3条の凹線 | 口縁部のみ、全周の10% |
| | 3 | 須恵器 | 円面硯 | 21.6 | － | － | 内外面：明灰色 | 回転ナデ、外面に細い沈線２条分 | 上端のみ、全周の20% |
| | 4 | 瓦 | 平瓦 | － | － | － | 内外面：明橙色 | 内面：布目痕、模骨痕を残す／外面：網目タタキ痕 | 端部を含む小片 |
| SK460 | 1 | 土師器 | 坏 | 15.4 | 4.2 | 10.8 | 胎土：淡黄褐色<br>内外面：赤色塗彩 | 内外面：回転ナデ、底部不定方向のナデ | 全体の20% |
| | 2 | 土師器 | 坏 | － | － | － | 内外面：にぶい橙色 | 内外面：回転ナデ／内面：放射状の暗文／底部：ヘラケズリ | 全体の15% |
| | 3 | 土師器 | 坏 | － | － | － | 胎土：浅黄橙色<br>内外面：赤色塗彩 | 内外面：回転ナデ／底面：回転糸切り痕を残す | 全体の10% |
| | 4 | 須恵器 | 甕 | － | － | － | 内面：暗青灰色<br>外面：青黒色 | 内面：回転ナデ／外面：沈線、波状文 | 口縁部の小片 |
| SK474 | 1 | 須恵器 | 坏蓋（転用硯） | 14.6 | － | － | 内外面：明灰色 | 内外面：回転ナデ／外面肩部に回転ヘラケズリ／内面全体に墨痕 | 全体の20% |
| | 2 | 須恵器 | 坏蓋 | － | － | － | 内面：暗青灰色<br>外面：暗灰色 | 内外面：回転ナデ | 口縁部のみ、全周の20% |
| | 3 | 須恵器 | 盤 | 20.2 | 1.5 | 18.1 | 内外面：灰色 | 内外面：回転ナデ／内面使用により摩耗 | 全体の30% |
| | 4 | 須恵器 | 蓋 | 22.3 | (3.1) | | 内外面：暗青灰色<br>襷状に明白色 | 内外面：回転ナデ | 全体の30% |
| | 5 | 須恵器 | 円面硯 | － | － | － | 内外面：暗灰色 | 内面、外面側面：回転ナデ／底面：不定方向のナデ、焼成時のひび割れ、手捏ね成形の脚1箇所残存／脚剥離痕1箇所／内面黒色墨痕付着、使用により摩耗、光沢／底面：朱墨（ベンガラ）付着 | 全体の40%程度 |
| SK478 | | 須恵器 | 円面硯 | － | － | (22.4) | 内外面：灰色 | 内外面：回転ナデ／外面：1条の沈線、十字形と半円形？の透かし | 脚部のみ、全周の25% |
| SK501 | | 須恵器 | 坏蓋 | 12.7 | － | － | 内外面：灰色 | 内外面：回転ナデ、宝珠状つまみ剥離痕 | 全体の20% |

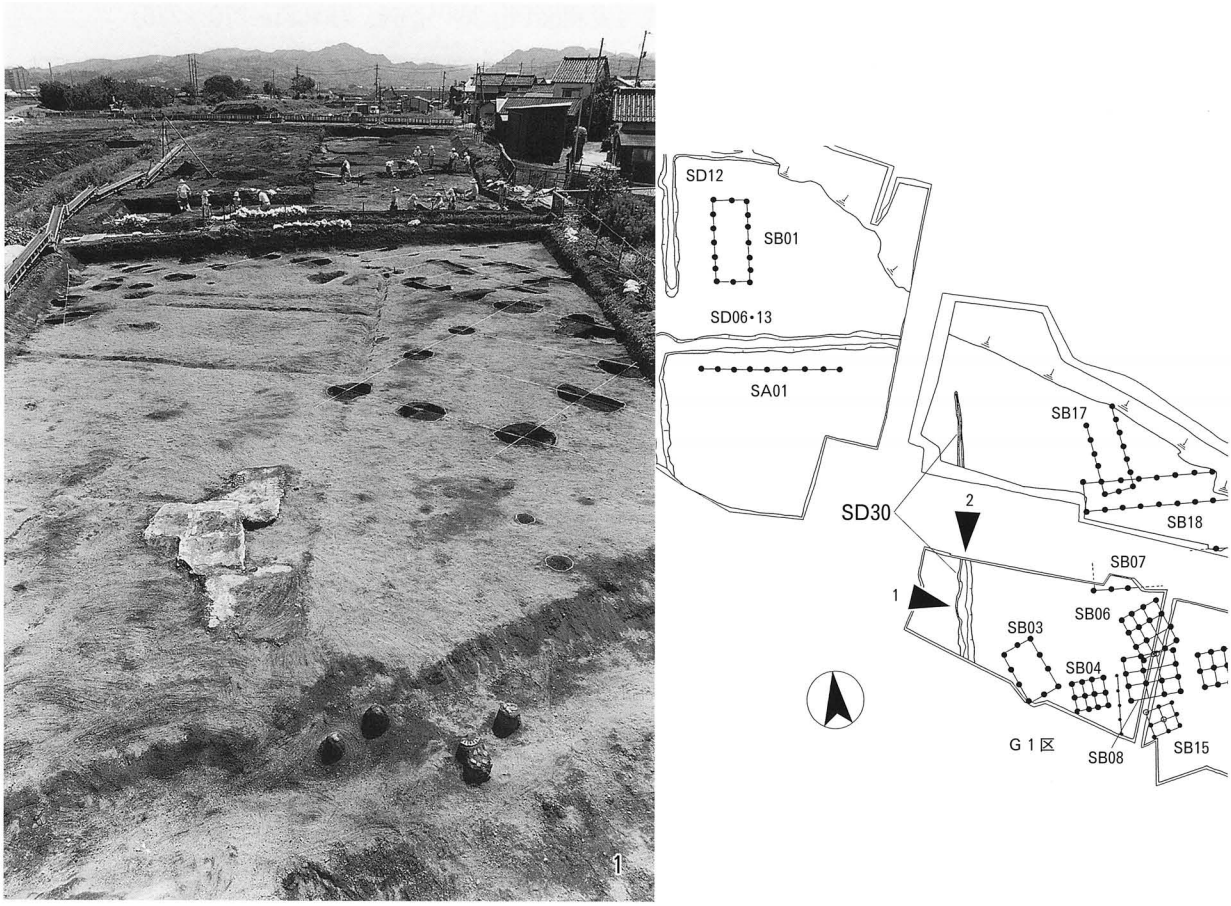


Fig.264　SD30 遺構写真（１：北西から、奥はSB03、２：北から、円面硯等の出土状況）

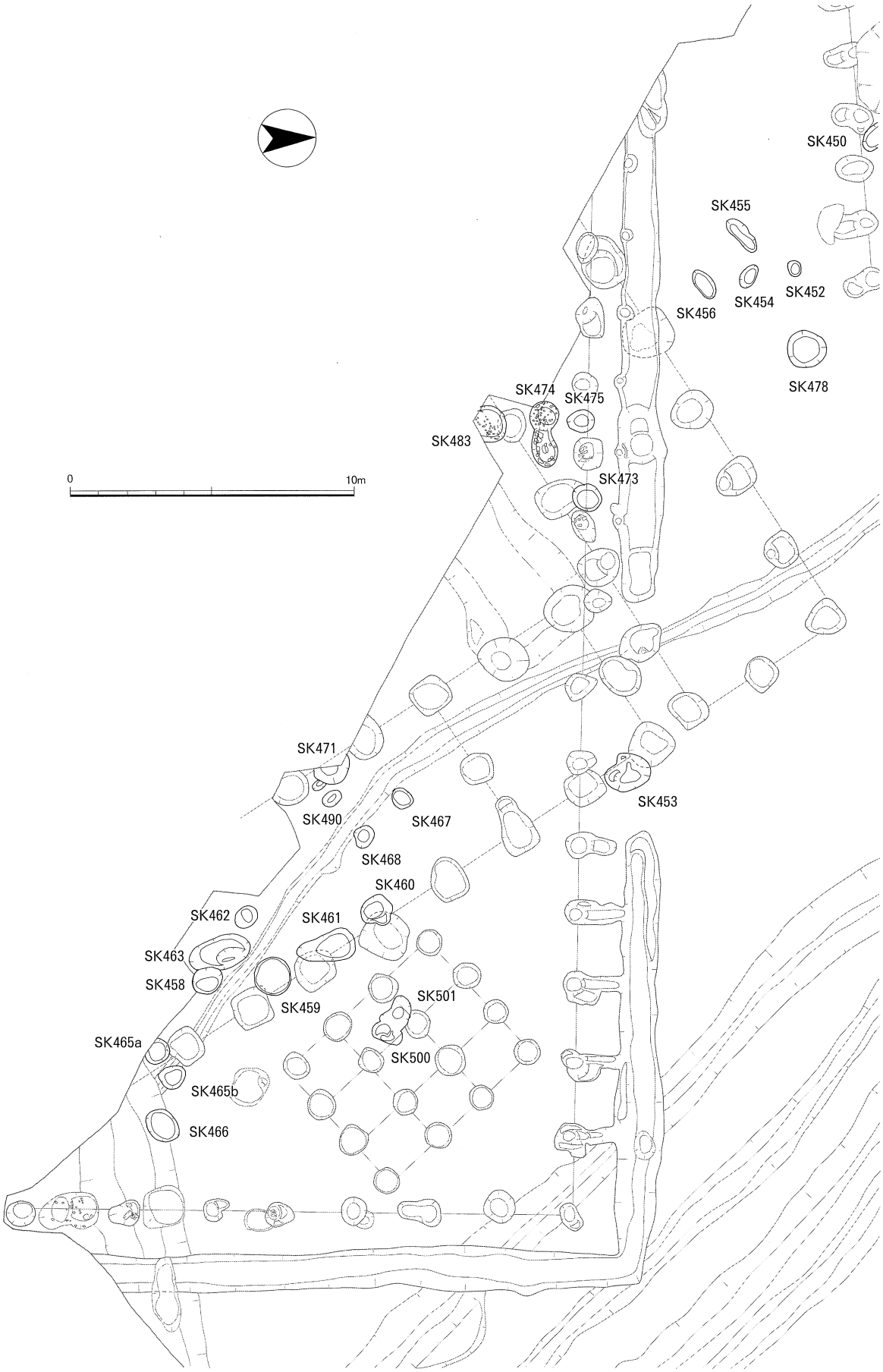



Fig.265　G区 建物に伴わない土坑位置図（S＝1/200）

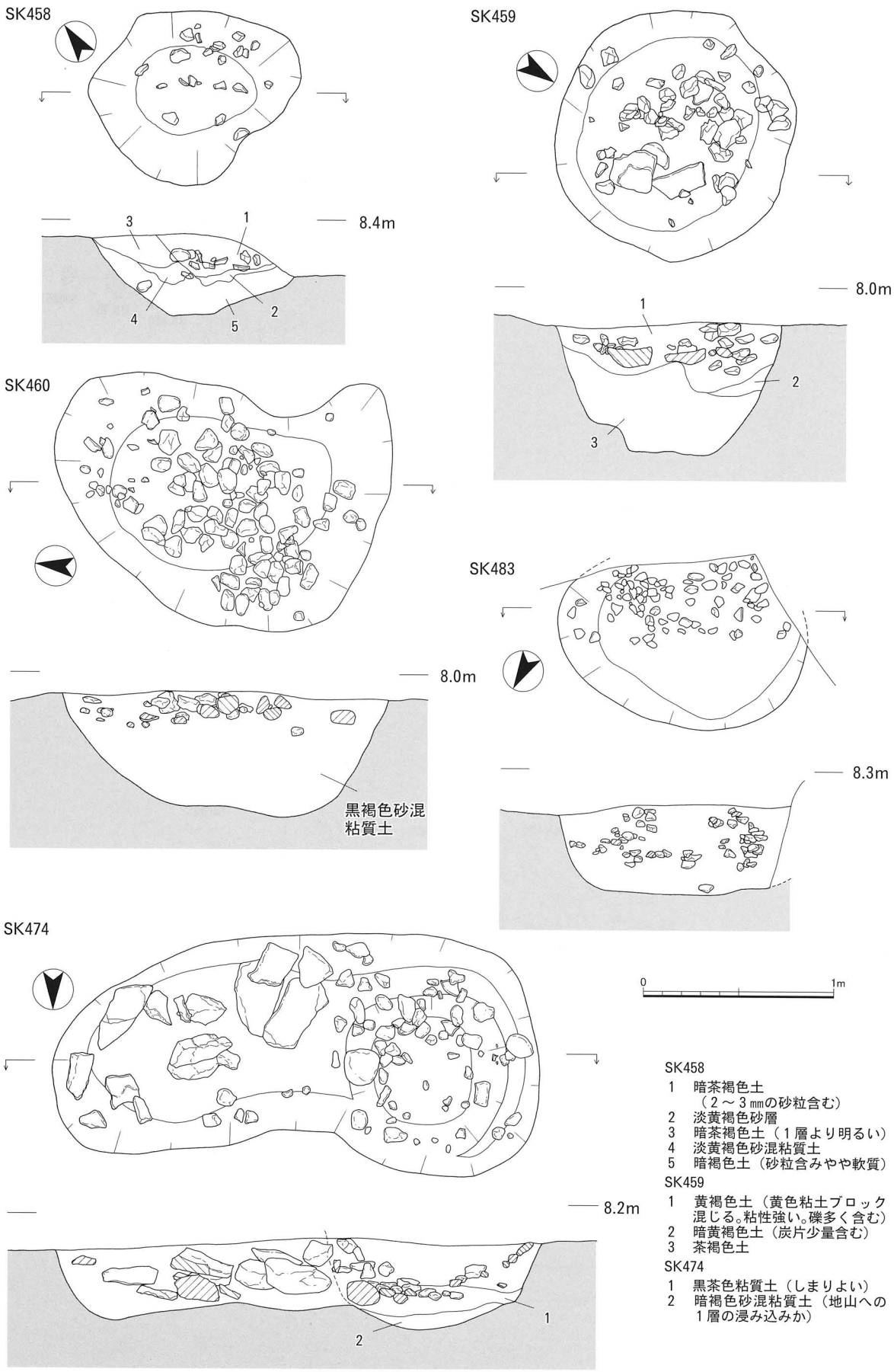
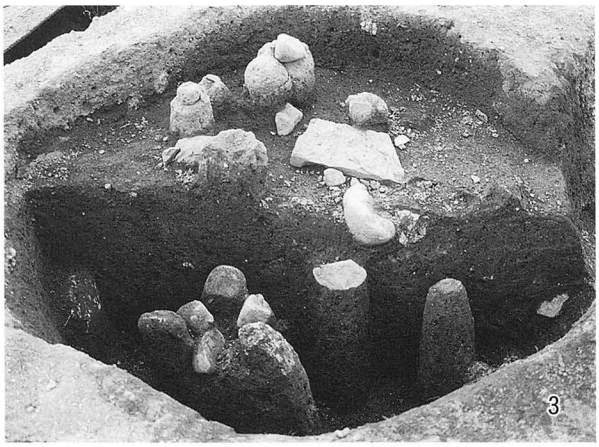
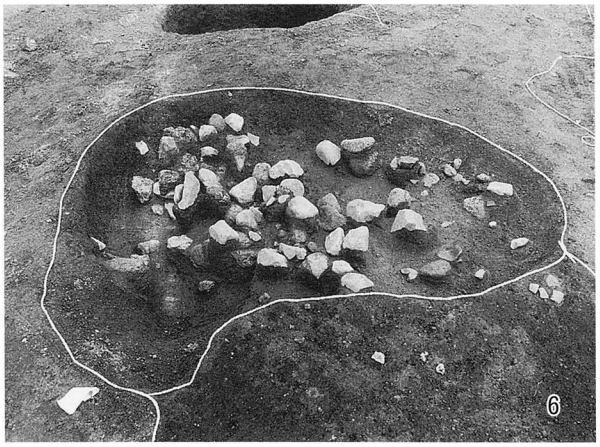
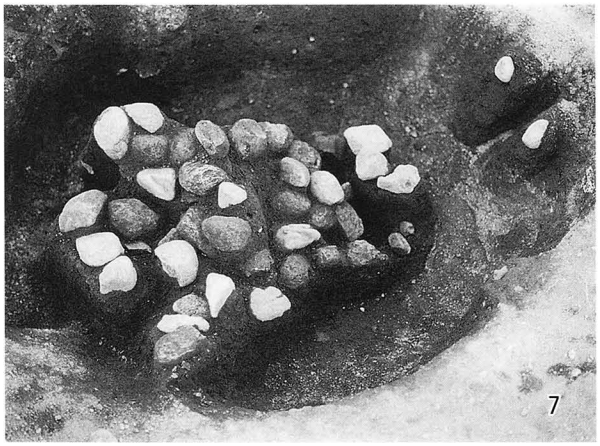



Fig.266　G区奈良時代土坑 遺構実測図（S＝1/30）






1 ：SK458（東から）
2 ：SK459（東から）
3 ～ 5 ：SK459（西から）
6 ：SK460（東から）
7 ：SK460（南から）

Fig.267　Ｇ区奈良時代土坑 遺構写真

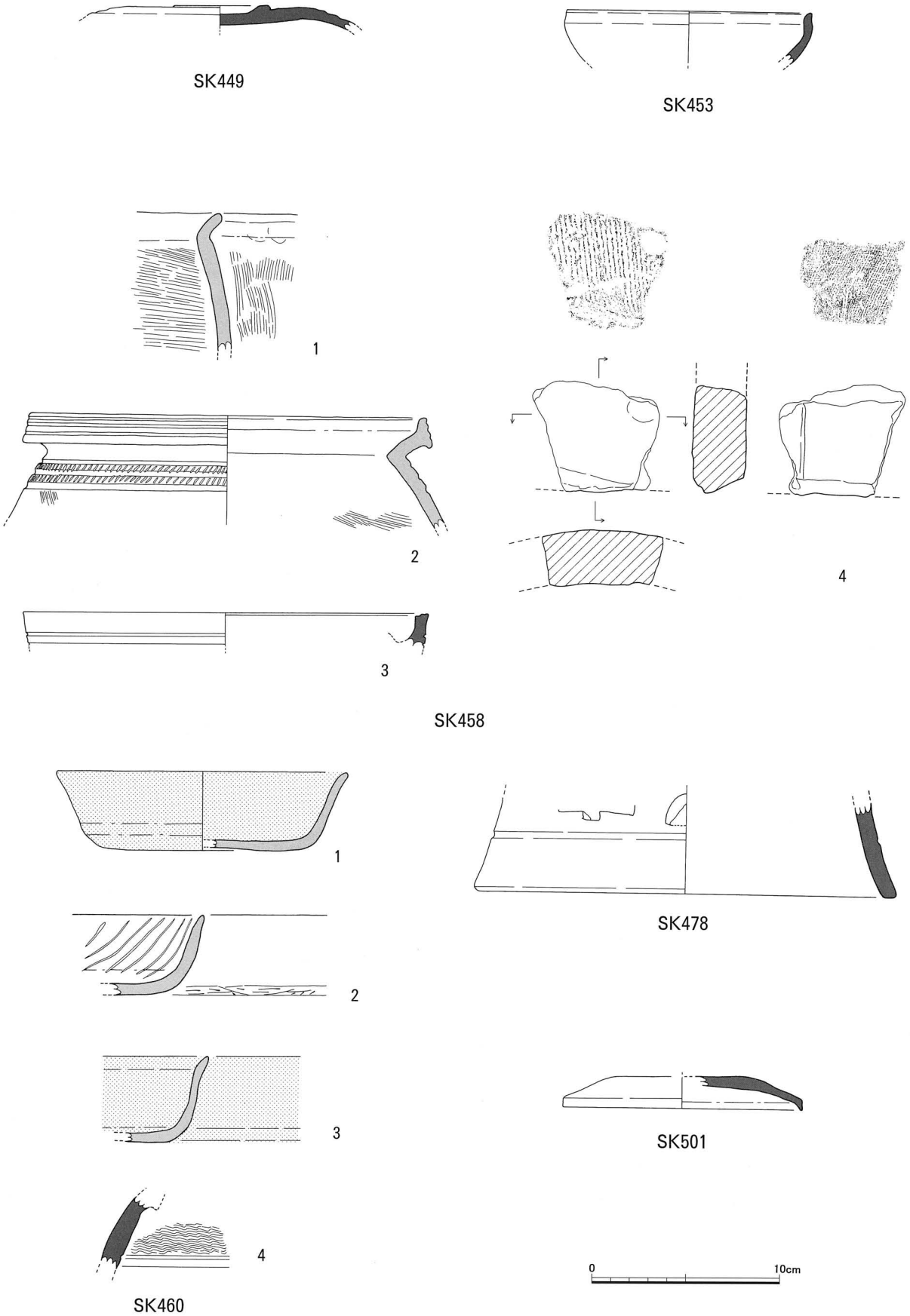



Fig.268　土坑遺物実測図①（SK449・453・458・460・478・501）（S＝1/3）

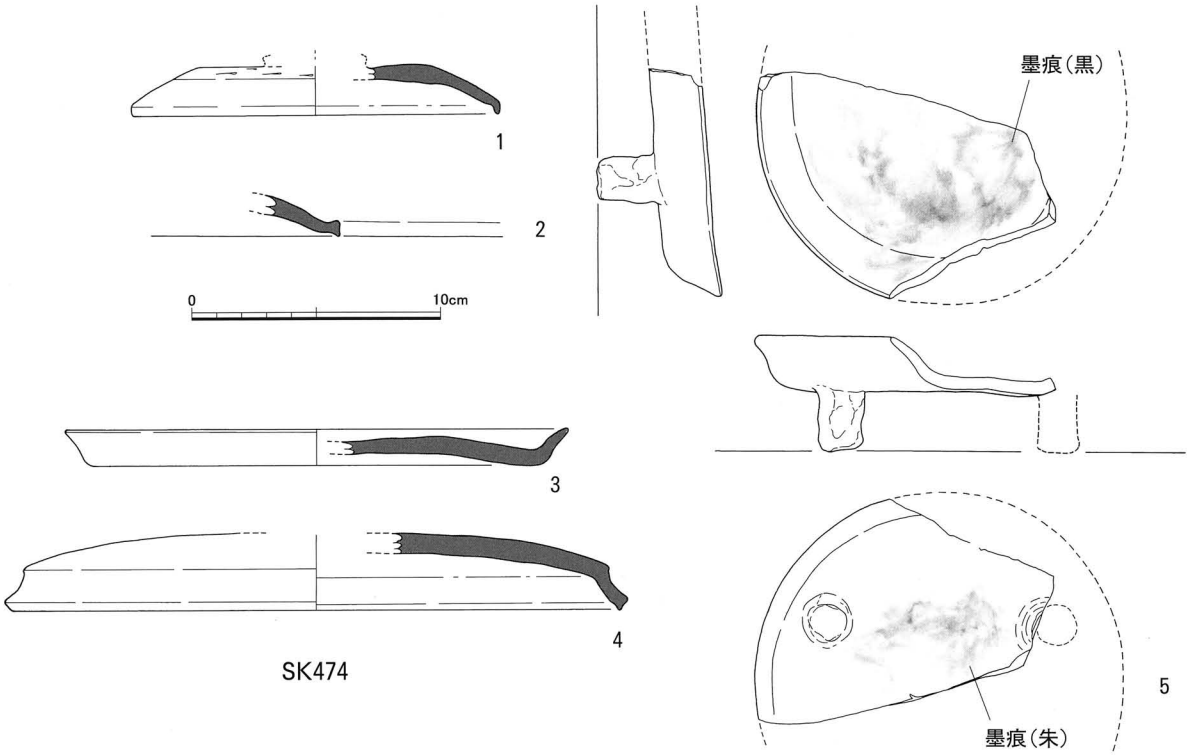
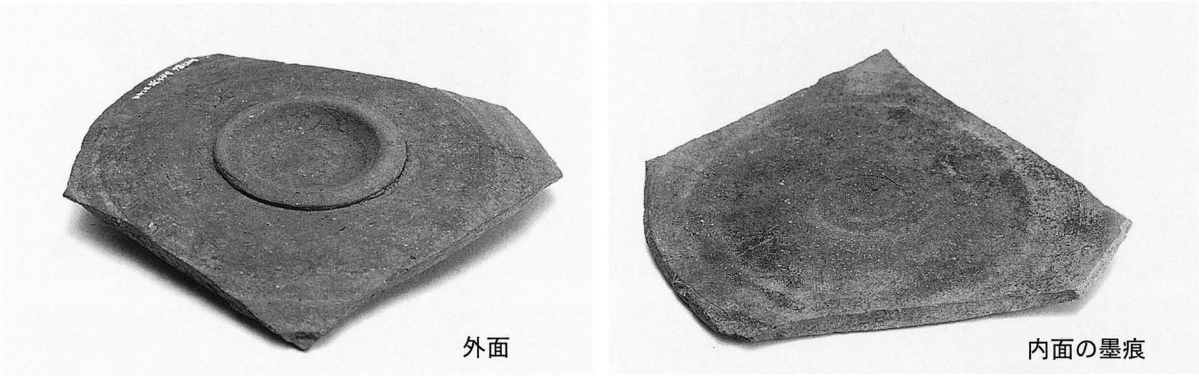


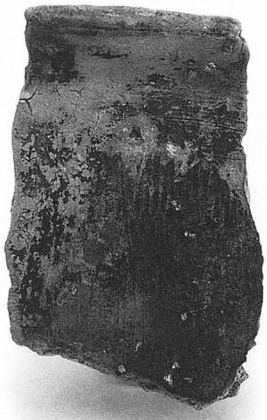

Fig.269　土坑遺物実測図②（SK474）（S＝1/3）



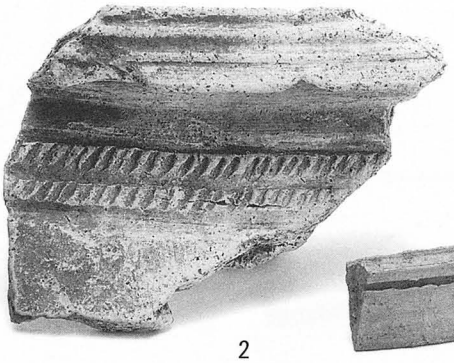

SK449

SK453

Fig.270　土坑遺物写真①（SK449・453）



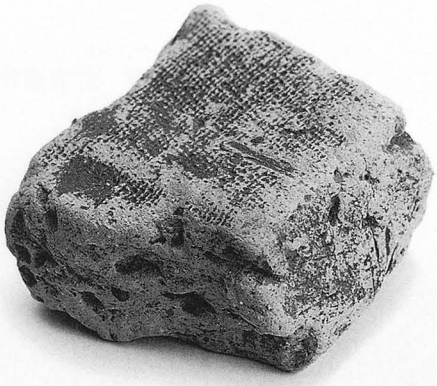
1



2

3

4－外面



4－内面

4－外面

4－内面

Fig.271　土坑遺物写真②（SK458）

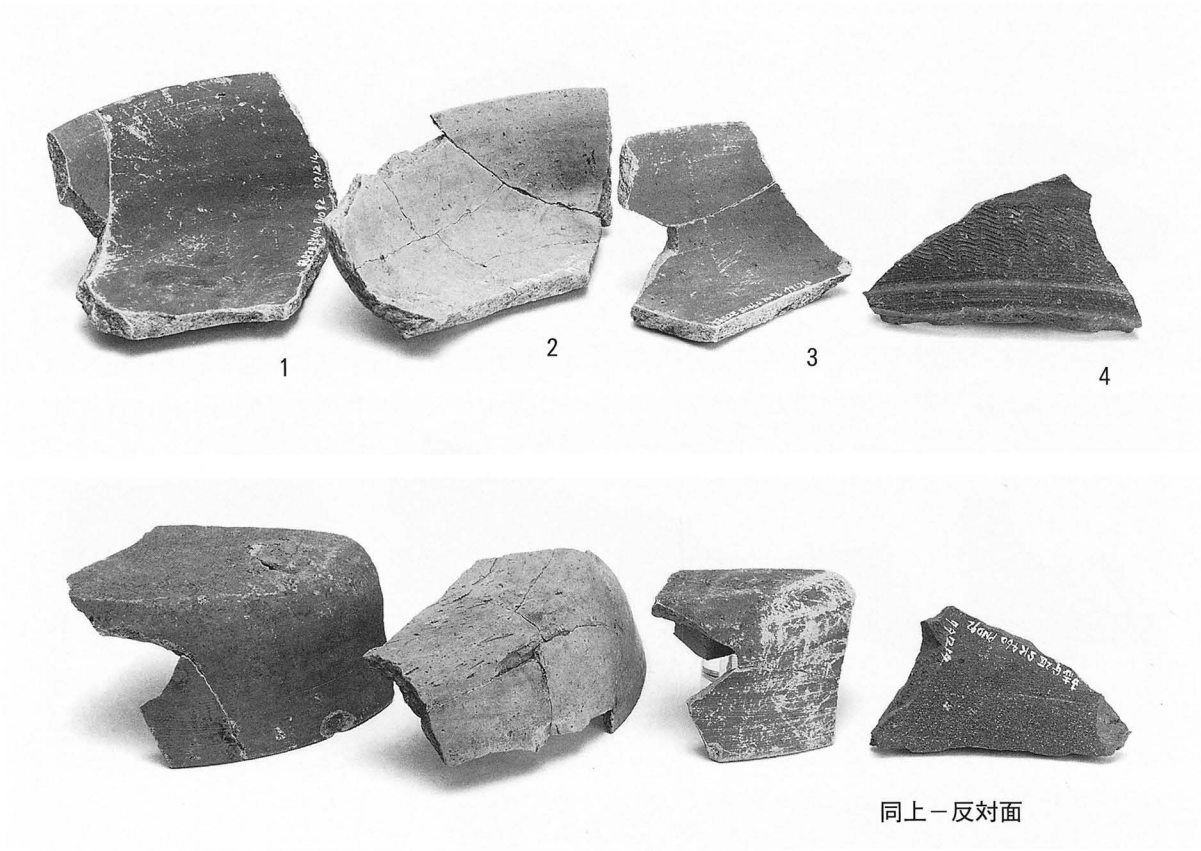



Fig.272　土坑遺物写真③（SK460）

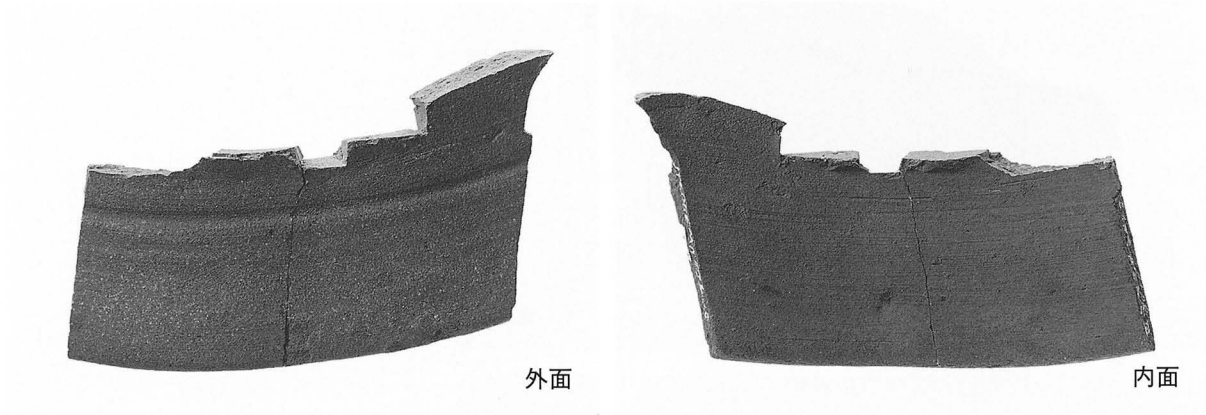
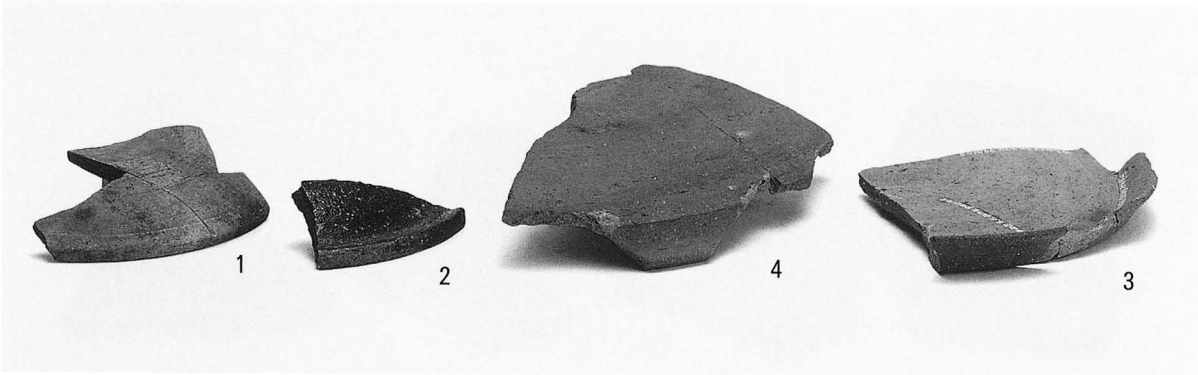



Fig.273　土坑遺物写真④（SK478）

Fig.274　土坑遺物写真⑤（SK501）



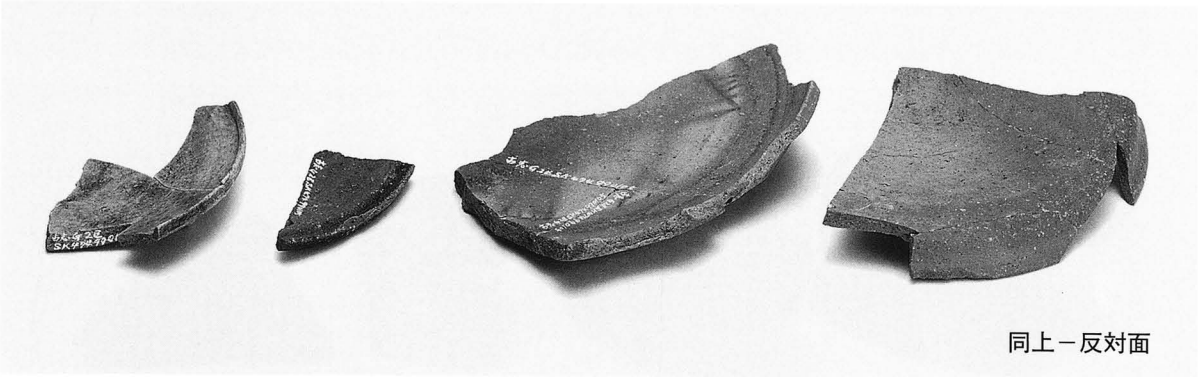



Fig.275　土坑遺物写真⑥（SK474）

5－内面の墨痕

（ほぼ実寸大）　5－外面の赤色顔料痕

Fig.276　土坑遺物写真⑦（SK474）

# 第8章

# 鍛冶関連遺物の調査

# 第8章

# 複合関数の微積

# 第８章　鍛冶関連遺物の調査

## 第１節　出土状況と内容

### １．鍛冶関連遺物の出土状況

鍛冶に伴う遺物はＦ区東側に位置する掘立柱建物（SB01）の周辺から集中して出土した。出土遺構の分布はFig. 277に示した。遺物の総数254点、総重量は6526.4ｇで、出土遺構と遺物内容はTab. 42（p. 299）に示している。SB01の周辺にある土坑（SK197、SK304など）からの出土が最も多く、次いでSB01の柱穴や、これを囲む区画溝の埋土からも出土している。

近世以降の耕作等によって古い遺構面は大きく削られており、炉跡や焼土面のような作業面に伴う遺構は全く残されていなかった。従ってこれらの遺物がどこから供給されたものかは厳密には不明である。掘立柱建物SB01が鍛冶工房である可能性も考えられるが、SB01の柱穴（Ｐ15）に切られる土坑（SK491）からも鍛冶滓が出土しており断定はできない。少なくともSB01が建つ以前から周辺で鍛冶が行われていたことは明らかである。

鍛冶作業と直接関わるものでは無いが、鍛冶滓を多く包含している土坑SK304は、遺物量の多さから見て操業と同時に存在していた可能性が考えられる。ただし用途は井戸等と想定され、廃絶・埋め立て時に周辺に多く存在した鍛冶滓が混入したものであろう。

### ２．鍛冶関連遺物の時期

操業時に存在していた可能性があるSK304からは６世紀後葉（出雲３期、TK43型式併行期）の須恵器が少量出土しており、鍛冶が行われた時期はこれをさかのぼらない。一方SB01とこれを区画するSD12がともに８世紀中頃には廃絶・埋没することから、これが年代の下限を示すものと判断される。したがって当遺跡における鍛冶の年代は、出土状況から判断すれば６世紀後葉～８世紀中頃ということになる。

## 第２節　調査の方法

### １．調査の手順

まず初めに、出土した全資料について考古学的な分類をおこなった。分類基準は出土遺構別・強力磁石（TAJIMA　PUM-P）による磁着性・小型特殊金属探知器によるメタル度・肉眼観察による形態などである。分類後に個体数と重量の集計をおこないTab. 42にまとめた。次に、その中から工程や各遺構の機能や環境を端的に示す代表的な資料47点を選別した。これらを遺構・種別ごとにまとめたものがFig. 281の構成図である。またこれらの法量、磁着度、メタル（残存）度を計測し、外観観察による所見を加えた一般観察表をTab. 43～45に示した。上記の資料47点については実測図作成と写真撮影を行いFig. 282～295に掲載している。

さらに、この中から金属学的分析が必要なもの11点を分析資料として選別し、分析前に詳細な外観観察を行った（Fig. 296～306）。これらは川鉄テクノリサーチ株式会社に委託して自然科学的分析調査を行い、その結果を第９章に掲載している。

上記の調査方法や金属学的分析の方法・項目について、穴澤義功氏（たたら研究会委員）に全面的な指導を受けた。さらに資料分類や外観観察、観察表作成などについては調査指導の際に直接作業の労をとっていただいた。

### ２．遺物観察表の見方

遺物観察表は新潟県北沢遺跡[1]・島根県板屋Ⅲ遺跡[2]における製鉄関連遺物の検討で

（１）新潟県豊浦町教育委員会 1992 『北沢遺跡群』

（２）島根県教育委員会 1998 『板屋Ⅲ遺跡』志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書５

採用された様式を基本とし、分析項目欄などを加えたものである。主な項目の示す内容は以下のとおりである。

(1)　遺物種類・遺物名

金属学的分析を行う前に、考古学的な観察によって判定した遺物の種類である。

(2)　計測値・法量

各遺物の長さ・幅・厚さ・重量を計測したものである[1]。

(3)　磁　着　度

製鉄関連遺物分類用の「標準磁石」[2]を用いて、６㎜を１単位として資料との反応の程度を数字で表現したものである[3]。数値が大きいほど磁性が強い。

(4)　遺　存　度

資料が完形か破片かを記す。

(5)　破　面　数

資料が破片の場合、破面がいくつあるかを記す。

(6)　メ タ ル 度

埋蔵文化財専用に整準された小型特殊金属探知器によって判定された金属鉄の残留の程度を示すもので、基準感度は次のとおりである。

な　　し：磁着反応が無く、金属鉄が全く含まれないことを示す。

錆化(△)：磁着反応があるが、感度Ｈでも反応しない酸化物で、金属鉄が残留しないことを示す。

Ｈ（○）：Ｈは最高感度でごく小さな金属鉄が残留することを示す。

Ｍ（◎）：Ｍは標準感度でＨの倍以上の金属鉄が残留することを示す。

Ｌ（●）：Ｌは低感度でＭの倍以上の金属鉄が残留することを示す。

(7)　分　　析

どのような分析をどのような部分について行うかを○印で示す。

(8)　所　　見

外形や破面・断面の状況、木炭痕や気孔の有無、および付着物やその他の状況について記す。

(9)　分 析 部 分

資料のどのような部分をどのような目的で、調査・分析するのか記す。また、観察表下の実測図の網掛け部分は、分析に供した資料の採取位置を示す。

(10)　備　　考

資料がどのような場所で、どのように生成されたと予想されるかなどについて記している。

## 第３節　成果のまとめ

### １．遺構ごとの評価

以下では、第９章に記した化学成分分析などの結果をふまえて、使用された原料や行われた工程についての総合的な評価を述べる。なお、遺構相互の関係は不明であるため、遺構ごとに個別に判定を行う。

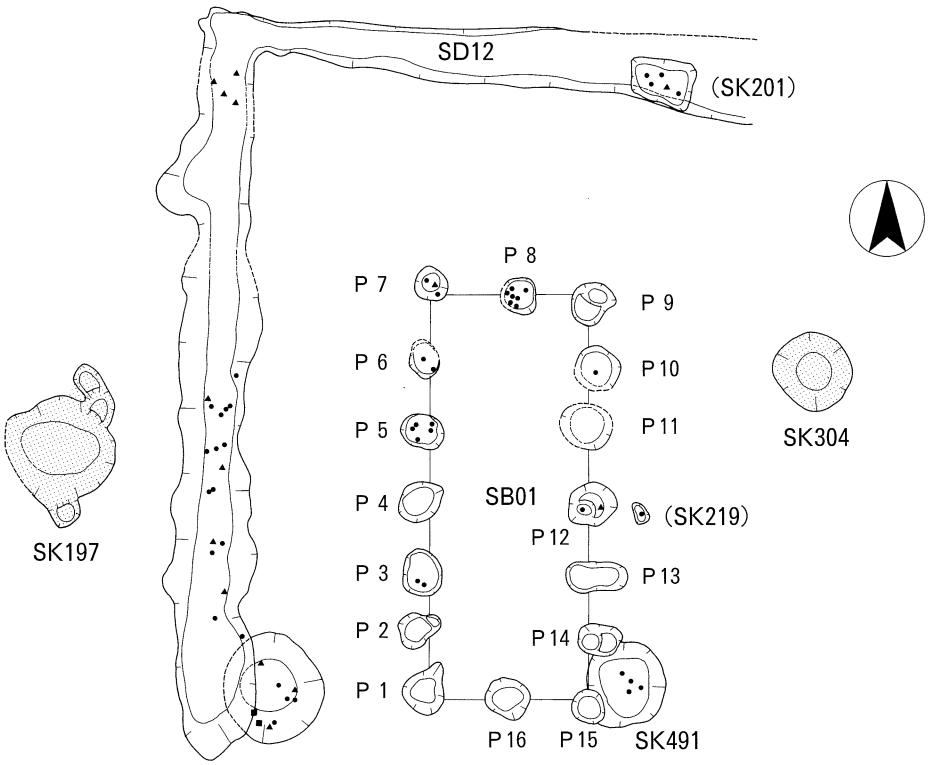
**１－１．SK197**　砂鉄系素材を用いた精錬鍛冶を行っている。分析資料№①の原料はTi量８％前後の中チタン量の砂鉄であろう。工程的には精錬鍛冶の前半と後半にまたがる。分析資料⑨羽口の耐火度は普通である。分析資料⑦の棒状鉄製品は鍛冶工房で生産された鉄製品の一端を示すもので、特に硬度を必要としない製品である。鍛打加工がやや甘く、浸炭後、空冷された鍛造品。

---

（１）計測方法については島根県教育委員会2002『殿淵山遺跡・獅子谷遺跡（１）－遺構・遺物編－』の凡例５を参照されたい。

（２）標準磁石として東北金属㈱のリング状フェライト磁石を使用した。寸法は外径30㎜、内径17㎜、厚さ５㎜である。

（３）参考文献：小林信一 1991「製鉄遺跡の発掘調査と整理について」『研究連絡誌』第32号 ㈶千葉県文化財センター　※方眼台紙に６㎜間隔の同心円を描き、その中心点直上に標準磁石を糸で垂らす。同心円外側から滓などの資料を接近させ、磁石が急激に動き始める距離を台紙上の目盛りで読み取る方法をとる。



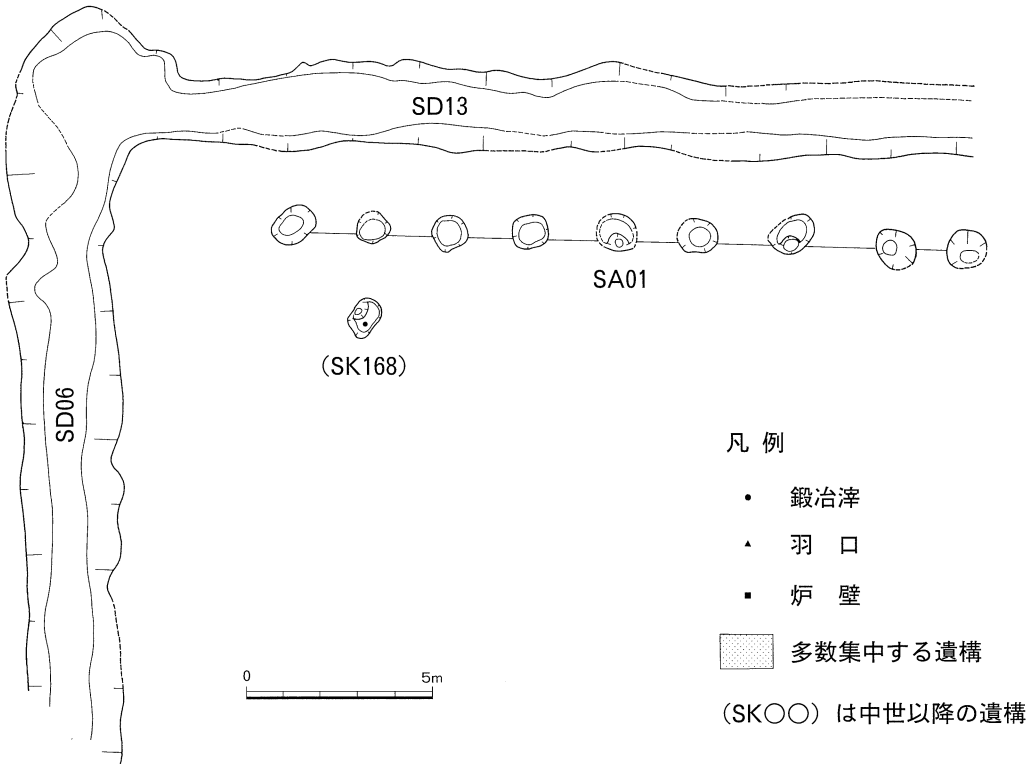




Fig.277　鍛冶関連遺物 出土遺構位置図（S＝1/200）

１－２．SK304　砂鉄系素材を用いた精錬鍛冶の最終工程または鍛錬鍛冶の初めの工程を行っており、含鉄の鍛冶滓が数多く派生している。分析資料⑩羽口の耐火度は通常レベル。分析資料№⑧の板状鉄製品は周辺部に鍛冶滓組織が付着しているので、鍛冶遺構に伴うものである。

１－３．SD12　鍛冶炉の炉壁は耐火度の低いもので、カルシウム量がやや高い。珪化木などの混入によるものか。

Tab. 41　古志本郷遺跡 鍛冶関連遺物 分析データ解析表

| | 工程 | 製錬 | 精錬（鍛冶） | 鍛錬（鍛冶） | 羽口 | 鉄器 | 炉壁 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | SK197 | | ←①→ 3.89 | ←②→ 0.27 | ⑨耐火度 1320° | ⑦棒状鉄製品 | |
| | SK304 | | | ←③→ 1.51 ⑤－④－⑥ | ⑩耐火度 1400° | ⑧板状鉄製品 | |
| | SD12 | | | | | | ⑪耐火度 1080° |

※○囲み数字は分析資料№
※数値は資料中の$TiO_2$量（%）

## ２．ま と め

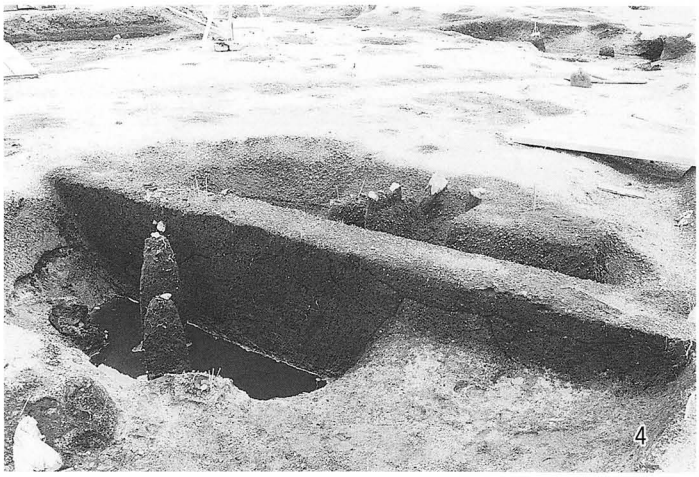
これまでの成果を総合して、古志本郷遺跡における鍛冶行為については以下のとおり総括される。

- 炉跡など直接的な遺構は残されていない。
- 溝に区画された掘立柱建物SB01は鍛冶工房であった可能性がある。
- 遺物の全体量が少ないことから、周辺に廃棄あるいは集積されていた鍛冶関連遺物の一部が各遺構に二次的に混入したものとみられる。
- 当遺跡で行われた鍛冶の工程は、精錬（鍛冶）～鍛錬（鍛冶）で、製品の加工まで行われていた。
- 鍛冶の行われた時期は、土器の年代からすると６世紀後葉～８世紀中頃の間のある一定期間である。さらに当遺跡内の建物群の存続期間から推定すると、そのうちの７世紀後葉～８世紀中頃にあたる蓋然性が高い。
- 使用された素材は鉱石原料ではなく、砂鉄原料である。
- 砂鉄原料に含まれていたと考えられるチタンの含有量が中程度であり、周辺遺跡出土の類例から判断すると地元で産出される砂鉄を原料としている可能性が高い。
- ４方（または２方）に羽口を収める溝を備えた炉壁が出土している。このタイプは７世紀後半から９世紀にかけての、国衙に付随する官営工房で出土することが多く、いずれも炉を複数基並べた連房式の鍛冶工房に伴って検出される規格性の高いものである[(1)]。当遺跡についてもこうした例との技術的共通性がうかがえ、いわゆる野鍛冶ではない公的な官営工房での鍛冶が行われていた可能性を示す。
- 当遺跡Ｇ区を中心に確認された出雲国神門郡の郡家関連とみられる建物群の広がりからみると、鍛冶が行われていたSB01周辺は建物群の西端に位置し、これより西に建物跡は存在しない。鍛冶が郡衙に付随するものと評価するならば、工房を郡衙域の縁辺に計画的に配置したものと考えられる。

（１）鹿之子Ｃ遺跡（茨城県石岡市、８世紀後半～９世紀）、春内遺跡（茨城県鹿島市、７世紀後半）、鳥羽遺跡（群馬県）などの類例がある。

１・２：北から

３：北東から



４：南端土坑、北西から

Fig.278　鍛冶関連遺物 出土状況写真（SD12）

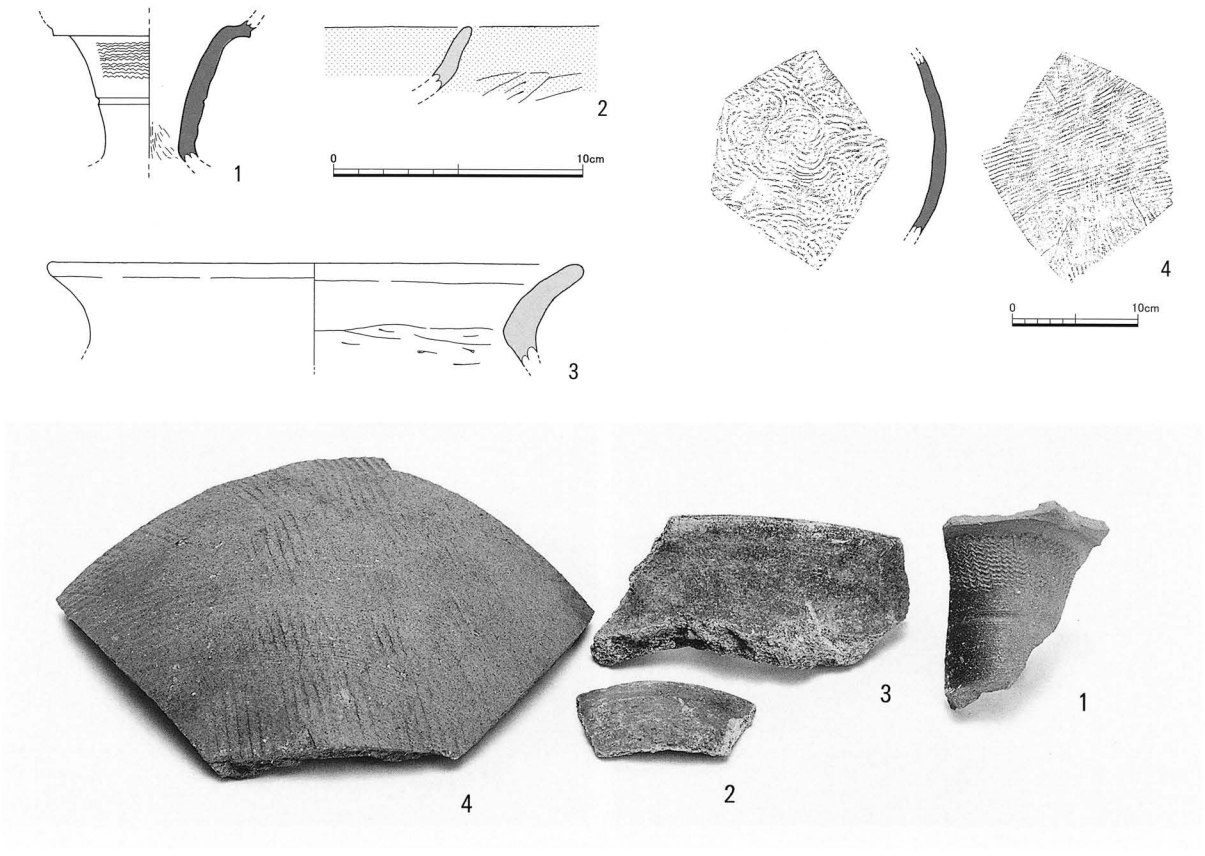



Fig.279　SK197 遺物実測図・写真

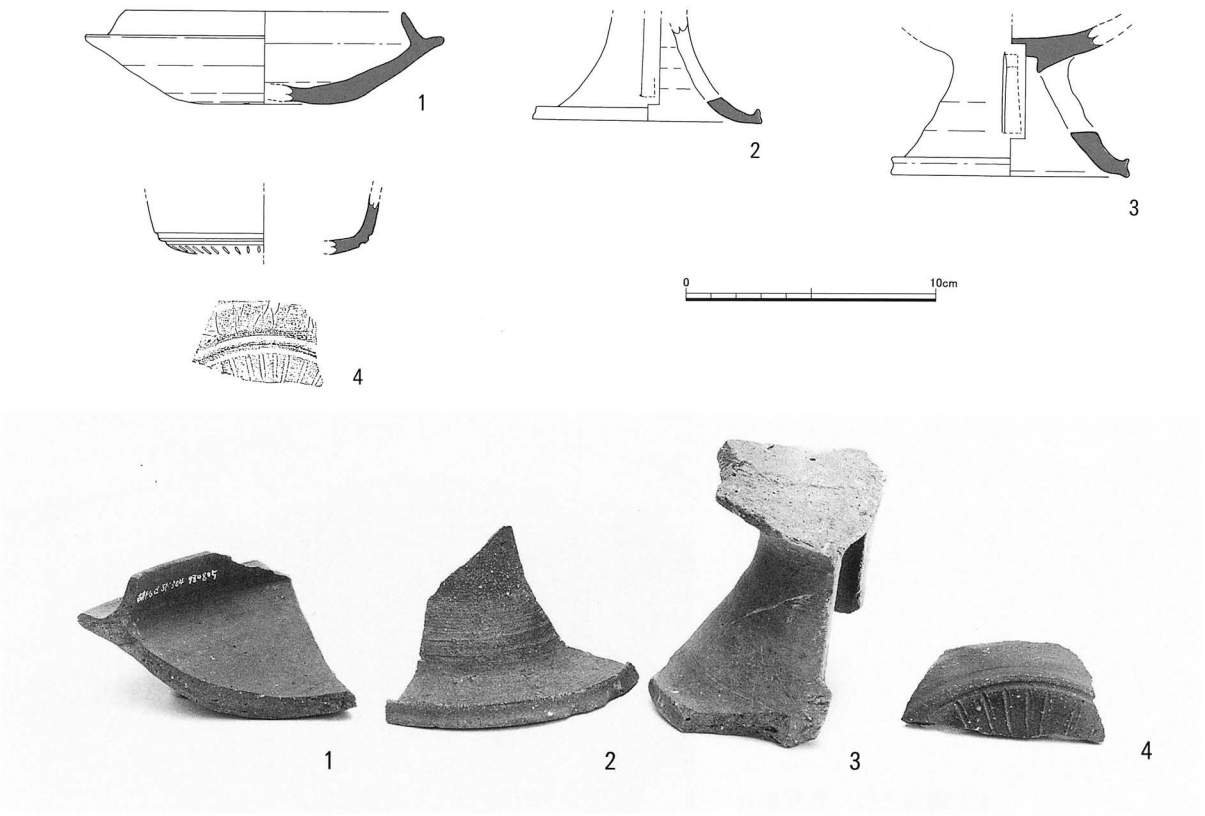
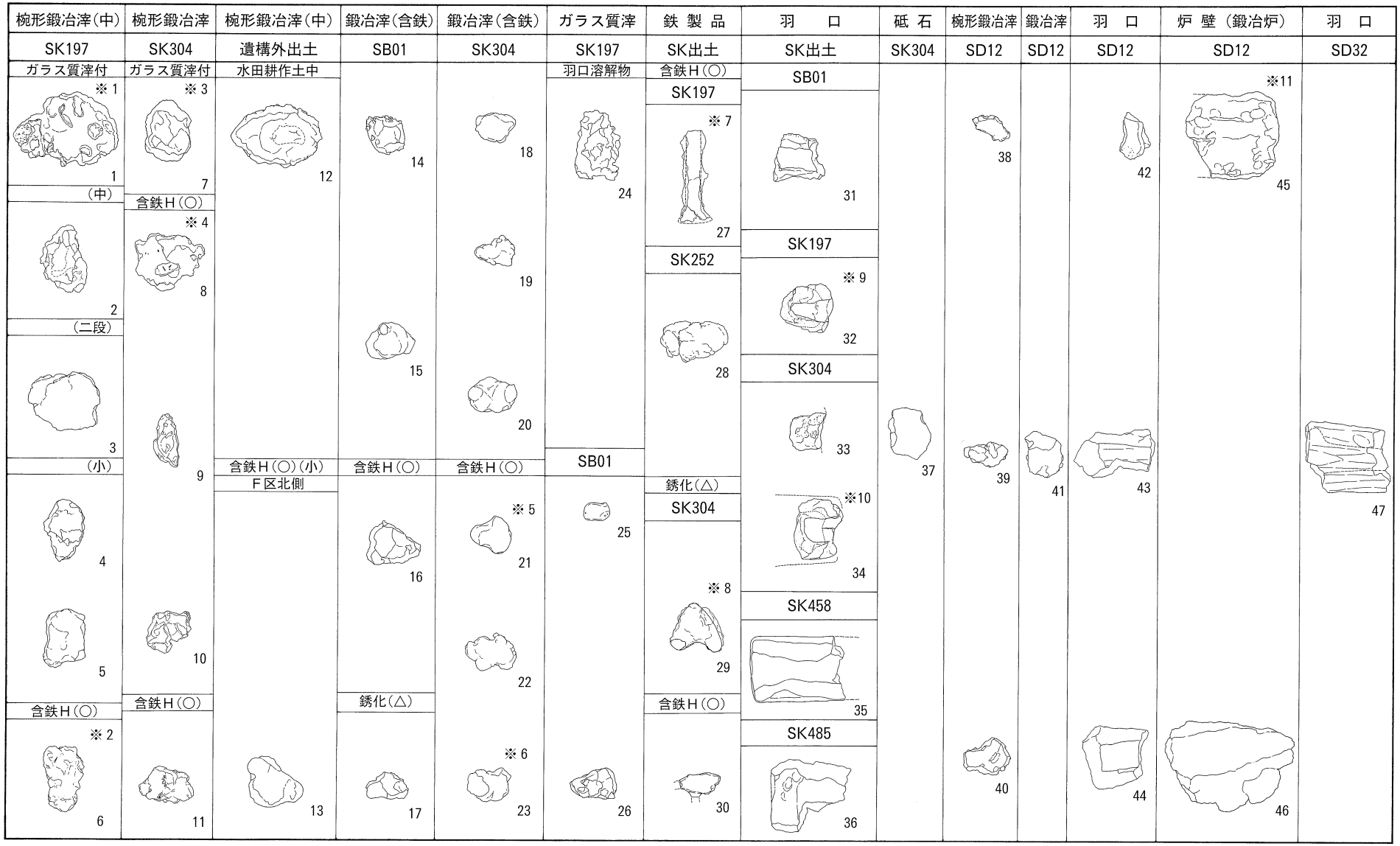



Fig.280　SK304 遺物実測図・写真

## Tab. 42　鍛冶関連遺物出土遺構・遺物内容一覧表

| 遺構の性格 | 遺構名 | 遺物種別／メタル残存度 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 椀形鍛冶滓(含鉄)／H(○)・銹化(△) | | 椀形鍛冶滓／銹化(△) | | 椀形鍛冶滓／なし | | 鍛冶滓(含鉄)／H(○)・銹化(△) | | 鍛冶滓／銹化(△) | | 鍛冶滓／なし | | 羽口 | | 炉壁 | | 製品 | |
| | | 個数 | 重量(g) | 個数 | 重量(g) | 個数 | 重量(g) | 個数 | 重量(g) | 個数 | 重量(g) | 個数 | 重量(g) | 個数 | 重量(g) | 個数 | 重量(g) | 個数 | 重量(g) |
| 6世紀後葉～8世紀中頃の土坑 | SK304 | 19 | 1968.3 | 1 | 88.2 | 6 | 520.3 | 3 | 46.9 | 26 | 269.8 | 51 | 503.0 | 65 | 959.4 | | | 2 | 28.2 |
| | SK197 | 9 | 684.6 | 4 | 921.5 | 1 | 623.7 | 7 | 70.7 | | | 9 | 90.1 | 3 | 124.2 | | | 1 | 9.5 |
| | SK491 | 1 | 18.5 | | | | | 3 | 70.3 | | | | | | | | | | |
| | SK458 | | | | | | | | | | | | | 6 | 320.9 | | | | |
| | SK485 | | | | | | | | | | | | | 1 | 115.9 | | | | |
| | 小計 | 29 | 2671.4 | 5 | 1009.7 | 7 | 1144.0 | 13 | 187.9 | 26 | 269.8 | 60 | 593.2 | 75 | 1520.4 | | | 3 | 37.7 |
| 掘立柱建物の柱穴 | SB01 P3 | 1 | 53.3 | | | | | | | | | 3 | 28.0 | | | | | | |
| | P5 | | | | | | | 3 | 29.5 | | | | | | | | | | |
| | P6 | | | | | | | | | | | 2 | 25.3 | | | | | | |
| | P7 | 1 | 36.9 | | | | | 1 | 18.0 | | | | | 1 | 10.0 | | | | |
| | P8 | 1 | 35.2 | | | | | | | | | 6 | 17.1 | | | | | | |
| | P10 | | | | | | | | | | | 1 | 9.2 | | | | | | |
| | P12 | | | | | | | 1 | 11.7 | | | | | | | | | | |
| | 小計 | 3 | 125.4 | | | | | 5 | 59.2 | | | 12 | 79.6 | 1 | 10.0 | | | | |
| 建物区画溝 | SD12 | 1 | 96.6 | | | 2 | 59.8 | 4 | 82.3 | 1 | 24.2 | 6 | 9.3 | 8 | 407.5 | 2 | 1605.8 | | |
| | SD32 | | | | | | | | | | | | | 1 | 345.4 | | | | |
| 中世以降の土坑・溝 | SK168 | | | | | 1 | 284.3 | | | | | | | | | | | | |
| | SK199 | | | | | | | | | | | | | 1 | 69.6 | | | | |
| | SK201 | | | | | | | 1 | 14.2 | | | 3 | 30.7 | 1 | 20.6 | | | | |
| | SK219 | | | | | | | | | 1 | 7.6 | | | | | | | | |
| | SD19 | 2 | 97.7 | | | | | | | | | 1 | 27.9 | | | | | | |
| | 小計 | 2 | 97.7 | | | 1 | 284.3 | 1 | 14.2 | 1 | 7.6 | 4 | 58.6 | 2 | 90.2 | | | | |
| 包含層 | 水田耕作土中 | | | 2 | 708.8 | | | | | | | | | | | | | | |
| | G1区第2層 | | | | | | | | | | | | | 1 | 128.1 | | | | |
| | F5区S第2層 | | | | | | | | | | | | | 6 | 199.4 | | | | |
| | F4区第2層 | | | | | | | | | | | | | 1 | 42.6 | | | | |
| | F5区 | | | | | | | | | | | | | 6 | 37.4 | | | | |
| | 小計 | | | 2 | 708.8 | | | | | | | | | 14 | 407.6 | | | | |
| 合計 | | 35 | 2991.1 | 7 | 1718.5 | 10 | 1488.1 | 23 | 343.5 | 28 | 301.6 | 82 | 740.7 | 101 | 2781.2 | 2 | 1605.8 | 3 | 37.7 |




※は分析をおこなった資料（数字は分析資料No.）

Fig.281　鍛冶関連遺物 構成図

## Tab. 43　鍛冶関連遺物　一般観察表①

| 構成No. | 遺物名 | 地区名 | 遺構名 | 計測値（cm） | | | 重量（g） | 磁着度 | メタル度 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 長さ | 幅 | 厚さ | | | | |
| 1 | 椀形鍛冶滓（中） | F区 | SK－197 | 15.0 | 10.6 | 6.3 | 623.7 | 6 | なし | 分析No.1 |
| 2 | 椀形鍛冶滓（中） | F区 | SK－168 | 7.0 | 9.5 | 5.7 | 284.3 | 6 | なし | 上面が大きく窪んだ椀形鍛冶滓。完形に近く、側部に小破面のみ残る。表皮の一部が紅色の酸化物に覆われる。 |
| 3 | 椀形鍛冶滓（中） | F区 | SK－197 | 10.3 | 8.1 | 5.1 | 501.6 | 9 | 銹化(△) | 二段椀形鍛冶滓。下半部の滓は左側にずれる。上面の滓は平板気味で右側と手前側部が破面。全体に酸化土砂が激しい。 |
| 4 | 椀形鍛冶滓（小） | F区 | SK－197 | 5.8 | 8.9 | 3.4 | 123.5 | 7 | 銹化(△) | 細長い椀形鍛冶滓。下面はきれいな舟底状。上面手前側は二段気味。上手側が磁着が強い。 |
| 5 | 椀形鍛冶滓（小） | F区 | SK－197 | 6.0 | 8.5 | 2.8 | 157.8 | 6 | 銹化(△) | 薄手の椀形鍛冶滓。左右二方が破面。下面は鍛冶炉の炉床土の剥離面。 |
| 6 | 椀形鍛冶滓（小） | F区 | SK－197 | 5.9 | 9.4 | 2.9 | 138.6 | 8 | H（○） | 分析No.2 |
| 7 | 椀形鍛冶滓（中） | F区 | SK－304 | 6.7 | 8.8 | 4.8 | 214.2 | 4 | なし | 分析No.3 |
| 8 | 椀形鍛冶滓（中） | F区 | SK－304 | 10.0 | 8.3 | 3.8 | 219.9 | 7 | H（○） | 分析No.4 |
| 9 | 椀形鍛冶滓（小） | F区 | SK－304 | 6.9 | 4.0 | 2.0 | 62.7 | 8 | 銹化(△) | 扁平な椀形鍛冶滓の側部破片。5に似る。 |
| 10 | 椀形鍛冶滓（小） | F区 | SK－304 | 6.1 | 6.3 | 3.2 | 99.0 | 4 | なし | 下面に鍛冶炉の炉床土が面的に固着した椀形鍛冶滓。上面から側部は木炭痕により変形。右側部は二段気味で羽口片をかみ込む。炉床土はきめ細かい粘土質。 |
| 11 | 椀形鍛冶滓（小） | F区 | SK－304 | 7.9 | 5.3 | 2.6 | 94.1 | 7 | H（○） | 扁平な椀形鍛冶滓。長軸方向に波状にうねり、右半部は二段気味。肩部に紅色の磁着箇所あり。 |
| 12 | 椀形鍛冶滓（中） | F区 | 水田耕作土中 | 13.2 | 9.0 | 4.1 | 439.0 | 7 | 銹化(△) | 不整楕円形の椀形鍛冶滓。長軸端部が突出気味で、上面中央が大きく窪む。側部は肩部から続く小破面と木炭痕。 |
| 13 | 椀形鍛冶滓（小） | F区 | | 7.6 | 7.4 | 3.3 | 177.3 | 7 | H（○） | 上面が平坦でやや扁平な椀形鍛冶滓。右側部が突出気味。左側部は破面。 |
| 14 | 鍛冶滓（含鉄） | F区 | SB－01(P7) | 2.7 | 2.8 | 3.3 | 18.0 | 6 | 銹化(△) | 小塊状の鍛冶滓。上半部に酸化土砂が厚く、放射割れが進んでいる。下半部の磁着が強い。 |
| 15 | 鍛冶滓（含鉄） | F区 | SB－01(P15横穴) | 3.5 | 2.7 | 3.5 | 30.5 | 6 | 銹化(△) | 手前側部が破面となる鍛冶滓。上半部は酸化土砂が激しく、放射割れが中核部まで及んでいる。 |
| 16 | 鍛冶滓（含鉄） | F区 | SB－01(P15横穴) | 4.0 | 3.1 | 2.3 | 27.2 | 8 | H（○） | 表面に黄褐色の酸化土砂の多い鍛冶滓。端部に錆ぶくれ。磁着は強い。 |
| 17 | 鍛冶滓（含鉄） | F区 | SK－219 | 3.0 | 2.1 | 1.2 | 7.6 | 7 | 銹化(△) | 扁平な薄板状の鍛冶滓。下面の突出は酸化土砂。上面は平坦で左半部は錆ぶくれの欠け。滓片か。 |
| 18 | 鍛冶滓（含鉄） | F区 | SK－304 | 2.9 | 2.3 | 2.2 | 9.2 | 6 | 銹化(△) | 酸化土砂に覆われた小塊状。わずかに錆ぶくれの欠けあり。 |
| 19 | 鍛冶滓（含鉄） | F区 | SK－304 | 2.9 | 2.3 | 1.4 | 10.4 | 4 | 銹化(△) | 扁平な小塊状の鍛冶滓。点々と滓部が露出し、やや風化気味。一部が銹化している。 |

## Tab. 44　鍛冶関連遺物　一般観察表②

| 構成No. | 遺物名 | 地区名 | 遺構名 | 計測値（cm） | | | 重量（g） | 磁着度 | メタル度 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 長さ | 幅 | 厚さ | | | | |
| 20 | 鍛冶滓（含鉄） | F区 | SK－304 | 3.5 | 2.6 | 2.3 | 20.9 | 6 | 銹化(△) | 下面が丸みをもった冶滓。小塊状で右手肩部には黒褐色の流動滓がのる。手前側に錆ぶくれの欠けあり。 |
| 21 | 鍛冶滓（含鉄） | F区 | SK－304 | 2.9 | 2.7 | 1.5 | 10.9 | 7 | H（○） | 分析No. 5 |
| 22 | 鍛冶滓（含鉄） | F区 | SK－201 | 3.7 | 2.7 | 1.7 | 14.2 | 5 | H（○） | 扁平な鍛冶滓。各面とも木炭痕による凹凸あり。磁着は中核部が強い。 |
| 23 | 鍛冶滓（含鉄） | F区 | SK－304 | 3.1 | 2.4 | 2.2 | 15.1 | 8 | H（○） | 分析No. 6 |
| 24 | ガラス質滓 | F区 | SK－197 | 3.3 | 5.1 | 2.9 | 29.5 | 1 | なし | 上面には気孔の激しい濃緑色から黒色のガラス質滓。この部分は羽口由来の滓か。下半部は灰褐色で部分的に明白色。粗い砂粒が一部に残り、鍛冶炉の炉床土の滓化物か。 |
| 25 | ガラス質滓 | F区 | SB－01(P3) | | | | 3.2 | 1 | なし | 黒褐色の完形のガラス質滓。上面には光沢あり。側面から下面には木炭痕が目立つ。 |
| 26 | ガラス質滓 | F区 | SB－01(P3) | 3.4 | 2.3 | 2.7 | 15.4 | 1 | なし | 表面や内部にも気孔あり。やや比重が高く、石の可能性あり。 |
| 27 | 鉄製品(棒状不明) | F区 | SK－197 | 6.6 | 2.0 | 2.0 | 9.5 | 6 | H（○） | 分析No. 7 |
| 28 | 鉄製品 | F区 | SK－252 | 7.3 | 4.5 | 2.8 | 60.9 | 6 | H（○） | 平面、楕円形の板状の鉄製品。酸化土砂が厚く、表裏面に亀甲状の放射割れが激しい。鋳造品の破片の可能性あり。 |
| 29 | 鉄製品(板状不明) | F区 | SK－304 | 3.7 | 3.6 | 0.6 | 13.9 | 6 | 銹化(△) | 分析No. 8 |
| 30 | 鉄製品 | F区 | SK－304 | | | | 4.3 | 4 | H（○） | 細長い不整三角形気味の鉄製品。中空で錆ぶくれによりふくらむ。上面はV字状、左端部は急角度で折り曲げられている。故鉄の破片か。 |
| 31 | 羽口 | F区 | SB－01(P12) | | | | 60.3 | 1 | なし | 羽口の先端部破片。先端部寄りの外面にはガラス質の発泡した滓。羽口胎土はきめの細かいもので、微細な砂粒を含む。先端部の一部が欠落したまま使用。 |
| 32 | 羽口 | F区 | SK－197 | 5.4 | 5.3 | 1.9 | 58.4 | 2 | なし | 分析No. 9 |
| 33 | 羽口 | F区 | SK－304 | | | | 24.6 | 1 | なし | 羽口先端部の小破片。全体に強く滓化している。細身の羽口か。身厚も薄い。先端部のガラス質滓の表皮はうぐいす色。羽口胎土は極めて粗い粘土質。練り不良。 |
| 34 | 羽口 | F区 | SK－304 | 5.2 | 6.5 | 2.4 | 83.2 | 3 | なし | 分析No.10 |
| 35 | 羽口 | G－2区 | SK－458 (P20／22) | | | | 253.0 | 2 | なし | 羽口体部から基部側の破片。先端部は欠落し、わずかに灰色の被熱部が残る。外面は長軸方向へナデ。基部は平坦に切りそろえられる。通風孔部は右半部が直孔、基部側がラッパ状に開く。胎土はきめが細かく、微細な白色粒子が目立つ。成形は粘土板を二重に巻き付けか。 |
| 36 | 羽口 | G－2区 | SK－485 (P24) | | | | 115.9 | 2 | なし | 羽口の体部から基部側の破片。やや短く、基部側の肩部が丸みをもつ。基部の平坦面には砂粒の圧痕。通風孔部や胎土は35に似る。ただし前者より全長が短いタイプ。 |
| 37 | 砥石 | F区 | SK－304 | 4.2 | 5.5 | 3.0 | 64.0 | 1 | なし | 自然石の砥石。上面と手前側部のみ生き、他は破面。上面に左右方向の砥面。石質は頁岩または砂岩、 |

## Tab. 45　鍛冶関連遺物　一般観察③

| 構成No. | 遺物名 | 地区名 | 遺構名 | 計測値（cm） | | | 重量（g） | 磁着度 | メタル度 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 長さ | 幅 | 厚さ | | | | |
| 38 | 椀形鍛冶滓（含鉄） | F区 | SD－12 | 4.3 | 4.3 | 1.9 | 23.2 | 2 | なし | 下面に粗い砂粒主体の鍛冶炉の炉床土の固着する薄手の椀形鍛冶滓。上面はガラス質で発泡。短軸方向に大きく反る。滓は気孔が粗い。 |
| 39 | 椀形鍛冶滓（含鉄） | F区 | SD－12 | 6.3 | 3.6 | 2.8 | 36.6 | 4 | なし | 発達が不十分な椀形鍛冶滓。各面とも木炭痕が乱雑に残る。上面は二段気味。 |
| 40 | 椀形鍛冶滓（含鉄） | F区 | SD－12 | 6.7 | 5.3 | 2.7 | 96.6 | 7 | 銹化(△) | 左上手側部に破面をもつ椀形鍛冶滓。上面中央部はガラス質滓が上方に突出。下面は木炭痕が連続し、やや不規則。左側肩部には羽口由来の粘土質の滓。 |
| 41 | 鍛冶滓 | F区 | SD－12 | 2.7 | 3.3 | 2.6 | 24.2 | 6 | 銹化(△) | 酸化土砂に囲まれた小塊状の鍛冶滓。左側部から下面にかけて錆ぶくれや黒錆のにじみが目立つ。磁着も左側が強い。 |
| 42 | 羽口 | F区 | SD－12 | | | | 24.2 | 2 | なし | 羽口の先端部の小破片、先端部外面が黒色ガラス質化し、ひび割れから部分的に脱落したまま使用、胎土はきめが細かく、白色の微細な砂粒が目立つ、34と似た資料。 |
| 43 | 羽口 | F区 | SD－12 | | | | 83.7 | 1 | なし | 羽口の体部破片。外面には長軸方向への擦痕。通風孔部は先端側は直孔で、基部側は開く。外面は発泡部から被熱部まで。胎土はきめが細かく白色の微細な砂粒が目立つ。 |
| 44 | 羽口 | F区 | SD－12 | | | | 120.7 | 2 | なし | 羽口の体部破片。やや開き気味のタイプ。通風孔部はわずかに弧状で直孔気味、内面には回転方向のナデ痕が残る。外面は薄い滓化部から被熱部までで、表面には指頭痕が残る、胎土はきめが細かく、砂粒とわずかな籾殻が混和されている。 |
| 45 | 炉壁（鍛冶） | F区 | SD－12（南端円形土壙上面） | 13.5 | 12.8 | 6.6 | 549.1 | 2 | なし | 分析No.11 |
| 46 | 炉壁（鍛冶） | F区 | SD－12（P685） | | | | 1056.7 | 1 | なし | 4片ほどに割れているが、もとは同一の個体。多量に珪化木が練り込まれた、ざっくりとした胎土。表面は4面ほどの面からなり、部分的に吸炭。下面には吸炭部がなく、地面との接地面か。左側部と短軸側の両側部が意図的に切りそろえられている。 |
| 47 | 羽口 | G－2区 | SD－32（南側拡張部分） | | | | 345.4 | 1 | なし | 羽口の体部から基部までの破片、先端部は欠落し、外面は長軸方向へのケズリとナデ。基部は平坦に成形され、外面にケズリ具の止め痕が連続的に残る。通風孔部は先端部からやや開き気味。外面は薄い滓化部から被熱部まで。胎土はかなりきめの細かい粘土質で、粗い砂粒がわずかに混和される。 |

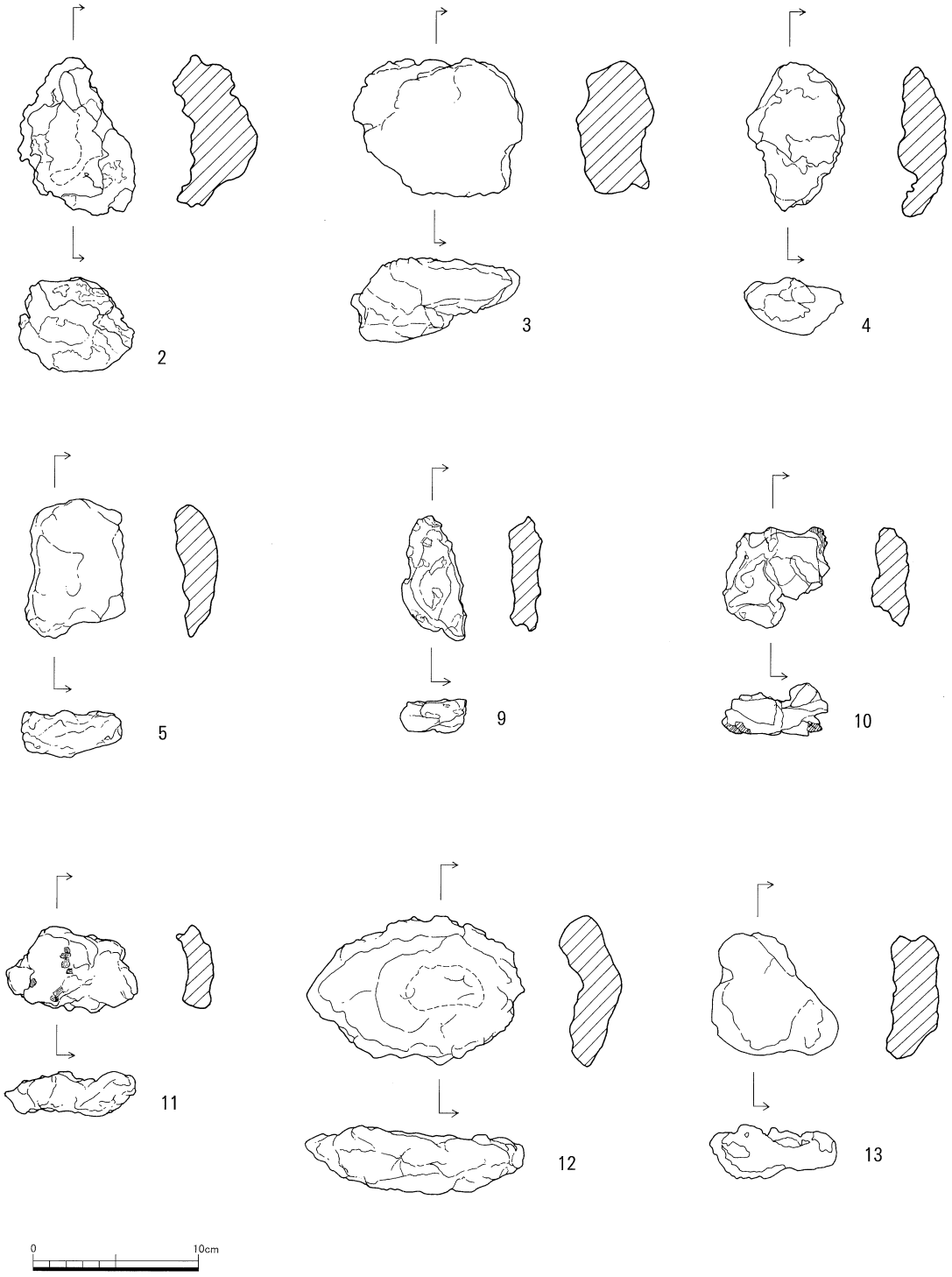



Fig.282　鍛冶関連遺物 実測図①（椀形鍛冶滓、Ｓ＝1/4）

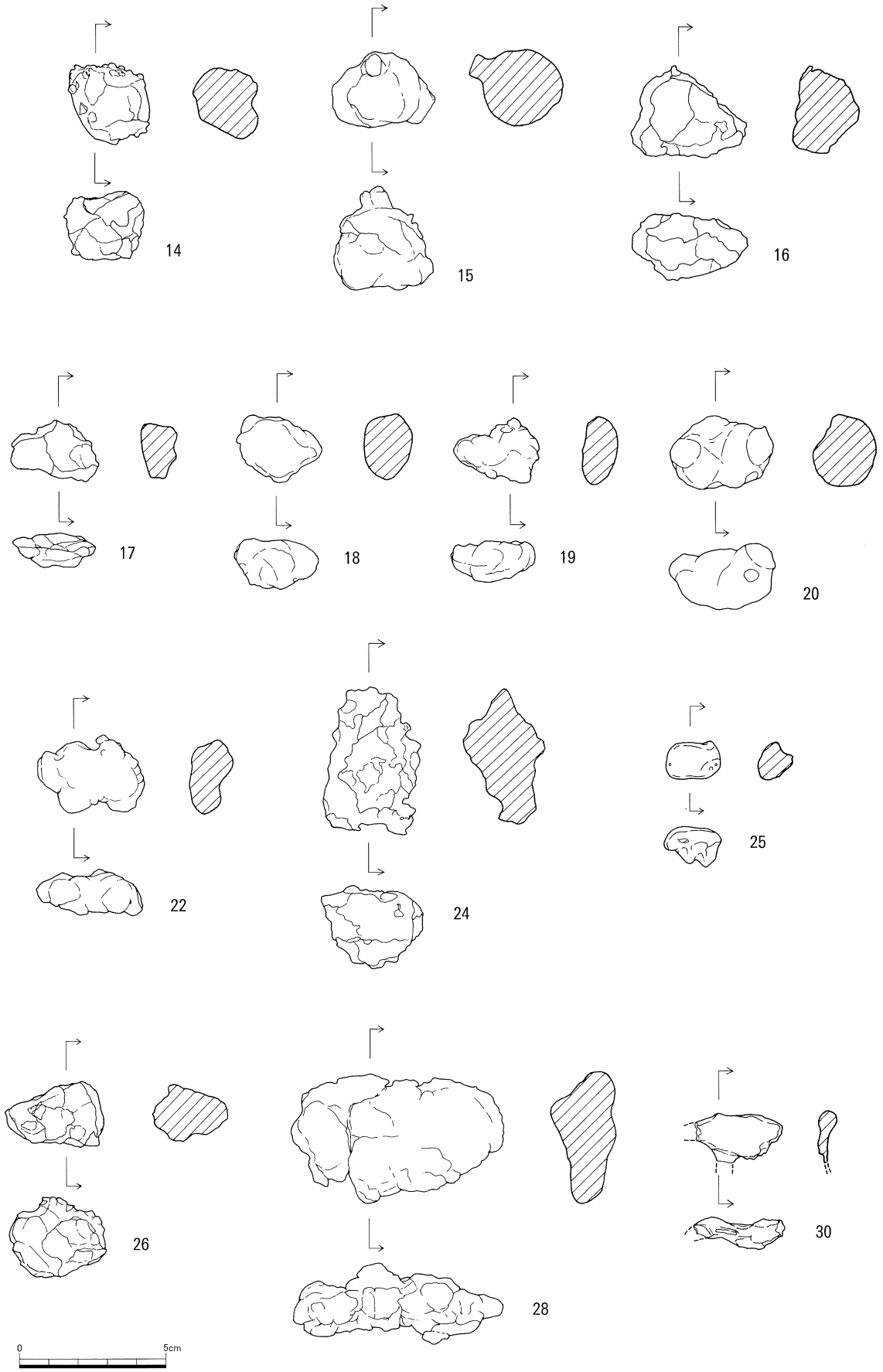



Fig.283　鍛冶関連遺物 実測図②（鍛冶滓、ガラス質滓、鉄製品、S＝1/2）

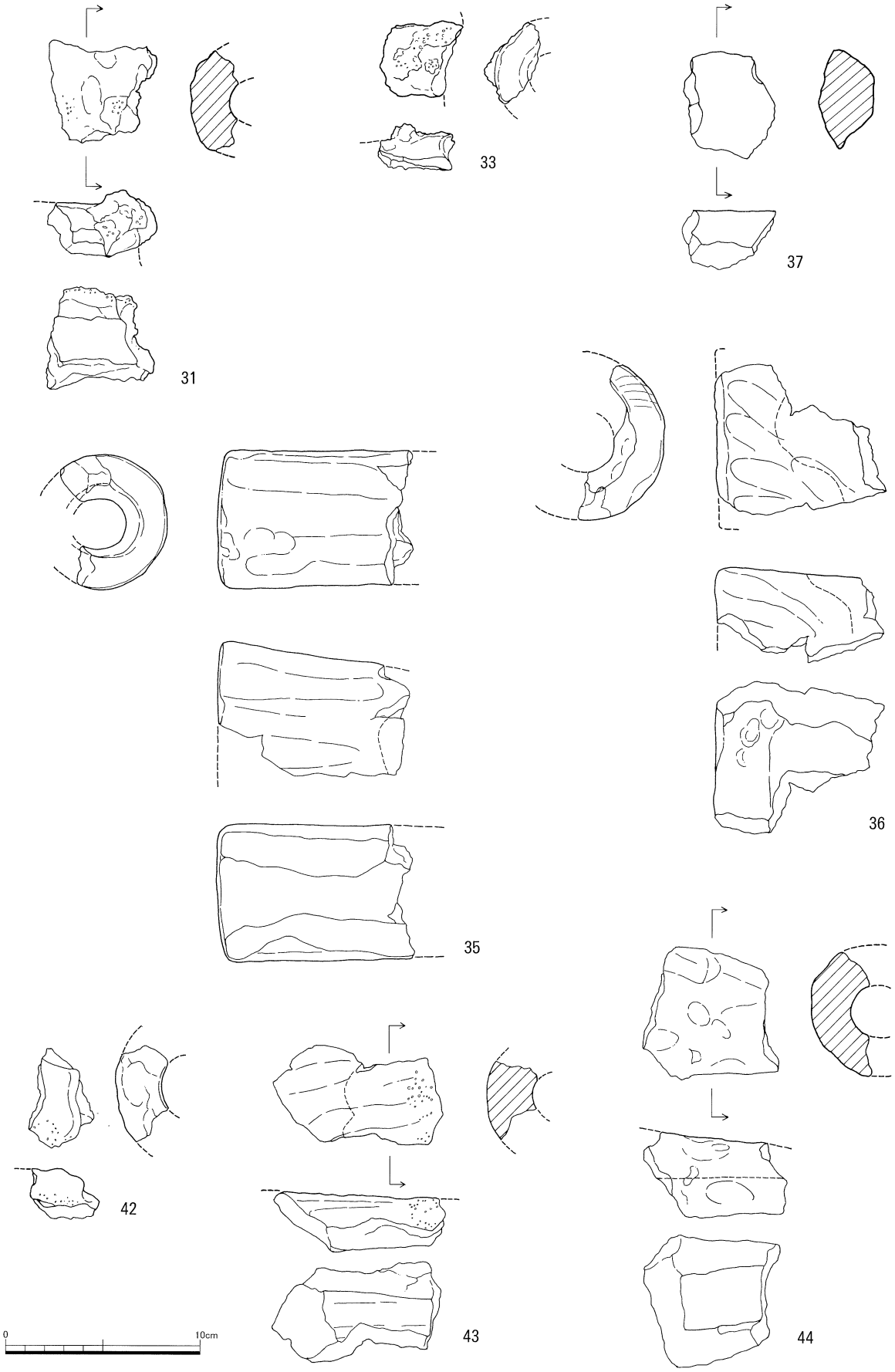



Fig.284　鍛冶関連遺物 実測図③（羽口、砥石、S＝1/3）